
異世界エース

兄二

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界エース

【Nコード】

N6931W

【作者名】

兄二

【あらすじ】

地球軍人型機動兵器パイロット、望月虎鉄。エースと呼ばれていた彼は、最後の任務を終えた時、異世界に召喚される。

召喚されたのは中世ファンタジー世界。龍が闊歩し魔物がうごめき、魔術と科学をあわせたような巨大なロボットが存在するアンバランスな世界。

その中で、虎鉄は召喚されし者として人型機動兵器SHに乗れと言われる。

召喚当初、最後の任務を終えたためか、無気力状態だった虎鉄だが、

特別な機体のAI部分を担う少女や、彼の専属メイドとなった少女との出会いを経て、彼は事件に巻き込まれていく。

つまるところ、元エースが、女の子と機体に乗り込んで戦う話。

主成分は、主人公のチートパイロットぶり、女の子との絡み、一抹のファンタジー成分です。

ブローグ・エース

始まりは、ふと突然に。

宇宙。

黒が支配するその空間にて、人型機動兵器が流星の如く駆けていた。

『望月少尉！ 聞こえますか！？ 目標まで後五百メートル！！』

コクピットの中に響く声を、男は黙殺した。

悪意ではなく、余裕の無さを以って返す。状況は、返事も出来ないほどには、切迫していた。

前方には起動寸前の敵、人型機動兵器。

そして、それを守るような、集中砲火の嵐の中を、機体は駆ける。ただ、黙して、男は――、地球軍、望月 虎鉄は前へ向かって機体を走らせた。

前方にある、ソレは危険だ。

火星で建造された新兵器。時空間圧縮という新技術を用いて造られたその機体は無人機であり、一度起動すれば、誰も止められない、破壊を撒き散らす修羅と化す。

追い詰められた、火星軍の最後の一手。

それを止めるために、虎鉄はひたすらに、敵弾を避け、その機体へと肉薄する。

『ミサイル！ アラート！！』

年若い通信士の男の声も、どこか遠い。

ただ、目前にミサイルが迫ってくるのが見える。

虎鉄は半ば無意識に操縦桿を左へ倒した。

それに反応して、大きく左に逸れる機体。

背後で、爆発が巻き起こる。

避けた。だが、それでは終わらない。

すぐさま、虎鉄は機体を上下左右へと激しく揺さぶる。

駆け抜けていく閃光。

もう、シールドは無い。避ける他の手段も無かった。

そう、もうシールドはないし、左腕もない。

ライフルも捨ててきた。ミサイルも、何もかも。ウェイトになるからだ。

防いだところで、倒したところで、焼け石に水。

だから、あるのは、手の中のレーザーブレード一本だけ。

それだけで、敵機五百の集中砲火を潜り抜け、最終兵器を破壊する。

それでも、虎鉄は呟いた。「なんと簡単な任務か」。

喉が渴いていた。まるで砂でも多量に飲み干したように、水分はどこかへと消えていた。

それでも機体は飛び続ける。

『目標との距離二百！！』

思えば、この通信士とも長い付き合いだ。

心のどこかで、声でも掛けたいと思ったが、声は出なかった。

だから、モニタの向こうに無理やりに笑みを作って返す。そして。

『有効射程距離に入ります！！』

捉えた。

「……お」

青い機体が、たった一本のブレードを構える。

「お」

枯れたように思えた喉から、雄叫びが漏れた。

「おおおおおおおおオッ!!」

その距離は。

奇跡の距離は。

——零に。

『目標、撃破!! やった! やりました、虎鉄さん!!』

どっしりとした機体の胸を、ブレードが貫いている。

通信士の声で、虎鉄は終わったのだということを実感した。何か、言葉にしようと思ったが、やめる。

どうせ、声は出ないだろう。

そうして、虎鉄はシートに沈み込むように背を預けた。終わった。

そう思っ、大きくため息を吐く。

その時。

『エネルギー反応増大……っ!? 虎鉄さん!!』

「……、ああ」

機体の方でもそれは捉えていた。

目の前の機体の中でエネルギーが爆発しようとしている所を。

この最終兵器の圧縮された時空間が、元に戻るうとしているのだ。周囲にいた火星軍の機体は蜘蛛の子を散らすように逃げ出している。

だが、虎鉄の機体は動かない。

動けなかったのだ。

機体のバーニアは焼け付いていて、腕や足も衝撃でろくすっぽ動かない。

そして、虎鉄自身も、疲労で指一つ動かない。

だから、虎鉄は枯れた喉を振り絞った。

「……じゃあな」

光の奔流に飲み込まれる。

それが、宇宙を駆けたエースの最後だった。

『遅いぞコテツ!!』

「と、言われても……、な!」

広い荒野で、機械の巨人が剣で打ち合う。

まるで、騎士甲冑じみたデザインの、二人の巨人は、荒野を飛び跳ねては斬り合っていた。

「くっ」

——異世界へと呼び出され、望月虎鉄が、コテツ・モチツキとなつてから、一週間が経過していた。

ブログ・エース（後書き）

見切り発車でスタート。

テンプレ異世界モノを一度やってみたかった心境。

読み切りレベルで終わるかも知れませんが、よろしければ、お付き合ってください。

1話 白黒の巨人

虎鉄が爆発の後に目を開いたとき、そこにいたのは閻魔でも神でもなく、ただの女だった。

その女は己を王女だと言い、そして、魔法で虎鉄をこの世界に招いた、と言った。

虎鉄は何の疑問も持たず、それを受け入れる。

『時空間圧縮の爆発に巻き込まれれば、こうなってもおかしくは無いか』と。

そして、あてもない虎鉄は、言われるがまま、ソムニウム王国軍のエトランジエとなった。

「コテツ。お前は本当にエトランジエなのか？」
「それは王女が保障しているが」

今日の調練を終え、機体から降りて、コテツの教育を担当する騎士団の団長、シャルロツテ・バウスネルンと王城の廊下を歩いていた。

「それにしては弱すぎないか？ コテツ。お前は私の部下の中でも中の下だ」

「ならば、そもそも他の異世界人はどれほどだったんだ？」

”エトランジェ”。この言葉が、この世界でコテツを括る言葉だ。異世界から呼び出される、人型機動兵器、シユタールヘルツォーク、通称SHの操縦に長けた、もしくはその素養がある人物のことだ。

この国は、いつの時代も必ずエトランジェを一人保有する。彼らは、戦争があれば駆り出される他、国際親善試合などに出場し、国の立場を担うこととなる。

「……そうだな。先代は素晴らしい操縦技術の持ち主だった。我が国では思いもよらない操縦技法を行っていた。曰く、俺の動きは”ろぼあく”の”げえむ”と同じ。だそうだ」

「……」

コテツは押し黙った。

言葉の端々から、どうにも、歴代エトランジェが異世界人だということを痛感する。

又聞きとなるが、先代は瞬く間に操縦技術を吸収し、トップクラスの操縦士になったと言う。

そんな中、

「お前は、最初からSHに乗れた割に」

そう言って、シャルロットはその眉間に皺を寄せた。

シャルロットは、二十過ぎくらいの金の長髪をストレートに伸ばした女で、訓練中などの戦闘時はポニーテールにして括っている。

目の色は赤みがかっていて、つり目気味。身長は百七十センチ後半と言ったところか。

「期待されても出来ることと出来ないことがある」

対するコテツは、平均的な日本人の顔をしていた。

短い黒髪と、黄色人種らしい肌。その中で身長だけは百八十センチ超と高いほう。

顔つきは精悍であると言っても良いのだが、どうにも顔の印象は薄い。

そして、二人は揃いの黒い軍服を着ていた。

「早く使い物になれ。親善試合で負けるわけにはいかん」

そう言っ、シャルロツテは横道に逸れていく。

コテツは直進した。部屋へと戻るのがそちらだからだ。

「……一週間。すぐ過ぎ去ったが、十分長い期間だったか」

そう呟いて、コテツはベッドに倒れこんだのだった。

一週間。

その期間は、周囲の人間がコテツに失望するのに掛かった時間だ。操縦系統が、コテツの居た世界の機動兵器、ディストラクションフレームDFと同じだったため、初めからSHに乗れたコテツへの期待と、雑兵と一対一で互角がやっとだったコテツへの失望の落差は非常に大きかった。

おべっかを使って擦り寄ってきたSH乗りは三日で目つきを馬鹿にするようなものへ変えた。

おこぼれに預かるうとやってきた王の家臣たちは六日で姿を消した。

今ではまともな態度を取るのは、シャルロッテと、コテツを召還した本人である王女くらいか。

他にもいるが、実に数が少ない。

「コテツさん、起きてください。コテツさん」

そして、今、コテツに声を掛けている女性も、数少ないその一人だ。

「何か、用があるのか？」

すぐさま、コテツは身を起こした。

すると、メイド服の女が視界に飛び込んでくる。

リーゼロッテ・クリッツェン。エトランジエであるコテツ付きのメイドである。

茶色の髪を三つ編みにし、後頭部で丸く纏めた、碧い目のおっとりとした女性だ。

印象的なのは、頭にある狐耳と、大きな尻尾。否応なく、異世界を感じさせてくれる。

「アマルベルガ様がお呼びです」

「わかった、すぐ行くこつ」

言って、コテツはベッドをから出て外へと向かった。
アマルベルガとは、コテツを召還した張本人、王女である。
待たせるわけには行かない。

コテツは、リーゼロッテを伴い、廊下を歩くこととなった。

「コテツさん、もう、ここには慣れましたか？」

「……一応はな。慣れるものだ。機動兵器が当然のように存在するのに、生活レベルは中世と大差ないこのアンバランスにも」

「よくわかりませんが、コテツさんはことはまったく違ったところから来たんですね？」

「宇宙をふらふらと、だ」

「宇宙？」

「そう、宇宙だ。宇宙で、火星の人間と戦っていた。思えば長い戦争だったな」

この世界の機動兵器は密閉性が無いものが多い。

例えば宇宙を見てきた者がいても、それはほんの一握りよりもさらに少なく、天体に関する学問もあまり進んでいないため、この世界では宇宙はどこか遠いものだった。

「どうして、戦争が起こったんですか？」

「早くどこかに行け、邪魔だから。と言っている、いざ手を離れるとなると惜しくなった。だから、飼育殺しにしようとして手を噛まれた」

地球が人口の限界を迎え、余った人類を火星に押し込むことにしたが、火星から取れる資源、そして移民の労働力は惜しかった。

だから地球側が指導の名目で圧政を働き、力を付けないように上手く搾り取った。

ただし、それでも不満とは爆発するもので、戦争は起こった。たとえ、物が無くとも不満によって生み出された鬼気迫る火星軍の戦いは、一時期腑抜けた地球軍を追い詰めるほどだった。

それが、コテツの駆けてきた戦場のすべて。

コテツが、エースだった空。

「帰りたいですか？」

こちらを気遣う様な問い。

「……いや、そうでもない」

帰りたいと、不思議と思えないのは、すべきことを終えてしまったからだろうか。

コテツの心には一切の焦りが無かった。

「任務中と、爆発前。二度も死んだと思ったからな。どこにも何の実感もない」

帰ってすることも無ければ、戦争終結後に結婚を誓った女性もない。

「逆に、いいのかもしれないな。役立たず判定を受ければ、どこかの田舎で畑でも耕そうか」

「だ、大丈夫ですよ、コテツさん！ きっと、すぐに上手になります。焦らないで、ゆっくりやっていけば」

言われて、コテツは曖昧な笑みで返した。

（果たして、俺に出来るだろうか……）

最後の任務を終えるまでの、あの頃の熱は、今は既くない。

まるで、燃え滓のような、燃え尽きた灰だ。

と、そこでふと、中庭に面した廊下から、一機のSHの姿が見えた。

「……あれは？」

黒と白の、騎士甲冑を模したようなデザインとは一線を画す、どちらかと言えばコテツのいた世界の機動兵器に近い空気。

下半身のがつしりとした空気とは対照的に、上半身はスマート。腰元には二つの巨大なバイNDERが付いており、力強い印象を与える機体だ。

腕に刻まれた不可思議な文様が、何故かコテツには印象的だった。

「ディステルガイスト。我が国の所有するアルトの一機です」

リーゼロットは、誇らしげに笑う。

「アルト……、初期型SH、だったか」

「はい。最初のエトランジェ様が造ったSHバリエーションの一つです」

「なぜ、中庭に飾ってあるんだ？」

SHは、兵器だ。なのに、中庭にまるで飾るように放置されているのには、違和感がある。

「パートナーが、いないんですよ。気難しい機体みたいで。たまに活躍してるみたいなんですが」

「たまに？」

「私が生きてる間に一回だけ、です。よほど腕のいい操縦者じゃないと認めてもらえないらしいですよ」

「先代エトランジエは？」

コテツにとってはSHもただの兵器としか映らない。

だから、兵器が人を選ぶと言うのはどうにもピンとこないものだったが、先代は大層操縦が上手かったのではないかと思いついた。それほどの人物ならば、このような機体でも乗りこなせたのではないかと。

が、リーゼロッテは首を横に振る。

「一度、乗ったことはあるらしいですが、曰く『あれはピーキーすぎる。ハイスコア狙い向けだけど、ハイスコアなんて狙う場面はない。元々パイロットじゃないからそういう技術も操縦勘もないし、多分年単位かけても使いこなせないよ。そもそも元がもやしの貧弱一般人じゃ即ミンチ』だそうです」

その言葉に、コテツは先代への観を改めた。

ゲーム、ロボアク、などの語彙がしばしば出てくる割に、戦争に対してはシビアな考えを持った人物だったらしい。

ハイスコアを喜び勇んで狙うような人物でないことには、好感を覚える。

「なるほどな」

「すごい人だったらいいんですけどね。戦闘の呼吸への勘が鋭くて、隙を挟り込むのが得意だったらしいです」

「そうすると、ずいぶん我侭な機体だったんだな」

「まあ、アルトなんて搭乗者が決まっているほうが稀なんですけどね」

言いながらも、二人はデイステルガイストの前を通り抜ける。
二人を、モノクロの巨人が見下ろしていた。

1話 白黒の巨人（後書き）

主人公最強を標榜し、事実その通りになる予定ですが、見せ場まではまだしばらく、と言ったところ。

2話 灰と塵。

王女の部屋。

上品な調度で纏められたその部屋に、王女が優雅に椅子に座っていた。

「よく、来たわ」

「用件は如何様な？」

本来なら謁見という方向でも良かったのだが、今のコテツの立場は非常に微妙である。

現状のコテツの状況を耳目に触れさせるには、リスクが高かった。そんな糾弾されかねない状況。

それ故に、なんらかの噂が立つ可能性に目を瞑って、王女はわざわざ自分の部屋にコテツを呼んだ。

「調子を聞きたいだけよ。教えてちょうだい」

「変わりなく。良くも悪くも」

「そう」

落胆する様子もなく、アマルベルガは言った。

「まあ、所詮一週間と言ったところかしらね。これから、精進なさい」

「了解」

「貴方はやつのことで引つ掛けて来た私のエトランジェなのだから」

アマルベルガ自身は、魔法の歴代の使い手というわけではなく、魔法処理レベルも最高位というほどではない。

故にこそ、此度のエトランジェ召喚は難航したと言う。

（本来なら何も引つかからなかったところを、時空間圧縮の開放に巻き込まれたせいで俺が引っこかかりやすくなった、と言ったところか）

心中、コテツは考察するが、言うような事情でもなんでもない。押し黙るコテツに、アマルベルガは続けた。

「不完全ながらも、急ぎ召喚を行ったのは不穏な隣国との戦いに備えるため。エトランジェは我が軍の柱だわ」

異邦人を柱にするのは如何なものかと考えたが、コテツは何も言わないことにする。

「故に、急ぎ強くなりなさい。今はいるだけでも構わない、それだけでも牽制にはなるから。だけど、そのうちすぐに貴方の實力は世間に晒されるでしょう。そうなったときに、我々の命日かもしれないわ」

「善処しましょう」

エトランジェは滅法強い、一個師団とやりあえるクラスだ。というその風評がある限り、相手はコテツと、ひいてはこの国に手を出すことを躊躇ってくれるだろう。

問題は、それを本当にしなければいつかはばれる。そして、この国の軍にとってエトランジェが心の支えだと言うのなら、エトランジェの弱さは士気の低下に繋がり、戦場は不利になる。

（どんな国だ、一体……）

もしくは、世界すべてが抱える問題なのか。

「もう戻ってもいいわ」

「了解」

退室しながら、コテツは思いを馳せる。

果たして、たった一機の機体がこの世界に与える影響力はどれくらいだろうか。

確かに、コテツの世界にも一機で戦況を変える者は居た。そもそもコテツもその一人。

だが、この世界はそれ所ではない。

たった一機で世界を変えかねない。国一つを滅ばしかねない。

「リーゼロッテ。ここで分かれるでしょう。少し中庭で休憩してくる」

「あ、はい。ではここで」

すると、リーゼロッテは気を遣ったのか、何も言わずに歩いて去った。

コテツは中庭に出て、草の上に寝転ぶ。

「……エースか。笑わせる」

そう呟いて、コテツは目を瞑ったのだった。

「起きていただけますかね？ その人」

軍人と言う職業柄、コテツは気配に鋭い方だ。

近づいてきた人間が声をかけた時点で、すぐにコテツは身を起きました。

「何か用か？」

起きた視線の先にいるのは、黒髪の少女だ。ぱつと見ショートカットなのだが、首元から太もも辺りまで、尻尾のような髪が一房、まっすぐに流れ落ちている。

「いえね、こんなところで寝ている人は珍しいものですから。気になったんですよ。なんてったって面白そうじゃないですか」

そう言ってコテツを見つめる瞳は金。
年は少女と言ってもいいだろう。

敬語を使っではいるが、その調子は明るく、まったく畏まったものを感じさせない、逆にフランクな空気だ。

衣服は、何故かブラウスに、短いスカートだった。

「君は誰だ？」

「私はあざみ。彼の、エーポスですよ。今代エトランジェさん」

そう言っで、彼女は背後のモノクロの巨人を指差した。

「エーポス……。君が、ディステルガイストの」

エーポス。初期型SHに存在する、言わば女性型AI。
強力な機体の制御を一手に担う存在。

「本当に、人型なんだな。不可思議だ」

実際に出会ったのは初めてだったコテツは、好奇の視線を向ける。
その視線に怒ることもなく、あざみは笑った。

「仕方ありませんね。初代エトランジェは機械工学に長けた人物
でしたが、機体制御のAIは専門ではありませんでした。それ故に、
魔術を使っで作り出した人工生命体である私たちがAI制御を担当
するのです」

「なるほどな」

「それに、我々アルトは、機械と魔法のハイブリット。ただのAI
では制御し切れませんからね」

誇らしげに、あざみは言った。

コテツは、その言葉に首を傾げる。

「ふむ、では現行機であるノイにエーポスがない理由を聞いても？」

最初期に造られ、初代エトランジェが何らかの形で関わったSHをアルトと呼び、以降、この世界の人間がそれを解析して製作した機体をノイと区別する。

その、ノイにはエーポスはいない。

「当然ですよっ、それは。私たちアルトを模して造ったのがノイ。性能は足元にも及びませんから。エーポスはありません」

「そうか。だとすれば大層強いのだろうな。君は」

「貴方はどうなんですか？パイロットとして。ねえ？今代さん」
「俺は、今の所練習機さえ乗りこなせそうにないからな」

諦めたように、コテツは言う。

「練習機を、ですか……、それは大変ですね」

慰めるでもなく、あざみは返した。

むしろ、面白くなさそうな目をしている。

やはり、エーポスとしては操縦の得手不得手は重要な評価項目なのだろうか。

だが、慣れた視線だ。コテツはあっさりと受け流す。

「今回のエトランジェは外れみたいですな」

「かもしれん」

「では、さようなら」

あっさりと、会話は打ち切られ、あざみは自分の機体の中へと入っていった。

コテツは、部屋へと戻ることにした。

コテツは、部屋で一人考える。

（期待……、するだけ無駄だ）

期待には応えられそうもなかった。

期待に応える気概がないのだ。

むしろ、あざみのような反応がいい。

あれくらい、淡々としているほうが気が楽だった。

期待も失望もなく、事実だけを見つめる。

（そう思えば……、中庭に居たときがもっとも心安らいたかもしれないな）

そして、いつそ逃げ出してしまうおうか、と少し考えた辺りで、その考えをコテツは笑った。

逃げてどうする。やりたいこともないくせに。

どうせどちらにしたって朽ちていくだけ。

逃げてでも逃げずとも変わらない。

（まあ……、結局はのうのと生きて、いつかどこかで死ぬだけか）

国はエトランジェを失いたくない。

それゆえ、コテツが戦場に出られるレベルになるまで、戦闘に出そうとはしないだろう。

しかし、コテツはこれ以上に操縦が上達する気がしない。

そのため、いい加減に痺れを切らした上が彼を不要と判断するその時まで、コテツは生きていられる。

（しばらくは……、ぼうつと過ごしてみるか）

死ぬその時まで、ぼんやりと物事を考えながら過ごすのもいい。
と、コテツは考えていたが。

しかし——、そうはならなかった。

「ジルエットの空中戦艦！ 何故ここまで接近を許した！！」

「アマルベルガ様！ 相手はステルスを搭載していたようです！」

「敵SH、来ます!!」

慌しい周囲。

聞きなれた音。

ただ、ぼんやりとコテツは空に浮かぶ鉄の塊を眺めていた。

2話 灰と塵。（後書き）

早く無双までたどり着きたいところ。

3話 無言の棺

その日の訓練を終え、コテツは王城の廊下を歩く。

「コテツ。お前もすこしはマシになってきたんじゃないか？」

シャルロッテが、言う。

「そうか？」

コテツが聞き返すと、シャルロッテは珍しく笑みを返した。

「まだ色々と粗末なものだが、しかしたまにこちらが驚くような良い動きをする。そういう奴は良い操縦士になれる」

顔には出なかったが、むしろコテツの方が驚いた。

まさか、この鉄面皮が笑みを向けて来ようとは。

少し、むず痒かった。

「しかし、それもこれからの訓練次第だ。さ、明日も頑張れよ」
「了解」

それを求められる場面ではなかったがコテツは敬礼で返した。

軍人時代の性、と言ってもいい。ただ、なんとなく敬礼で返し、シャルロットは満足したようにコテツを見て、廊下の道を横に外れた。

そうして、去っていくシャルロットを見送って、コテツは中庭に出た。

草原に転がって、目を瞑る。

思い出すのは、シャルロットの『お前もすこしはマシになってきたんじゃないか?』という人を褒める言葉。

それともう一つ。訓練中にだが、王女騎士団長に言われた言葉がある。

『まだダメなんですか? 此度のエトランジェは本当に使い物になりませんねっ……』

コテツは、目を開いて空を見上げた。

(嬉しくも悔しくもないとは、随分末期だな……)

腑抜けた、と言う表現が正しいのか、日和ったというべきか。褒められて発奮することも、罵られて悔しがることもない。

もし、そんな状態なら、こうして中庭に寝転がっているわけもない。

そんなコテツに語りかける人影があった。

「あら、また来たんですか貴方」

「悪いか」

「悪くありませんけど、珍しいですよ? 元々ここに来る方なんてほとんどですし。それに、エトランジェ様だからって特別扱いしませんし?」

そのあんまりと言えばあんまりなまっすぐな言葉に、コテツは久

々に口の端を吊り上げて苦笑を作った。

「だから、いいんだ」

「はあ……？」

よく分かっていなさげなあざみに、コテツは続ける。

「その方が、気が楽だ」

だから、毎日のように訓練が終わればコテツはここに来るのだ。
あざみは、来たり来なかったりだ。

「あらあら、意外と繊細？　そうは見えませんが」

「正直言つて煩わしい」

はつきりと言うコテツにあざみは苦笑で返す。

あざみはコテツを特別扱いしない。期待もしなければ、エトランジエとして蔑むこともしない。

色眼鏡なしで操縦者としての事実を見ている。

「それをシャルロットに言ったら最後ですよー？」

「それはぞつとしないが」

「足腰立たなくなるまで訓練させられる……、っていうか、王女に
対しても不敬罪じゃないですか？」

「不敬罪で死刑か」

「前代未聞のエトランジエ様ですね」

そうして、二人は少し黙る。

その後、しばらくしてから、ふと、思いついたかのようにあざみは聞いた。

「で、結局、あなたはなにがしたいんですか？」

突然の質問だった。

ただ、あざみの顔は興味津々と言ったところ。

「なにを、とは」

「いえね？　今の心境をどうぞ、と。一部から期待され、多数からは蔑まれる現状に、望まずやってきた身としては」

楽しみに、聞いてくる。

なんとも悪趣味だったが、その気の遣わなさがコテツには好ましい。

「恨むとか、復讐してやりたいとかこれ拉致だろマジで、王家ぐるみとか何考えてんだ殺すぞとか、シャルロツテの胸に顔をうずめてすーはーしたいとかないんですか？」

そして最後に。

「それとも……、一念発起とか、しちゃったりします？」

その言葉に、コテツは一度あざみから視線を外し、中庭から見える空を見上げた。

一念発起できるなら、こんなところには来ていない。
今頃自己鍛錬を続けているだろう。

「何がしたいのかと問われれば、何もしたくない、だ」

正直に言えば、あざみは詰まらなさそうな顔をした。

「どうしようもないへたれですねえ。何食べたらそんな無気力になるんです?」

首を傾げるあざみに、コテツは珍しく冗談で対応しようとする。

「大量の敵軍と、メインディッシュを食べれば、それは満腹に、…!?!」

そんな時だった。

瞬間、大地が揺れる。

地面に寝転ぶ形だったコテツは跳ねるよつに身を起こした。

「まるで艦砲射撃……!?!」

心当たりがある振動。

これは、艦の主砲クラスの一撃だ。

「……あららら、これまずいですよ。宣戦布告も無しに奇襲? 一体守備隊は何をやってたんでしょうね?」

あざみの言葉を背に、コテツは中庭から廊下へ出た。

そして、空を見上げる。

その時、丁度のことだった。

その空に紫電が走り。

巨大な戦艦が空に現れたのは――。

「空中戦艦……、本気みたいですねえ。あちらさんも」「そつ、見えるのか?」

異世界人のコテツには空中戦艦が来た所でどれくらいの意味があるのか分らない。

追いついてきたあざみに問うと、あざみは眉一つ動かさずに答えてくれた。

「視覚的ステルス、あのサイズ、外観から分かるSH搭載可能数からして、敵国旗艦の国宝級の戦艦でしょう。普通は地上戦艦を持てきますから、あのクラスじゃ最悪経費で国家が傾きますよ?」

つまり、国家予算クラスをもって起動させられる戦艦、と言うことらしい。

何にも気づかれずに敵国の喉元に食いつけると考えればそのコストは納得できる。

ただし、一度で決着が付かなかった場合、出費がかさむのだろうが。

「この国にはそれほどの旨みが?」

そして、それを覚悟しての電撃戦。確かに、戦争が長期化するよりは必要な軍事費も軽くなるだろうが、それにしだって博打の要素が強い。

この国に一体何があるというのか。

その質問に、茶化す空気もなく、あざみは答えた。

「私、とかどうでしょう? ね、別に茶化してませんよ? 初代エトランジェのいた国ですから、ハイスペックなアルトの保有数は最大です」

そこまで言われても、今のコテツにはピンと来なかった。

エースとその機体が時として戦場で脅威になることはわかっては

いたが、しかし、アルトはパイロット不在。
はたしてそれだけの価値があるのか。そんな疑問に、あざみは口を開く。

「そもそもアルトなんてほとんど誰も使えないんですけどね。でも
まかり間違つて全部使えるようになったら困るでしょう?」
「ああ、なるほど」

コテツは少々の納得を覚える。敵は馬鹿ではないらしい。
技術は常に革新する。そして、今使えないアルトを使いこなせる
ようになったら脅威が過ぎる。

が、先代エトランジェは強かった。そう簡単に手出しは出来ない。

(見抜かれているぞ、王女……!)

故にこのタイミングだ。先代エトランジェから、今代へ。エトラ
ンジェがいらない、もしくは慣れていなくて役に立たないこの瞬間に
しかこの国を打ち倒せないと判断したのだ。

だから賭けに近い電撃戦に出た、という訳だ。

「それで? 君から見たらどちらが優勢だ?」

「うーん、こっちのぼろ負けですねえ」

あっけらかんと、あざみは言った。

「何故?」

「余裕あの戦艦には50機以上のSHが積まれているでしょう」

「こちらにもSHはあるだろう? しかもここは本拠地だ」

「いいえ。確かに数はありますけどね。常に全部動かせるわけじゃ
ないんですよ。整備環境上、相手の半分動かせばいいほうです」

「……どうかしている」

「とはいえ、こんな奇襲想定されてないんですよ。型破りにもほどがあります。むしろ国境付近のほうがすぐ動かせるSHは多いですよ」

そうして、今度は質問の応対者が変わる。

「貴方は？ どう思います？」

平然とあざみは聞いてくる。

コテツは、思ったことを答えた。

「……その戦力差ならまずいだろう。敵は有能だ」

「どうして判断できるんです？」

「現時点では、アルトがほとんど動かせないこの国はさほど驚異的ではない。しかし、それでも奇襲作戦に出たと言うことは、将来的な脅威、もしくはアルトを手に入れることによる利益を見ている」

「はあ。確かに私もちよつと自信がありますよ。最終的に全部動かせるようになれば驚異的でしょうね」

「だが、それを今の脅威ではない、と目を背けず、今この時が千載一遇のチャンスだと襲ってきた。相手は未来を見ている」

「その場凌ぎを考えて貴方を召喚したこの国とは格が違いますか？」

「君はこの国をどう思ってるんだか……」

あまりにあんなりな物言いに、逆にコテツのほうが微妙な気分になった。

だが。

「大切な国ですよ。いざとなったら私が守りますから——」

そう言つて、彼女は笑顔になる。
気高い獣の笑みだった。

格納庫。

整備員が慌しく動き回るそこにコテツはいた。
そして、それを見つけたシャルロットが、コテツに駆け寄つてくる。

「コテツー!!」

「ああ」

「よく来てくれた」

「呼び出したのはそちらだろうに」

にべもなく言うコテツは、そのままに続けた。

「それで、俺に出撃命令か？ 役に立てるとは思えんが」

当初、コテツが考えていたのはそういうことだった。
人手が足りない。

ならばコテツの練習機も出せるだけ出してしまおうと思ったのだ
ろう、と。

しかし、シャルロッテの返答は、実に予想外だった。

「……違う。お前に出撃命令は出ていない。私はお前に頼みがある
んだ」

「頼み？」

出撃前の兵士に頼まれることと言えば一体なんだろうか。

考えるコテツの肩に、シャルロッテは両の手を乗せて、まっすぐ
に彼の瞳を見た。

「これは私の個人的な願いだ。断ってくれても構わない。関係ない
国のことだと逃げてくれても構わない」

「長い前置きだ。時間はないんだろう？」

シャルロッテがここまで言う頼みを、コテツは断ろうと思わなか
った。

だから、先を促す。

すると、シャルロッテは、苦しそうに、辛そうにその言葉を口に
した――。

「お前にはっ……。ここで王女様を守って欲しい！！」

そして、筋違いなのは分かっている、とシャルロッテは呟いた。

「前の敵は私たちが命を賭けて、意地でも倒す。絶対に、必ずだ。しかし……、もしも、万が一抜けた敵がいたならば」

その言葉を、コテツが遮る。

「期待に添えるとは思えんが。……努力は惜しまん」

真面目腐った顔のコテツに対し、シャルロッテは泣きそうな顔で破顔した。

「ありがとう……、では、私は行ってくる!!」

颯爽と駆けていくシャルロッテをコテツは見送り、自分も自分の機体の元へ。

「これが、俺の棺桶か」

感動もなく、彼はそれを見上げた。
青い、騎士甲冑のようなフォルム。練習機、名前をアインスという。

ここに来て以来、コテツが乗り続けた機体だ。

コテツは、その機体の胸にあるコクピットに乗り込もうと動き出し、声をかけられ振り返ることとなった。

「コテツさんっ」

「……リーゼロッテ」

メイド服と獣耳。遠目に見ても彼女はわかりやすい。

しかし、コテツは首を傾げた。

一体何をしにきたのだろうか、と。

その彼女は、しばらく、何か言おうとしてやめ、口を開け閉めすることを繰り返していたが、ついに、覚悟を決めたのか、コテツに言った。

「死なないでください」

簡潔な台詞。とてもわかりやすい一言だった。

しかし、出会って一週間あまり。それだけなのに、こうして有事の際にわざわざ心配して声をかけてくれる彼女は、大層優しい性分なのだろう。

コテツは、そんな彼女に笑いかけた。

「——約束できんな」

3話 無言の棺（後書き）

次回出撃。

ご意見、ご感想お待ちしております。

4話 エースの空

かくして、敵は来た。

異世界に来て初めて見た飛行を行うSHと、この国のSHが戦闘を行う様子をコテツは最後方で眺めていた。

文字通りの、最後方である。城の目前に立つコテツを越えればもう防衛戦力も何もあつたものではない。

「押されているな」

冷静に、コテツは戦況をそう判断した。

SH戦は空対地なら空の方が有利だ。そして、整備不足か、圧倒的に味方には空戦機体がない。

対空兵器も、撃てば当たるというものでもない。

そして、圧倒的存在感を放つ空中戦艦の存在。

その砲火はもちろんのこと、その存在自体が士気に多大な影響を及ぼす。

「……そして、やはりか」

『前の敵は私たちが命を賭けて、意地でも倒す。絶対に、必ずだ』
そんなものはただの意気込みで、希望的観測だ。
周到な罠を張った上での地上戦ならいざ知らず、この状況ですべてを防ぎきるなど不可能。

高速で迫る航空兵器。レーダーがそれを捉えた。

コテツは、機体の腰のブロードソードを抜く。

そして、唐突に通信が届いた。

『うおおおおおおお!!』

「……うるさいな」

この世界はSH技術以外は中世なこともあって、騎士道精神に重きを置く風潮もまた存在する。

こつもあつさりつながる通信もその風潮から生まれたものの一つだ。

必要があれば切ることも出来るが、自ら切ろうと思わなければ、相手から勝手に通信をつながれる。

名乗りを上げる。裂帛の気合を見せ付ける。勝者と敗者、もしくは好敵手同士が言葉を交わすための仕様。

コテツにはどうも馴染めそうになかったが。

そして、その裂帛の気合を見せ付けた相手は、同じブロードソードを構えて、空中からコテツへと迫ってきていた。

ブロードソード。人間サイズで言えば、80センチくらいの幅広の剣だ。

一般的な機体の大きさは人間の十倍ほどのサイズ、つまり18メートルのものが多く、ブロードソードも八メートルほどのものになる。

これも騎士道的な考え方なのか、それとも、銃器の性能が低いのが悪いのか、SH乗りは剣を重用する。

コテツはそんな考えもないが、練習機であるアインスにこれ以外の武装を搭載することは出来なかった。

『おおおおお!!』

突貫してくる機体。

コテツは、それを横に大きく跳んで避ける。

飛び込むような無様な回避だったが、それでも避けることには成功した。

すぐさま、敵機はターンをし、コテツに突っ込んでくる。

（さて、どうにか止めなければ……）

叫び続ける敵兵とは対照的に、コテツは無言で機体を動かしていた。

シャルロッテの頼みに応えたのだって、彼女と同じく王女を守りたかったのではなく、断る理由がなかったただけだ。
だがしかし。

「約束は、したからな」

二度、三度と攻撃を避ける。

そう、約束はした。

したから、努力は惜しまない。

そして、四度目の突撃。

（生身であれば……、一撃ごとに体が鈍る。ダメージは蓄積し、逆転は出来ない）

コテツは、避けない。

「だがSHならそうではない……！！」

貫かれる機体の腹部。いや、避けたのだ。コクピットには刺さっていない。

コテツは、ここで初めて相手に向かって声を出した。

「捕まえたぞ」

『え？』

ブロードソードを持っていない方の手が、敵機の肩を掴む。

冷淡だったコテツの声は、まるで死神の宣告のように相手に響いたことだろう。

アインスはブロードソードを振り上げ。

——思い切り相手の胸に突き込んだ。

青い機体が、悠然と立っている。
敵機が三機。地に転がっている。

「……最善は尽くしたぞ」

呟くと同時、コテツのアインスが倒れこむ。

結局、コテツの最善、限界はここまでのこと。

コテツに傷一つなくとも、腹を刺され、片腕は千切れ、片足を失った機体はもう動かない。

コテツが取った戦法はまさに肉を切らせて骨を断つ。

腕も機動力も劣るコテツは無傷で勝つことなど考えず、ただ、切らせて隙を見せた相手に一撃必殺を叩き込むことだけを行った。どんなに痛めつけても、動ける限り機体は動いてくれる。それ故の戦法だった。

ただし、その戦い方にはどう頑張っても限界が訪れる。

「ここまでか」

暗くなったコクピットでコテツは無感動に呟いた。

「まあ、余生にしては上々か……」

ここで待つことは、座して死を待つことと変わらない。

この戦闘はどう考えても負け戦だ。

はたして、エトランジエは生け捕りにしてくれるだろうか。

いや、しかし、仮に生け捕りにされたとしても役立たずだと知ればきつと敵国はコテツを殺し、この国の王族に新たなエトランジエを召喚しろと要求することだろう。

だから、コテツはその場から動こうとしなかった。

遅いか速いかの差でしかない。ここで死んでも変わらない、と。

そして、待つこと数十秒にして、機体の装甲を叩く、足音が聞こえてきた。

（敵兵か……。随分お早いご到着だが、そのままコクピットにソードでも突き刺せばいいものを）

そう考えるコテツを余所に、唐突に暗かったコクピットへ光が差し込む。

こうして、致命的なダメージを受け要救助状態となったSHは、コクピット側の操作でロック状態にしない限り外からのレバー操作

でコクピットを簡単に開くことができるのだ。

そして、そんな風に簡単に開いたコクピットの向こう。そこに敵兵の顔でも拝んでやろうかと、コテツは目を向けた。

すると、そこにいたのは意外な人物だった。

「……リーゼロッテ？」

メイド服と、狐耳。見間違えるはずもない。
必死な姿で——、彼女はいた。

「早く、この手に掴まってください——！」

思わず、呆けた。

半ば無意識に言われるがまま手を伸ばすと、一気に機体の外まで引き上げられた。

何故彼女がここに、と、疑問が心を支配する。

そして、コテツは口を開きかけた。

「君は、何故——」

「まずは逃げましょう——！」

しかし、聞く間もなく、力強く手を引かれる。

女性とは思えない力で手を引かれ、呆けたままコテツは引きずられるように走り出した。

閉められた城門の脇の勝手口のようなところから内部に侵入し、そのまま城の中へ。

そして、廊下を駆け抜け、中庭に出て、やっとコテツとリーゼロッテは一息吐いた。

「こ、コテツさんっ、怪我は？」

「いや、大丈夫だ」

「よかった……、壊れた機体の中から出てこないから、怪我をしたのかと」

「すまない。心配を掛けた。それとありがとう、君の勇敢な行動のおかげで命を救われた」

別に望んだわけでもないが、救われた以上は礼を払わなければならない。

そのためにコテツはリーゼロッテをまっすぐに見つめる。
のだが、そこでコテツはあることに気がついた。

（震えて……？）

リーゼロッテが、肩や手を震わせている。

先ほどまでは無我夢中だったのだが、ここに来た今、それら張り詰めていたものが切れて、恐怖が戻ってきたようだった。

年相応な、女性になりきれない少女の恐怖が、そこにはあった。

「君は、どうしてここまでして」

思わず、コテツは聞いていた。

コテツにはよく分らない。

恐怖に打ち勝ってまでなぜ役立たずを救いに来たのか。

何故、彼女は死の危険を冒してまで、コテツを救ったのか。

その不可解を放置できず、口を付いて出た言葉に、リーゼロッテは肩を震わせたまま答えた。

「私……、エトランジェ様のお話が好きなんです」

「は？」

「歴代エトランジェの人たちは、亜人を差別する人が少なかったそ

うです。会うことは叶いませんでしたが先代もそうだったそうです」

野蛮な獣は下、知恵のある理性的な人間は上。そういう考えは、この世界にも根付いている。

そのなかで、亜人とは、知性を兼ね備えた獣ではなく、野蛮な者として扱われる。

彼女は亜人。城で働いているのは王女が変わり者なただけだ。城でも尚、差別は残る。

でも、彼女は気丈に笑った。

「だから、エトランジ様は全亜人の憧れです。差別せず、勇敢で気高く戦場を駆ける」

「俺はそれとは程遠いと思うが」

「だからですよ」

そう言って彼女は微笑んでいる。

綺麗な、笑みだった。

「私は、コテツさん中庭に寝転がって昼寝しているのが一番」らしい」とおもいます」

「らしい……？」

「はい、だからコテツさんは戦場で死んじゃだめなんです。逃げてどこかで畑でも耕してください」

その言葉に、コテツは愕然とした。

それだけで、命を賭けるに足りるのか、と。

たったそれだけで戦場に命を晒せるのかと。

「私、人間が大好きなんです。差別しない人は、もっとすきです」

だとするならば。

コテツの命をそうまでして救いに来たりゼロツテに報いるのは、シャルロットの思いに応えるのは、恩を返すのならば。

（命を賭けるに、十分だ――）

コテツは、胸中に火種が灯るのを感じた。
そして、見る。

白と黒の機体。腕に刻まれた文様が、相変わらず何故か気になった。

（……やるだけ、やろうじゃないか）
「あざみ、いるんだろう？」

胸に灯りかけた炎。

それに任せて、機体に向かい、コテツは呼びかける。
ふっと、コテツの前に、女の姿。

「なんででしょう？」

コテツは、ここに来て初めて己の希望を口にしたような感覚に囚われた。

（ここに来て、俺が望む初めての言葉は――）

ここに来て、心から何かをやりたい、と思ったのは、この世界に来て一週間あまりの中で。
今日が初めてだった。

「――君に俺を乗せる」

リーゼロツテも、あざみも、驚愕に固まっていた。

コテツだけが、真剣にあざみを見ていた。

「だめか？」

「い、いえ。確かに私としても搭乗者がいないと動けませんし。誰でもいいから兵士を探しに行かねばならないところでしたが」

「ならば丁度いい。俺を乗せてくれ」

間髪入れずにコテツは返した。

あざみは、少し考えるようにあごに手を当てていたが、すぐにコテツを見る。

「まあ、貴方ごときに私が使いこなせるとは思えませんが。どうせ変わりませんしね。最終的に私がコントロールして、貴方は座っているだけですから」

「とりあえず、乗せてくれるだけで十分だ。後は俺次第、だろう？」
「わかってるじゃないですか」

コテツは言いながら、直立している機体の装甲を軽やかに上って、コクピットである胸まで到達した。

「……タラップ下ろしましょうか、と言おうと思ったらすぐに上ってこられるとは。これだけ見ると熟練者みたいなんですけどね」

あざみが呟くが、コテツは無視して乗り込もうとする。
と、その背に声が掛かった。

「コテツさん！ また、行くんですか！？」

リーゼロッテだ。

心配が、声に多分に含まれていることは、コテツにも感じ取れた。だから、コテツは振り向くと、笑って返した。

「——今度は生きて帰るさ」

見た目よりずっと軽やかに機体が空に舞い上がる。

「強気の発言、いただきました」

「問題ない」

コクピットは複座になっており、すぐ後ろにはあざみがいる。

「しかし、エトランジェと言うものは本当に感性が一個ずれてますね」

「なんだ」

「亜人。中でも獣人に対する態度がすごいですよ。先代なんて『ケモ耳馬鹿にするとか潰すよこの国』とか言って一時期騒ぎになりましたし」

先代の言葉は、聴かなかったことにした。

「彼らは、慎み深い獣だ」

「ほほう、これまた面白い表現ですね」

「どうも俺には俺が彼ら以上だとは思えん」

そう呟いた瞬間、有効射程内に敵機の姿を視認する。

「さて、では戦闘ですね。少しでも無様な真似をしたらコントロールをこちらに移しますから」

「武装は？」

問えば、返ってきたのは、小馬鹿にしたような、試すような声色だった。

「男なら拳なんじゃないですか？」

今度の相手は、銃を持っている。

冷静に、コテツは相手を観察。

「了解、では行くか」

「え？」

果たして、自分の言葉に怒声が返ってくるとでも思ったのか、あざみから呆けた声が聞こえてくる。

無視して、コテツは飛んだ。
アルトであるこの機体を警戒して、囲んでいるのは五機。
その眼前へとコテツが迫る。

『っ……、速い!？』

相手の通信が、唐突に聞こえてくる。

「うるさいな、相変わらず」
『撃てッ!—!』

そして、構えられた銃口から、無数の弾丸が吐き出された。
その場にいた全員が、それは当たると判断した。

アルトの装甲を抜けるかどうかはともかくとして、当たるとは思
っていた。
しかし。

「遅いぞ」

右へ、左へ。上へ、下へ。

(っ……! この機体は——!)

直角よりも鋭い角度で白黒の機体が宙を踊る。
当たらない。

五機による一斉射撃が、いくら続けても、一度も当たらない。

『くそ、撃てっ、撃てっ!! いつかは当たる! こちらのほうが
数が多い!—!』

その、次の瞬間。

隊長機の眼前に、コテツの機体は現れた。

『いつ！？ いつの間に……』

「射撃に夢中になるからだ」

既に腕は引き絞られている。

そして、すぐさま鉄槌は放たれた。

拳が、唸りを上げて敵機の頭を砕く。

「い、一機撃墜です……」

そして、そのまま反転。

近場にいた機体に勢いのまま回し蹴り。

太い足に、機体は砕かれ地に落ちる。

「に、二機、撃墜……！？ 嘘でしょう！？ こんな簡単に……！」

驚愕の声で、あざみが撃墜をコテツへ伝える。

コテツは、答えもせずにもう一機へと迫った。

『うわああああ！！』

怯えて下がりながら銃を乱射する機体に向かって、すべての弾丸を避けながらコテツは迫り。

「覚悟はいいか」

敵機を掴むと地面へと叩きつけるように放り投げた。

『な……』

三機目が地面に落ちて動かなくなり、――動揺が広がる。

『強い……』

『一瞬で三機落ちたぞ！！』

『化け物か！！』

「……すごい。すごいです……！」

敵にも、後ろのあざみにもだ。

「腕が悪いなんてとんでもない……！　こんな実力を隠していたんですかあなた！！」

（機体が俺の意思に付いて来る……）

そんな中、コテツだけが冷静な顔で敵を見ている。

（機体が、思ったとおりに動く……！）

そして、無意識にその口の端は、吊り上っていた。
これは、そう。

前の世界感覚。エースだった、望月虎鉄の感覚。
そう、あの頃の――。

「そうだった……。何故忘れていた。……これだ」

この世界に来て初めて出会ったと思う通りに動く機体。

この世界で初めて出会った相棒。

まるで、頭に溶けた鉄をぶち込まれたようだ。

ただひたすらに頭が熱い。

「そう、これが……」

——持てるすべてを、叩き付けたい。
胸に、燃え立つものを、コテツは確かに感じていた。
エース。コテツはエースなのだ。
ただの練習機如きでは我慢できない。
あんな機体ではコテツを満たせない。
あんな機体では、あの空を飛べない。
だが——、今なら飛べる。

「これが、エースの空だ——！！」

『デイステルガイスト』

その機体は悠然と宙に立つ。
そして、そこで気がついた。
何故腕の文様が気になっていたのか。
何故そこにコテツは違和感を感じていたのか。
もう見ることはないだろうという先入観が見逃していた。
腕の文様は英語。何故か縦書きと横書きとだから余計に読みづらかった。

（そうか。これは、初代からのメッセージか）

態々、ドイツ名の機体に英語で記されたメッセージ。
地球人なら誰でも読めるように、という配慮。
コテツは、機体の右腕を胸の前に出し。
左の肘を右腕の上に乗せ、立てる。

「確かに……、受け取ったぞ」

左腕には縦書きで D E A D の文字。
そして、右腕には L I N E の文字。

『 D E A D L I N E 』

> i 3 1 2 8 6 — 3 1 2 5 <

”これが、最後の砦だ。”

その時、全ての機体が、それを見ていた。

開発者のメッセージ。

開発者の思い。

開発者の祈り。

今は——。

——コテツの気迫。

何故か、戦いすらも忘れて、皆それを眺めた。
唐突な、死線の出現を。

「覚悟を決めて……、越えに来い！」

4話 エースの空（後書き）

ついに無双発揮の予感。

そして、まさか挿絵まで入れることになるうとは自分でも思っ
てな
かった。

5話 Line Over!

「もう一度問う！ あざみ！！ 武器は！！」

「は、はい！！ 腰部バインダー内に日本刀とハンドガンが入ってます！」

「日本刀を出せ！！」

言われるがまま、あざみは巨大な腰部バインダーを操作し、ハッチを開閉させ、日本刀をせり出させる。

それを両手にディステルガイストは敵へ迫る。敵は、銃からブロードソードに持ち替え、迫るディステルガイストへと振り下ろす。

『え？』

だが、果たして敵に何が起こったかわかっただろうか。

すれ違い様の一瞬のうちに細切れにされ、地に落ちた兵士の声は、なにも分かっていないように聞こえた。

「次っ」

それを尻目に、もう一機へ、ディステルガイストは飛翔する。

その機体は、努めて冷静に銃弾を放つ。

「行けるか……、いいや、行くッ！！」

次の瞬間、あざみは信じられないものを目にした。

振り払われる、己が機体の刀。

横に振るったそれが、弾丸を切り裂き、弾く。

（人間にこんなことが！？）

あざみの驚きを無視して、距離はゼロへと狭まり、敵は貫かれる。

「ハンドガンを出せ！」

「はいっ、すぐに！」

「射撃操作をマニュアルに！」

「はいっ！」

腰部バインダーからハンドガンがせり出す。

すぐさまデイステルガイストはそれを掴むと、早撃ちのように、向かってきていた敵を撃ち抜いた。

そして、ブーストを吹かし、前進しながらの回避行動で機体は錐揉みに進んでいく。

その中で、まるでめちやくちやな射撃の嵐。

しかし、その弾丸は的確に敵機を落としていく。

（こんなことって……）

心中で、あざみは呟いた。

通常、振り回されるのは操縦士だ。どんな機体でもまずは操縦士が機体に振り回され、そして振り回されないようになっていくのが上達というものだ。

しかし、これはどうだ。

気を抜けば自分のほうがコテツに振り回されそうになっている。

（動く……、今までとは大違いだ。思ったとおりの動きが出来る！）

そんな中、聞こえるコテツの心の声は、歓喜に溢れているように聞こえた。

デイステルガイストに乗っている間、エーポスと操縦士はスムーズな行動のために、お互いの思考が読める。

（確かにピーキーな機体だが。そんなものにはいくらでも乗ってき
た。その度にどんなじゃじゃ馬も乗りこなしてきた）

（並みの機体じゃ動けないわけですね。この反応速度じゃ、アイン
スなんかじゃついていけない）

コテツの腕が悪いと評されたのは、まるで嘘だった。

機体の方が、まるでコテツに付いていけないのだ。

あざみには分かる。まるで嵐のような入力のは普通は普通の機体じゃ
処理しきれない。

そして、この見切りには、ただの機体じゃ付いて行けない。

パイロットの能力を、百分の一も引き出せない——！

（……練習機なんかじゃこの人の相手は務まらない。もっと、私
みたいにな——！！）

飛び続けるコテツの前に、一機の赤く輝く騎士に鋭い羽の生えた
ような機体が立ちふさがる。

（私なら——！！）

それが、あざみの意識を現実へと引き戻した。

「エース機ですつ、気をつけてください！」

油断なく細身の剣を構えるその機体には隙がない。

『……まさかアルトが起動しているとは』

「……エースか」

『如何にも。我こそはジルエットが筆頭騎士、グラット・エイサツプ！ いざ参る！！』

「望月虎鉄。これでいいか？」

コテツが名乗りを終えた瞬間、場は動いた。

コテツの銃撃を、大きく横に避けながら、グラットの機体がコテツに迫る。

「避けるか」

『いかにアルトと言えど、一機で戦局を左右できるものか！ 私がこの場を引き受ける！ 諸君はこのまま戦闘を続けよ！！』

飛び込むグラット。

振り下ろされた剣と、盾にされた刀が鏝迫り合いを行う。

『ぐぐ……！ さすがにパワーでは勝てんか』

パワーで勝るディステルガイストが剣を押し返し、グラットを後ろへ弾く。

「あざみ、ハンドガンを！」

「すぐにっ！」

即座にディステルガイストはハンドガンに持ち替え、銃撃。グラットはそこからすぐさま左に回避する。

『こちらから行くぞ！！』

そして、今度はグラットが襲い掛かる。

剣による高速の連撃。

あらゆる角度から、斬撃がディステルガイストに迫る。

『おおおおおおおおお！！』

対するコテツは、両手持ちにした刀で受ける。

そして、幾度となく剣戟が交わり、甲高い音を上げ。

――遂にディステルガイストの刀が弾かれる。

「そんな――！」

これはまずい。

上半身が大きく後ろへ逸れた。

このままでは胴体がから空きになる。

と、そこで気がついた。

目の前のコテツからは、焦りどころか、まるで笑うような感情さえ感じ取れたのだから。

（まさか――！）

逸れた上体が、更に深く沈みこむ。

『フェイント！？』

そう、フェイントだ。刀を弾かれたのは一撃を隠すための演技だった。

反りかえった上半身に追従して、足が跳ね上がる。

”サマーソルトキック”

ディステルガイストの足が、敵機の胸の装甲に直撃する。

『ぬおおおおおお！？』

そして、揺れて制御不能となる機体に、コテツは間髪をいれず拳を放つ。

右、左、そして右。

『ぐ、お、お！　だが！！』

ダメージ甚大。

しかし、機体を立て直すグラット。

そんな彼に、コテツは冷たく言い放った。

「いや、終わりだ」

真上に弾き飛ばされた刀が、今、するりとディステルガイストの手の中に戻ってきた――。

『な、な、な……』

一閃。

『ぬおおおおおおお！！』

両断。

（あり得ない……、エース相手になんて手際……）
「こんな……っ、激しすぎますっ……」

落下していく機体に目もくれず、コテツはあざみに問うた。

「あざみ。この場を一番手っ取り早く収める方法は何だ。やはり敵を殲滅すべきか？」

余韻もない。ただ、出来ることをこなしただけという空気。

（エース機なんて眼中にもないんですね、あなたは……！）

それが更に、あざみを熱くした。

あざみは、目の前の操縦士のために、本気でデータを漁り、思考する。

（えっと、どうしよう……、この場で一番速い手は——！？）

内心の焦りを抑えて、あざみは思考の結果を口にした。

「いえ、今回は相手が空戦用ということを念頭に戦いましょう」

「つまり？」

「戦艦を落とせばいいのです」

「どういうことだ？」

「空戦用機体は総じてエネルギー効率が悪く、戦闘継続能力に著しく欠けます。そんな彼らが補給のアテを失ったら？」

「戦場で孤立するのはごめんだな」

「そういうことです。よって戦艦を叩けば、皆すぐさま飛んで帰らなくなるはずですよ」

「では、この機体の最大火力は？」

質問の内容が変わる。当然と言えば当然だ。

コテツはこう聞いている。

『この機体で敵艦は撃墜できるのか？』

あざみは、自身の顔がにやけるのを抑え切れなかった。

「ご心配なさらず。攻勢魔術を使います。ただし、実戦で使った試しはありませんから、どこまでやれるか未知数です。だから限界まで艦に近づいてください」

「攻勢魔術……？」

「ただの、光の束を打ち出すだけの魔術ですよ。実戦使用が初なのは、貴方が操縦してくれてるからです」

あざみが操縦までを担当してしまうと、魔術処理が追いつかない。しかし、この男には操縦アシストすら必要ない。だから、撃てる。

「私は、貴方の元で、今日、初めて本気を出します。だから、信じてください」

ディステルガイスト、そして、あざみの全力。初めて出せるそれに、あざみは歓喜に打ち震えた。

（ああ、なんて愉快なんでしょう……！！）
「信じよう」

信じる、と彼は言った。言ってくれた。

誰よりも懂れた、たった一人のパートナー。
それが、眼前にいた。

「行くぞ、あざみ」

行くぞ、と言って名前を呼んでくれる。
それがこんなにも幸せなのだ、と。あざみは今気がついた。

「はい！ 行きましよう！！」

戦艦へと機体が、飛翔する――。
無論、無抵抗とは行かない。
敵が、こちらの意図に気が付いた。

陣形を組み、戦艦への進行を止めようとする。

「邪魔だ！」

その射撃を避け、第一陣を抜ける。

そこからは、更に敵の壁が厚くなった。

敵機全てが、アルトを脅威と認識し、戦艦を守ろうと動いている。
とたんに激しくなる射撃。

しかし、それすらも避けて飛ぶ。

「まだまだ！ まだもつと速く飛べるはずだ！！」

あざみの耳朵を叩く、その声がなんとも心地よかった。

（どんな機体もモノにしてきた……。それで戦場を駆け抜けた。今回もだ。今ここでモノにする！！）

心の声も、ずんと胸の奥に響いてくる。

『第二陣突破されました！！』

（イイ……。いいですよコテツさん。私、あなたのものになってしまいそうです……。！）

色濃くなる砲撃。

戦艦の艦砲射撃も混ざってくる。

あざみも初めて見るほどの砲火。

『第三陣！ 壊滅！！』

だが、彼は言った。

「生……、温いッ！！」

生温いと。

この程度では小揺るぎもしないと！

「あつ、コテツさんっ。こんなの……、初めてっ」

あざみは愉悦と歓喜に打ち震えた。

乗りこなされている。

今日初めて乗った男に。

『第四陣！！ 死んでも守りぬけええ！！』

それがなんとも、あざみには気持ち良かった――。

「おおおおおおおっ！！」

『だめです！ 突破されました！！』

しかし、敵陣を突破したその時、敵艦の先端に光が集まり始める。

「主砲です！ ダメ！ 避けてください！！」

巨大なレーザー砲が、一瞬後には襲い掛かってくるだろう。
ディステルガイストの装甲を完全に抜くことは出来ないが、少な

くとも、機体は外へと押し出される。そうするとふりだしだ。また、敵陣を突破しなければならない。

だから、避けなければならないのだが、コテツは猛進をやめなかった。

「え……、なんで？」

「あざみ」

いや、違う。

だからこそ。

「君にエースというモノを見せてやる」

コテツは猛進をやめなかったのだ。

あざみは、その、コテツのエースというものを嘘だと思った。さもなければ、夢だ。

あり得ない。

それほどまでにあり得ない光景だった。

眼前を埋め尽くすほどの光の奔流を。

機体を包み込む太さのレーザーを。

ディステルガイストは刀で切り裂いて飛翔を続けているではないか！

（すごい……、すごいすごいすごい！！）

あざみは知る。

「これが……、エースの空っ」

これがコテツの世界。

エースの次元。

あざみと彼の、到達点。

「抜いたぞ……！ 後は任せた」

「はい！！」

攻勢魔術、展開。

ディステルガイストの前面に輝く魔方陣が描かれる。

コクピット内に響く、機械音声。

『Pentagram Standby・DEAD LINE・・・』

『

この戦いを終わらせる、最後の一撃。

「これが私と、コテツさんの……！！」

そして、彼と始める、最初の一撃。

「初めての共同作業です！！」

『——Over！！』

魔方陣から、戦艦に大穴を明けるような光の奔流が放たれた——。

慌てて逃げていく敵軍。こちらは、無理に追おうとはしなかった。
コテツは、深くシートに沈みこんで、ぼつりと呟く。

「……柄にもなく、熱くなつたな」

「もう、休んでていいですよ。後は、私が操縦します。だから、帰りましょう」

「ああ、そうだな」

こうして、一つの戦いが終わる。

5話 Line Over! (後書き)

とりあえずこれを書き始めて一番やりたかったことはやりました。
次回エピソード。

6話 中庭と空

翌日。

謁見の間に、コテツは呼び出された。

アマルベルガが、跪いたコテツの前に立っている。

「貴方の働きを賞し、武勲勲章を授けましょう」

「は」

周囲がコテツを見る目は、お世辞にも祝福しているようには見えない。

彼らは、コテツの活躍に懐疑的である。

いや、王女含め、全ての人間はあざみが動かしたディステルガイストによって救われたのだと思っており、コテツは座っていたただけだと思っている。

ただし、ディステルガイストに乗って生還できた以上は国のために働いたものの一人だ。

故の勲章。

なのだが。

「ご主人様ーっ！ 探しましたよまったくもう！」

一人の闖入者によって、空気ががらりと変わった。

「……ご主人様？」

いやな予感がして、コテツが振り向くと、そこには陽気に手を振るあざみがいた。

「あ、あざみ……、今コテツをご主人様と……」

「はいっ、アマルベルガ様」

「それがどういう意味かわかってるの？」

「ええ」

あっけらかんと、あざみは笑って答える。
そして、コテツを見た。

「今この時から私はモチツキ コテツをマスターと定め、この先いかなるときも、いかなる戦場でもお傍で貴方に仕えます」

「……は？」

思わず、コテツの口から声が漏れ出た。
頭が痛い、とばかりにコテツは眉間に皺を寄せる。

「よろしく願いますねご主人様」

「いや、しかし、そんな話は聞いていないし、俺はそんなこと要求した覚えは……」

言えば、あざみは照れたように身をくねらせる。

「やですよ……、もう。昨日はあんなに激しかったのに……！」

場の空気が凍った。

「あんなに熱く、俺のモノにしてやるって……、責任とってくださいね？」

今代エトランジエはアルト乗り。
一躍、コテツは時の人となった。
まだ、城外には知れ渡ってないのが救いだ、しかし、時間の問題でもある。

「……結局ここか」

場内では、どうにも好奇の視線に晒される。
それ故に、彼は今日も人気がない中庭に居る。

良いも悪いもない、ニュートラル。

それが一番コテツにとって落ち着く場所だ。

そんな彼は、これからの波乱を予測して――。

「ご主人様ーっ！」

どう考えてもニュートラルではない声を無視することにした。

「……いつそ本気で農家でも目指すか」

中庭から見えるエースの空は、あんなにも遠い。

6話 中庭と空（後書き）

ということで、ひと段落。

続くかどうか未定の話だったもんで、書いてある分はここまでです。

元々、息抜きにテンプレ異世界召喚物がやりたくて始めたこれでしたが、非常に書きやすくて楽しかったです。
ここまでコテコテなのは初めてでした。

テンプレのおかげですらすら書けるので、もしかすると続くかもしれません。

6・5話 寂しがりチャーターボックス（前書き）

これはおまけのようなものであり、七割方人物紹介のようなものです。

見なくてもまったく問題ありません。

最初と最後だけ見るのもあります。

6・5話 寂しがりチャーターボックス

召喚されてから一週間余り。

未だに私物の増えない殺風景なコテツの部屋に、長年置いてあった置物のように、当然のように、あざみは居た。

「何故君がここにいる」

訓練が終わって帰ってきたと思ったらこれだ。

元から部屋においてある椅子に、あざみは優雅に座って待っていた。

「いいじゃないですか。ご主人様。私はあなたの所有物なんです。

部屋においておいてくださいよ」

「断る」

「えー……」

「用はそれだけか？」

にべもなく言うコテツに、不満そうだったあざみが表情を変える。

「あ、それですね、デイステルガイストは、あなたの搭乗機になったじゃないですか」

「否応なく」

「ええ、ですから、あなたとあなたの周りの人間関係について把握しておこうかと」

なるほど、とコテツは一応の納得を覚えた。

これからあざみとコテツは長い付き合いになるかもしれないのだ。となれば、互いに理解しあっておくことは無駄ではない

コテツ・モチヅキ

「では、まずあなたについて、聞かせて貰えますか？」

「俺、か。言うまでも無いが、俺の名前は望月虎鉄。元地球軍パイロット。こちらでは、コテツ・モチヅキ。エトランジェをやっている」

「どのような経緯でこちらに？」

「火星を前に最後の任務を行った所、敵機の爆発に巻き込まれ、気が付いたらここへ、だ」

「なるほど……、歴代と似たパターンですね」

「どういうことだ？」

「どうもこの世界に呼ぶときには、そちらの世界から乖離しかける者の方が呼び易いようなのです。瀕死の重傷だとか、事故にあった瞬間だとか」

「なるほど。俺はまさに空間圧縮の爆発に巻き込まれていたからな。それで言えば、世界からかなり宙ぶらりんだっただろう」

「はあ、そこをさつと掠め取られたわけですか」

「まあ、そんな所だろう。コテツ・モチヅキ。エトランジェ、搭乗機はデイステルガイスト。と、最低限でいくならこんなものか」

「そして、私の未来の旦那様で、ピーキー機体中毒って所ですかね」

「……色々聞きたいことはあるが、とりあえずピーキー機体中毒について聞いておこうか」

「ご主人様はピーキーな扱いにくい機体を乗りこなすことに無上の喜びを感じる方でしょうか？」

「……」

「だって……、こないだの戦闘中はあんなに……」

「確かに、昔からピーキー機体ばかりを押し付けられてきた経歴があるから否定しきれないかもしれんが、しかしその言いようは非常に人間が悪い」

あざみ

「私はあざみ。ディステルガイストのエーポスで、あなたの嫁です」
「……」

「長らくパートナー不在でしたが、ご主人様との運命的出会いによって、今に至ります。ちなみに、名前が日系なのは初代エトランジエの趣味だそうです。他のエーポスはどうか知りませんが。ついでに、地球系の知識も持ってますよ。初代がインプットしたもので、時代がら偏っているかもしれませんが」

「そうか。しかし、聞きたかったんだが、そんなに良いパイロットは見つからないものか？」

「はい。これでも私は私とデイステルガイストに誇りを持っていますから。パイロットの腕で侮られるのは我慢なりません」

「というか、どのように、前までのパイロットは駄目だったんだ？」

「機体に振り回されるのは勿論、コクピットで吐いたり、気絶したり、失禁したりならいいほうですよ」

「そうか」

「……操縦士を、殺してしまったこともあります」

「ああ、そうか」

「試しに乘られる分になら手加減が出来ますけど、国の危機となるとそうもいきませんから。私が制御して、本気で機体を動かすと、負荷で人が死んでしまうのです……」

「だから、有事の時以外はパイロットを乗せないようにしてきた、か」

「文字通り、命を燃やして国を守る英雄なのですよ。私に乗った人は。だから、あなたも——」

「そうか」

「そ、そうかって……」

「俺は死ななかった。そして死なない」

「あ……、はい」

シャルロッテ・バウスネルン

「うーん……、役立たず扱いだったご主人様に分け隔てなく接し、一人前の戦士にしようと努力し続けた……、これはライバルになるかもしれませんね」

「なんだいきなり。シャルロッテ・バウスネルン。王女騎士団団長。俺にとっては上司に値する。が、今回の件で正式な戦力としてエトランジェと認められたおかげで、直接の指揮下からは外れるな」

「エトランジェは基本的にどの権力、階級からも離れた存在ですからね」

「まあ、騎士団に所属していたのは、戦闘レベルに達してない俺への一時的な措置だったというわけだ。と言っても、しばらくは騎士団と行動を共にすることになるだろうし、シャルロッテに指示を仰いで動くことになるだろう」

「まあ、ご主人様もこの世界は初心者ですからね。自分の判断で動くにはまだ早いですし」

「とりあえず、俺から見れば、彼女は高潔な武人と言った所か。腕も良い。この国ではトップクラスだろう」

「あと、胸が大きいんですよえ……」

「なにを言っているんだ君は……」

「まあ、王女騎士団は王女と王都の守りの要ですから。団長ともなれば当然の強さです。むしろ、此度の戦で持ちこたえられたのは王女騎士団の働きがほとんどですよ。攻めたのはご主人様ですけど」

「なるほどな」

「そもそも、常に整備を完全しておくような部隊は王女騎士団くらいなものです。他の部隊は油断しきってますから。戦争始まったって聞いてから整備すれば首都防衛に間に合はずって」

「まあ普通はそうなんだろう」

「エトランジェが稼動すれば一人でもどうにかなる風潮だったので」

今回の件で整備体制を見直したそうですが」

リーゼロッテ・クリッツェン

「ケモ耳少女……。萌えですねえ」

「……リーゼロッテ・クリッツェン。エトランジェ専属メイド、ということになっている。俺の召喚と同時に自ら志願したらしい」

「亜人の要望が通るとは珍しいですね」

「王女が許可したらしい」
「なるほど」

「王女は使えるものは使う、と言った空気で能力さえあれば亜人でも関係なく扱う。周りからの反応は、主立って差別をすると王女への反逆になるため、できる限りいいものと扱っているようだ」

「根は深いですね」

「本人は、それでも気丈に振舞っている。戦う人間ではないが、気高く憤み深い」

「あら……。好感度高め？」

「王女曰く、エトランジェの付き人は常人じゃ務まらない、だそうだ。まあ、危険な場所にも出向くことになるだろうしな」

アマルベルガ・ソムニウム

「王女だな。アマルベルガ・ソムニウム」

「優秀な方らしいですよ。王が崩御してからは、彼女が国を切り盛りしています」

「一週間と少しで見極めれた訳でも無いが、まあ、確かに、指導者として優秀なのは感じる」

「まあ、王様もピンキリですからね。国の一つ一つを見ていけば凄い人も駄目な人もいますよ。この国も先々代は駄目な人でした」

「この時期に呼ばれた俺は幸運ということか」

「そうかもしれませんが。ぱっと見分かりませんが、慈悲深い人ですし」

「まあ、俺を処分しなかった辺りな」

「その慈悲深さは正解だったと思いますよ。私とご主人様のタッグは最強ですから」

クラリッサ・コーレンベルク

「……誰です？ それ」

「騎士団副団長だ。まあ、俺とも関わりは多くないからな」

「ははあ、副団長」

「年は俺より年下だろう。というか、一回りは下……、十六、七と言ったところか」

「所で、ご主人様の年齢は？」

「三十二だが」

「詐欺ですっ！ 三十路とか嘘でしょう！？」

「……君の目にはどう映っているんだ」

「若くて十代。そうじゃなければ二十代前半」

「まあ、日本人は若く見えるという話だ」

「私だって日本人ですよー。見た目のベースが、ですけど」

「機体の製造日から考えれば随分な若作りだな」

「ええと、それはともかくですね。そのクラリッサさん？ どんな人ですか？」

「優秀だが、青いな。上手いのだが、巧くはない。老獪さを覚えていく前段階、と言ったところか」

「未来有望ですね」

「融通が利く柄じゃないらしく、役立たずのエトランジエである俺に反感を抱いてるらしい」

「あ、敵ですか。殺しましょうか？」

「やめろ。ともかく、まあ、ことあるごとに嫌味を言ってくるが、可愛いものだ」

「可愛いものですか」

「嫌味代わりにコクピットにライフル撃ってくる奴よりはマシだ」

「そんな環境あるんですか」

「俺達のエースというのは、頭のネジが一本取れた相手を指すこと

が多い」

デイステルガイスト

「私自身であり、私の相棒であり、あなたの相棒で、あなたの嫁です」

「そんな鋼鉄の嫁は御免だぞ」

「スペックは……、どちらかと言うと高機動接近戦よりですかね。

装甲は厚めで、重いですが、しかし速いです」

「そうだな」

「ただし。重いのに速いという特性を手に入れるために、操縦難易度が非常に上がりました。速いのに重いから、その機動に振り回されます。まあ……、ご主人様には関係ない話ですか」

「ふむ」

「砲撃もしますが、これは私の方で制御する攻勢魔術系統なので、やっぱり接近戦よりと考えておいて構いません」

「砲撃は勝手に君の方で行ってくれる、ということでもいいのか？」

「基本的には、ですね。もしかすると機体の足を止めて欲しいとか協力を要請する場合もあるかもしれませんが」

「なるほど、では武装に関しては？」

「メインで扱い易いのは先の戦闘でも使った日本刀とハンドガンですね。あと、私の得意分野は光魔術。つまりレーザーです。他にも腰部バインダー内に多彩な武装が積まれているのですが……、多彩すぎて、使えるのか分からないものまであります。私もちよつと思いついてからでない」と

「選択肢が多いのはいいことだが……」

「初代はかなりずれた人だったんですよ」

「まあ別に問題ないか。ところで、途中から戦闘中に君の心の声が聞こえるようになったが、アレは？」

「アルトの機能の一つです。エーポスと操縦士の円滑な意思伝達のため、という奴ですよ。普通に乗せると一方的に操縦士の声がエーポスに聞こえるんですけど、マスターと認めた相手なら、相互に思考を伝えることが出来ます」

「と、まずはこんな所ですかね。あなたを取り巻く環境については、また今度お話ししよう」

いいながら、あざみがテーブルの上のろうそくを消す。

「そうだな」

コテツが頷くと、あざみは笑った。

「では、おやすみなさい」

「……なに？」

にっこりと笑ったあざみは……。

コテツのベッドに柔らかな音を立てて転がった。

コテツは、頭痛をこらえて、それを見ることとなる。

「あざみ」

「ふふふ、なんですか？」

ベッドの上に寝転がって、にこにことあざみは笑う。

「そこは俺のベッドだと思っていたが」

「ええはい、そうですよ？」

「俺が寝れないと思うのだが……」

「何を言ってるんですか、ご主人様」

何を当然のことを、とあざみは笑っていた。

「一緒に寝るんですよ？」

「……すまない。ここ数秒で急に耳が遠くなったらしい」

「一緒に寝ましようっ、ご主人様っ」

「床で寝る」

迷わずコテツはそう吐き捨てた。

何時でも整った場所で寝られるわけではないのがコテツの職業だった。

そのため、床で寝ることに苦痛はない。ベッドがあるに越したことはないが。

壁にもたれかかり、彼は床に座り込むと、目を瞑った。

そして、しばらくそうしていると。

肩に温かな感触。

「なんだ」

「ご主人様と一緒に寝たいんですよ、私は」

いつの間にか隣に来て、肩に頭を預けていたあざみに、コテツは半眼を向けた。

「どうして君は――」

その言葉は途中で遮られる。

「――ずっと、待ってたんですよ？　ずっと憧れていたんです」

突然、あざみが寂しげな声を出したからだ。

「私の相棒、私のご主人様、私の伴侶。ずっと、一人で待ってました。だから……」

アルトができたのは千年以上も前のこと。それだけの時間を、彼女は待ち続けていたことに鳴る。

それを聞いて、コテツは立ち上がった。

「ベッドで寝る」

「あ、や、や、鬱陶しかったですか……？」

「君も入ればいい」

「え？」

「好きにしろ」

呆けていたあざみの顔が、喜色に染まる。

「あ……。さすが私のご主人様ですっ！！」

「……あまりはしゃいだら部屋から放り出すからな」
「はいっ、大丈夫ですよーっ。大丈夫、ほどほどにしますからっ」
「……」

コテツは溜息を吐き、夜は更けていく。

—— 01 / 異世界エース 終

6・5話 寂しがりチャーターボックス（後書き）

クラリッサ・コーレンベルクは次回出る予定のキャラです。

ついでに更におまけ。

> i 3 1 5 1 1 — 3 1 2 5 <

アインス

コテツが乗る練習機。

性能は中の下。機械としての頑丈さはないが、訓練生の安全を考え、装甲は厚い。

主機の出力も低く、勢い余った訓練生が全力で地面に激突しても死なないような配慮のなされた出力と言える、ただし、バランスがよく、上手くパーツを組みかえれば前線で戦える。

7話 量り謀り

鉄のヒトが、飛ぶ、跳ねる。

剣で打ち合う。

「鈍いぞコテツ！」

荒野で、二機のSHが戦闘を繰り広げていた。

戦況は誰がどう見てもわかる。

シャルロットの操るSHが優勢だ。

コテツのアインスは受けに回り続け、攻める空気を見せない。

シャルロットは、手に持つブロードソードで鏑迫り合いをしながら、シャルロットは声を上げた。

「どうしたコテツ、本気を出せ！」

『本気だ。可能な限りのな』

「確かに、お前の活躍を疑っている者は多い。だが、私はあの戦場で空を駆けるお前を見た。そして、あざみがお前を気に入っていることは、お前が只者ではない証明になる」

さすがに、全ての訓練にアルトを回せるわけではない。

アルトとエーポスとの関係に慣れておくのは、操縦士としての重要な課題といえど、ずっと死蔵されてきたに等しいディステルガイストが戦闘訓練、などというのは前代未聞過ぎるのだ。

手続きや周囲の慣れが出るまではやはり間に合わせの機体に乗せるしかない。

「だとすれば、こんなものではないはずだろう！ コテツ！」

シャルロッテは叫ぶが、コテツの動きに変化はなかった。
相も変わらず後手に回り続けている。

ただひたすら受けに徹し、切り返す気配を見せない。

「それとも、私では不足か！？」

「……」

シャルロッテの叫ぶような声に返事は無く。

声は返ってこないが、呆れたような空気が帰ってきたのは、シャルロッテにもわかった。

「やる気を出せー！」

「と、言われても、な」

「何が悪いのだ！」

やはり私では満足できないというのか。

シャルロッテは、口の中だけで悔しげにそう呟いた。

『お互い様だろう』

「何がだ！」

『ここを狙っていない以上は』

そう言って、コテツが自分の機体の親指で差したのは、コクピットだ。

だが、当然である。いくら刃引きされたブロードソードであっても、当たり所が悪ければたちどころに死んでしまう。

訓練とは、相手を殺すのが目的ではない。

（しかし……！）

シャルロッテは、連動型操縦桿を思い切り引き絞った。
連動型操縦桿。コクピット左右上部に付いている、ワイヤー付きの操縦桿だ。

握力に反応して手を握り、腕を振ればその通りに機体の腕が動く。そして、その連動型操縦桿を、シャルロッテは前に突き出した。

「ならばお望みどおりにしてやる……！」

瞬間、無駄のない高速の突きが繰り出される。

相手が、それなりのパイロットであれば、何かアクションを起こすはずだ。

しかし。

コテツは、動かなかった。

ぴたりと止まる刃。

（反応すらできなかった？ ……いや、見抜かれていた！？）

反応しきれないにせよ、微動だにしないのはおかしい。

動揺すら見て取れないのは、寸止めに見抜いていたからか、とシャルロッテは生唾を飲み込んだ。

（だったら……！！）

ここで、シャルロッテは一つの覚悟を決めた。

（私はこの国のためにこの男を見極めなければならない……。この程度で死ぬのなら、この先もどうしようもない——！）

更に、腕を。
突き出す。

『！！』

刺されば、コクピットを貫くコースだった。
コテツが息を呑む音が聞こえた気すらする。

（本物なら、かわしきれないまでもコクピットくらいは逸らせるはず！！）

と、その時。

耳に響いたのは鉄がかち合う硬質な音。
装甲が刃を弾いたのか？

「は……」

否。

弾かれたのは、シャルロッテのブロードソードだ。
固まるシャルロッテの背後の大地に、その切っ先が突き刺さる。
一瞬にして、コテツの刃によってブロードソードは弾き飛ばされていた。

あの、一瞬で。

思わず——、シャルロッテに笑いがこみ上げる。

「ははははは！ やるじゃないか、コテツ！！」

『狙い通り、か？ 悪趣味だ』

「さあ、今日の訓練はここまでにしよう」

『いいのか？』

「ああ。満足だ」

シャルロッテは笑って、頷く。

本気の一端を知ることができた。

彼女としては、今のところはそれで満足だった。

もしも、王女もエーポスすらも騙しきる、実力は全く無い詐欺師ならば、例え己がどうなろうとシャルロッテは排除しなければならぬ。

逆に、本物であるならば、何の問題もない。

そして、コテツは本物だった。それだけだ。

（これでこの国も一息つける。一つの峠は越えたと言っていていいだろう）

溜息を吐きながら、シャルロッテはコンソールを操作し、ハッチを開いた。

コクピットハッチを開けば、太陽の光と共に清涼な空気が飛び込んてくる。

コクピット内には空調があり、内部の空気は整っているのだが、空調が効きすぎているばかりに、いささか作り物のような空気がある。

その空気が、シャルロッテには嫌いだった。

「とは言っても、贅沢な悩みか」

そう、シャルロッテは一人ごちる。

SHに空調が取り付けられたのは、さほど昔の話ではない。

軍人の乗る兵器というものに関して、人間のために予算は下りない。

この空調だって、電子機器の冷却のために、という名目で取り付

けられたものだ。しかも、一部の指揮官機のみには搭載されている。シャルロッテも昔は、空調の付いた民間の冒険者のSHを見て羨んだものだ。

それに、コテツのアインスには空調が付いていないのだ。訓練生の間からそういった快適な環境に身を置くとろくなことになるという結果である。

だから、やっぱり贅沢な悩みだ。

「……ふう。少し暑いな」

シャルロッテは、片膝立ちになった機体の装甲を伝って地に降り立った。

夏が近づいて来て、気温は徐々に上がり始めている。

この国は季節による寒暖差がほとんどないのだが、それでも上がる時は上がる。

と、そこで、彼女はコテツのアインスを見た。

丁度コテツは、コクピットから出て地に降り立ったところだった。それに駆け寄る人影が二つ。

「ご主人様ー！ タオ——」

「コテツさん、タオルです」

出遅れたあざみと、普通にタオルを渡しに行ったリーゼロッテ。

「……出遅れました」

当然といえば当然か。リーゼロッテはエトランジェ付きのメイドなのだから。

「ああ、ありがとう」

無表情でコテツは返し、タオルを受け取るが、シャルロッテの視界には、汗一つかいているようには見受けられなかった。

（底知れんな……）

結局、今回は実力の一端を引き出しただけに過ぎない。只者ではないということがわかっただけで、詳しいことは何も、だ。

前回の戦闘はまったく参考にならない。そもそもアルトとパイロットがともに稼動した、というのがこの国では珍事だ。どこまでがエーポスと機体性能の力で、どこからがパイロットの力なのか判別できないのだ。

（私より少し下か、互角か……）

シャルロッテはそう判断した。例えやる気を出したとしても訓練機あのレベルなら、それくらいであろう、と。

訓練機は誰にでも扱いやすいように組んである。

（……ただ、私の剣を弾いた一瞬は圧倒的、そのものだった）

結局、そこまで考えて、シャルロッテは頭を振った。

悩むのは性分ではない。どうせ、そのうち知れることだ。

と、そこで丁度良く、シャルロッテに声が掛かった。

「お疲れ様です団長」

声をかけてきたのは、クラリッサ・コーレンベルク。シャルロッテが率いる騎士団の、副団長だ。

金の、柔らかく波打つ髪を肩まで垂らした少女で、吊り目がちであり、少々きつい印象を受ける。

背は低めで、そして印象通り、多少きついところがある。

非常に優秀な部下だが、融通が利かないところがあり、その辺りは今後の課題であろう、とシャルロッテは捉えている。

そして、そんな部下に、シャルロッテは目を向けた。

「ああ。なにか用が？」

「王女様がお呼びです」

「ん、そうか。では行ってくる」

「お気をつけて！」

その言葉に、シャルロッテは苦笑すると歩き出した。

慕ってくれるのはいいが、慕われすぎるのも問題だ、と心中で彼女は呟くのだった。

7話 量り謀り（後書き）

自分の想定外の反響を貰ったので急遽二話製作開始です。

というわけで、前回までが一話なら、今回から二話目です。
クラリッサのキャラが二転三転したおかげで大変でした。

今回のメインはそのクラリッサです。

前回までに台詞一つだけと、キャラ紹介で出てきただけのキャラですが、前回までは読み切りの空気でテンポ確保のため必要最低限しか周囲を描かなかったので、これからは周囲にもスポットを当てて行きたいかと思えます。

8話 依頼否応無し

コテツは王城の廊下を歩く。

「ご主人様、やる気を出してくださいよー。そんなだから周囲に調子に乗られちゃうんですよー？」

「と、言われてもな。別に適当にやっているわけでもない」

左にはあざみ、右にはリーゼロッテ、だ。

「本当ですかー？」

「まあ、見た目にはなかなか分かんたろうが」

「えー、でもですねえ。こう、あれじゃないですか。最後のアレみたいなガキンツって」

「確かに、アレはすごかったですね。あれだけ、雰囲気違いました。素人目ですから、よくわかりませんが」

あざみの言葉に、リーゼロッテも追従する。

しかし、コテツにとってあの一撃は本意ではなかった。

彼は、無然と肩を落としながら口を開く。

「あの動かし方は、褒められたものではない」
「そうなのですか？」

だが、リーゼロッテが疑問符を浮かべると同時、あざみも首をかしげている。

コテツは、説明しようと口を開くが、背後から声が掛かって、それは中断された。

「コテツ・モチヅキ！　こちらを向きなさい！」

刺々しい声に、コテツが無表情で振り向くと、そこにいたのは、

「クラリッサか」

「クラリッサか、じゃありませんコテツ・モチヅキ」

そこにいたのは、王女騎士団副団長、クラリッサ・コーレンベルク。

「今日の訓練はどうでした？　まあ、どうせシャルロット様に負けたんでしょうけど」

「ご主人様、いきなり喧嘩売ってるんですかこの人」

「気にするな、いつものことだ」

「無視しないで、コテツ・モチヅキ。不愉快です」

「無視はしてない」

「それで、今日の訓練は？　まあ、私にも一勝もしたこと無いあなたじゃ善戦しても三分持たないでしょうけども」

その言葉を、コテツは適当に流して返した。

わざわざクラリッサの嫌味に付き合うときりがない。

「用件は？」

「なにがです？」

「俺を蛇蝎の如く嫌う君が用も無しに？」

（いや……、嫌味を言いに来ただけかもしれないが）

結果としては、ちゃんとした用事はあったらしい。
忌々しげに、クラリッサは口を開いた。

「王女様からのお呼びです。死ぬほど嫌だけど、一緒に行くから早くなさい」

「わかった」

彼女はコテツを嫌うが、律儀で真面目な性格でもある。決してコテツに不利になるよう賢しく立ち回ったりもしない。

見たまま、ストレートに考えをぶつけてくるだけだ。些か直情的ではあるが。

だから、命令があれば如何に気に食わない命令であっても彼女は遂行するだろう。

「と言うわけだ。俺は王女に会いに行くが」

振り向いて、二人に言うコテツ。

リーゼロッテは素直に頷いた。

「わかりました」

しかし、あざみは食い下がる。

「私はエトランジェのパートナーですから。同席しても構いませんね？」

対するクラリッサは少し戸惑った顔をしたが、すぐに平然として答えた。

「ええ、問題ありません、あざみ様」

「では行きましょうか」

いつの間にか、あざみを取り仕切っている。

険悪になり、クラリツサの嘲りに晒されるコテツを氣遣つてのものなのかどうかは判断が付かなかったが、なにを言つてもなく、コテツはそれに続いたのだった。

「よく来てくれたわ」

王女の執務室。

謁見の間以外で話をする、ということはまだ公にしたくないと言うことだ。

その上、コテツ、騎士団団長、副団長と来れば、室内には厄介ごとの空気が漂っていた。

その、厄介ごとの気配のする空気を切り裂くように、アマルベルがは切り出した。

「公の会議でもなんでもないから前置きなしで行くわ。村から苦情が出てるから、三人で最近住み着いた山賊を倒してきて頂戴」

まさに、厄介ごと。

その言葉に、いち早く反応し顔を歪めたのは、クラリッサ。

「何故三人なのですか！？　こんな奴いなくても私と団長がいれば……！」

確かに、この三人という面子は異常でもある。騎士団としてでもなく、エトランジェとしてでもなく、混成の三人で、だ。

その説明として、アマルベルガは更に口を開いた。

「クラリッサ、この討伐の目的はコテツのためにあるのよ。分かるかしら？」

「……どういことですか」

クラリッサが聞けば、アマルベルガはコテツのほうへと目を向ける。

「コテツ。貴方の風評は貴方がどうにかしなさい、ということよ。

分かるかしら？　コテツ」

「……は」

そう、コテツの現状の評判は非常に不安定だ。

先の戦いの活躍を信じて敬意を払う者も居れば、頑なに信じない者もいる。

だから、評判をある程度固定化しなければならない。

一応のこと、コテツもそれは理解していた。

それ故、王女に言われ、コテツは領きを返すのだが、それだけでは不服なのか、アマルベルガは彼に言った。

「公の場以外では素で構わないわ。むしろ思ったことを話してちょうだい」

言われて、素直にコテツは思ったコトを口にすることにした。

王女は聡い。下手に取り繕っては、火傷をすることになるだろう。ならば、言われたとおり本音で話したほうがいい。

「俺は別に……」

そして、本音を言うならば、コテツとしてはどうでもいいのだ。風評も、なにも、馬鹿にされて怒るなら、もっと前に暴れている。むしろ、風評など知ったことではなく、好きに行きたいと思うのだが。

だが、そうは問屋が卸しはしない。アマルベルガは、ぴしゃりと言い放った。

「貴方がそうでも、国としては困るのよ。貴方の評価が低いと。だから、盗賊討伐をこなしなさい」

そこまで言つて、アマルベルガは、今度はシャルロットとクラリツサの方を見る。

「貴方達はその証明役よ。私が想定している最も上手くいったケースならね。王女騎士団団長と副団長が盗賊討伐への貢献を認めたら誰も文句は言えないでしょう？」

「ですが、こいつは……」

食い下がるシャルロッテに、王女は言葉を被せた。

「勿論、それは最高のケース。駄目なら、貴方達が討伐なさい。結果は変わらないわ」

「つまりこの男に手柄を渡せというのですかっ」

「貴方達にとつてそれは誇りを汚す行為だということは分かっているわ。ただお願い。必要なのよ」

不満はあるようだが、王女に言われ、クラリッサも渋々ながら、頷くこととなった。

「王女様が、そこまで言うなら……」

「そういうことよ。お願いね」

「はっ、了解です！」

クラリッサと、シャルロッテが揃って敬礼をする。

そして、話は纏まったのかと、コテツはどうでも良さげに窓の外へと目を向けるが。

「それとコテツ」

ぴしゃり、とそこに王女の声が掛かった。

「貴方がやる気になるかどうかは自由よ。だけどね、貴方の意思に関わらず貴方は国の中心に立つし、私が立たせるわ」

「今回の件のように？」

皮肉。だが、アマルベルガは涼しげな顔のまま。

「ええ」

「ふらりと呼び込んだ外人が国の中心か」

「そうよ」

「正気じゃない」

「わかってるわ」

最後まで、王女は、表情一つ変えなかった。

「お願いね」

「了解」

だから、結局コテツは、それだけ言って退室することにした。

「あなたは！ 王女様になにを言っているのですっ」

出るなり、コテツはクラリッサに肘で小突かれることになった。

「ちょっとちょっと、クラリッサさん、別に王女様も怒ってなかったじゃないですか」

「あざみ様……、貴方は何故こんな男のことを……」

「素敵だからですよ。他に理由がいります？」

言われ、クラリッサは言葉に詰まる。

行き場を失った矛先は、結局またコテツへと向けられた。

「コテツ・モチヅキ！ 少し来てください！」

「何の用だ？」

「訓練です。特別に私が付き合っただけから来なさい」

強引にクラリッサがコテツの腕を掴む。

（最近引き摺られてばかりだな……）

思いながらも、抵抗せずに引き摺られていくコテツ。

「あ、待ってくださいよご主人様」

「……大丈夫なのかこの面子で」

シャルロツテの問いに答えるものは、誰一人としていなかった。

8話 依頼否応無し（後書き）

ファンタジーテンプレの極致といえば盗賊の討伐だと思います。

9話 狐耳R&P;R

「……まったく、やってくれる」

山賊の討伐を依頼された夜。

自室で、コテツはベッドの上に転がっていた。
思わず、口から溜息も漏れ出る。

「大丈夫ですか？ コテツさん」

そして、そんな淀んだようなベッドの隣には、心配そうにコテツ
を見つめるリーゼロッテが居た。

ちなみに、コテツの疲労の原因は簡単。
クラリッサとの訓練が、全ての原因だ。

「別に肉体的疲労は大したことはないのだが。精神的には少しな」

訓練自体はいい。最終的に夕方を過ぎるまで振り回され続けたが、
体力には自信があるほうだったので、問題ない。

しかし、コテツを苦しめたのはクラリッサの嫌味攻撃である。

あまりに続く、とどまるところを知らない罵詈雑言は、容赦なく、
じわじわとコテツを疲労させたのだった。

おかげさまで、やる気の一つも沸いてこない。

「なにか、して欲しいこととか……」
「特にないな」

言つと、リーゼロッテはしゅんと肩を落とす。
それに追従するように、耳と尻尾も垂れ下がった。
コテツは、それを見ようとせぜ、天井を見つめて思い馳せる。

（今回の訓練でラグの具合は随分と把握できた。しかし、機体の着地時のクセは……）

思い浮かべるのは今日の訓練のことだ。
行つた操作。それに対する機体の反応。全てを思い出し、理想との差を浮かべていく。

それを蓄積し、もっともベターな操縦を探る。
そんな深い思考の海に、コテツはもぐりこんでいく。
のだが、そんな最中。

「む……？」

何故か、自分の手首が握られ、そして、何故かベッド脇に屈みこんだリーゼロッテの頭に自分の手が乗せられていることに気がついた。

思考から一気に覚めて、思わずそちらを見ると、唐突にひよっこりとベッドの縁からリーゼロッテが顔を出した。

「あ、あの。その、お姉ちゃんが言つには、えと。私に触ると、癒されるって、そんな感じのことを……」

戸惑うように、その狐耳がぴくり、ぴくりと震えている。
コテツは、思わず目を丸くしていた。

そんな中、リーゼロッテは続ける。

「ひ、膝の上に乗せて頭を撫でるのがベスト、だそうですっ」

そこまで来て、やっとコテツは苦笑で返した。

気遣われているのだ、と今更気が付く。

「その……、私じゃ貴方を、癒せませんか……？」

気が付いた頃には、その一生懸命さに申し訳なくなるほどだ。

「あー……、遠慮……、いや」

故に、そこまでしてもらうほどじゃない、遠慮しよう、とコテツは言いかけたのだが。

やめた。

また、失敗してしまったか、とばかりに耳が垂れそうになるのを見たからだ。

そして、彼は思い直すことにした。

（まあ、何事も経験か……）

気遣いや厚意を遠慮するのも美德だが、やりすぎは無粋である。時にはそれに甘えることも肝要だ。

と、自分を誤魔化すように、コテツは頷いた。

「お言葉に甘えるでしょう」

「は、はいっ」

今度は緊張したようにピンと立つ尻尾と耳。

その緊張具合を見て、やっぱりやめたほうが良かっただろうか、とコテツの思考はあちらこちらとふらふらする。

だが、コテツが何事かを口にする前に、リーゼロッテは覚悟を決めたようだった。

「じゃ、じゃあ、失礼しますね」

ベッドの端に座りなおしたコテツの膝に、ゆっくりと腰を下ろすリーゼロッテ。

甘い香りが鼻腔をくすぐり、その髪が、物理的にコテツの首元をくすぐった。

そして、くすぐったさも無くなった後、コテツは、しっかりとリーゼロッテ座ったのを確認して、聞く。

「それで、どうすればいいんだ？」

「え、っと、その、撫でてください……」

言われて、不器用にコテツは、リーゼロッテの頭の上に手を置いた。

ぴくん、と体全体で震えて、彼女は驚きを示す。

その反応に、コテツは一度手の動きを止めることにした。

「何か、まずかったか」

「だ、だいじょうぶです、はい」

「じゃあ、次はどうすればいい？」

「えっと、じゃあ、手、動かしてください……。髪を、梳いてみた
りとか」

言われるがまま、コテツは手を動かす。

さらさらとした毛の質感は、人の髪の毛、と言うよりももっとふ

わふわとした気持ちのいい、まるで猫でも撫でているかのような手触りだ。

「こてつ、さん」

「なんだ」

「その、ちよつとくらい、癒されますか？」

「ふむ……」

「なんか、私の方が、癒されてる気がして、ごめんなさい。また、失敗ですね」

そんな言葉に、コテツは少し思案して、こんな答えを返した。

「いや……、そうでもない」

はたして、リーゼロッテをどれだけ撫でたか。

コテツの部屋に時計はない、というか、コテツはこの世界で時計を見たことがないわけだが、とにかく正確な時間はわからない。

が、それなりの時間が経ったため、緊張しっぱなしだったリーゼロッテもやっと、落ち着いて話が出来るようになっていた。

「すまないな」

「えっと、いきなりなんでしょう。謝られる心当たりがないんです

が」

「こんなことまでさせて、だ」

撫でながら、唐突にコテツは呟いた。

リーゼロッテは、苦笑して返す。

「いいんですよ」

「そうか？」

「いいんです。私、あの時、コテツさんが生きて帰ってくる、って約束してくれて嬉しかったんです。だから、いいんです」

「そんなに、嬉しかったのか？」

「亜人の約束を守ってくれる人なんて、早々居ませんよ？」

「……そうか」

コテツには、耳と尻尾が狐の物であること以外に、リーゼロッテが普通と違うところを見出せない。

むしろ、かなり上等な人間にすら思える。

故に、リーゼロッテの受けているであろう差別を、どうにも実感できなかった。

「そういえば、コテツさん。クラリツサさんと訓練してたんですよ」
ね」

そして、その話は終わりだ、とでも言うようにリーゼロッテは話題を変更。

特に追求すべきではない、とコテツは判断し、普通に頷いた。

「ああ」

「それで、お疲れなんですよね？」

「そうだ。突っかかって来るのは、可愛いものだが」

天を仰いで、溜息を吐くコテツ。

対するリーゼロッテは、嗜めるようにコテツに言った。

「適当に、あしらってるからじゃあ、ないんですか？」

「む……」

「ダメですよ？ 本気で相手してあげなきゃ」

「いや、しかし、別に手を抜いていると言っわけでもないのだが…

…」

言い募るコテツに、リーゼロッテは、振り向いて真面目そうに言う。

「なら、ちゃんと言葉で伝えないと」

「むっ……」

「伝えようとしないと、何も伝わらないんですよ——？」

そう言つて、彼女はにっこりと笑う。

なんとなく、がらんどうの心に、暖かいものが入り込んできたかのような感覚を、コテツは覚えた。

そして、やっぱり、彼女の方が人として上等だ、と苦笑する。

この世界に来て、初めてコテツに火種を与えたのが、彼女。

だからこそ、そんな彼女をコテツは。

「……言葉を尽くすのは得意ではないが」

なんとなくではあるのだが。

「——やるだけやろう」

裏切りたくないと思った。

すると、彼女は笑う。コテツを信じるように。

「はい。応援してます。大丈夫ですよ、コテツさんはすごい人ですから」

「そうか？」

「はい……！ 私が保証します。驕らず、偏らず、ニュートラル。それって、すごいことです」

果たして、コテツがこのように人と触れ合うのはいつぶりだったろうか。

コテツ本人にはわからないが、どうにもリーゼロッテの笑顔だけは、眩しくて仕方が無かった。

「だから、色々諦めないください。頑張らなくてもいいですから」
「……諦めない、か」

「はい。微力ながら私が、全力でお手伝いしますから」

言われて、少しだけ、空の心に火が灯る。

彼女が、コテツに親切な理由を、コテツが全てを窺い知ることはできない。

語ってくれた言葉の中にあつたものの他にも、もっと多くの理由があるのだろう。

（いつか、聞くこともあるかもしれん）

だが、こうして献身的に向き合ってくれる彼女を見て。

不思議と、胸に灯った火種を消したいとは思わなかった。

「……ご主人様、疲れてます？」

「いや、そうでもない」

アインスの狭いコクピットに、あざみと二人乗りをしながらも、コテツは涼しい顔で機体を動かす。

昨日結局夕方を過ぎるまで訓練を続けていたコテツをあざみは氣遣うが、彼は眉一つ動かさなかった。

『ちゃんと付いてきてますか？』

「問題ない」

コクピット内の響くのは、クラリッサの声だ。

コテツ、あざみ、シャルロッテ、クラリッサ。実際に移動しているのは三機。

「んー、でもアレですね。早めに予備の機体を用意してもらったほうがいいでしょうか。もしくは複座にこれを改造して貰うとか」

「そうかもしれないな。この世界の複座機がどんなものかは知らない

が」

「ディステルガイストを見せてしまうと盗賊が警戒する、と言うのも分かりますけれど、操縦しにくくないですか？」

「こういった状況にも対応するのが優秀な軍人、と言えどもこの先恒常的にこうだと少々苛立つな」

「私としてはご褒美なんですけど」

あざみは、コテツに抱きつくように体を固定している。

「しかし、君は本当にディステルガイストを呼び出せるのか？」

「ええ。アルトの基本の機能ですよ」

こうして、アインスに乗っているのも、あざみが居れば即座にディステルガイストを呼び出せる、という機能があるからだ。

空間を渡って、機体を呼び出すことが、エーポスには可能らしい。

『さて、そろそろ中継の村に着くぞ。今日は一旦そこで休んで明日戦いに出る』

シャルロットの声が響き、その仏頂面を遠くにある村の遠景へと向けた。

「ところで、この件の山賊とやら、一体どのような相手なんだ？」

『ふむ、コテツは山賊の相手は？』

「元の世界ではそのような相手ともやったはずだが、その経験が役に立つとは思えん」

『それもそうだな……。今回の山賊は、今見えている村から更に奥の山にいる。奴らは山道に陣取り、そこを通る者から物を奪い取る。山賊がSHを所有していた場合馬車であればまったく齒が立たん』
「だらうな」

『通常は通る側もSHの護衛をつけるが、それができない場合は通行止めも同じだ。厄介がすぎる』

「これを討伐すれば名誉としては十分、ということか」

『無論。ここは重要な街道だからな』

石畳で整備されているわけでは無いが、一面の草原に、一本描かれた土色の道はかなり広い。

『さあ、村に着いたぞ。話は既に付いてる』

そうして、三機の機械の巨人は、草原へと膝を付くのだった。

9話 狐耳R & amp ; R（後書き）

可愛いのは正義だと思います。まあ、リーゼロッテを出した時点でこういうことしたかったのは火を見るより明らかだった気もしますが。

一章のほうは読み切りのな空気ですっきり終わるようにアクを少なめで行きましたが、続くとはとりあえずやりたいことやってきます。

しかし、これで私が狐耳萌えだということがばれてしまった様な気が……。

いえ、まあ、ケモ耳とかまるっと好きなんですけどね。

とりあえず、焦らずゆっくり一人一人前面に押し出して行けたらと思います。

どう考えてもメインキャラ全員並行に同時進行でプッシュとか無理ですし。技量的に。

10話 すれ違う訓練

「はぁ……、このお方が、今回のエトランジエですか」

SHの技術は、通常の生活にまったくと言っていいほど転用されてはいない。

そのため、村は周囲を木の柵で囲っただけ。村長の家でさえ木造建築。

鉄の色など、どこを探しても見当たらない。

「よろしくお願いします、エトランジエ様」

エトランジエの名は、国中、村の一つ一つまで広まっているようだった。

村長は深く頭を下げ、コテツの手を握る。

コテツは、無言で村長の姿を見ていた。

「やるだけやらせてもらおう」

そう言って、コテツは村長から背を向けた。

その背を、あざみが追う。

コテツは、家を出て近くにあった木を倒して削っただけのベンチに座る。

「ご主人様？　どうかしたんですか？」

「いや……」

さりげなく、あざみがコテツの隣に座った。

「初めて首都から出たわけだが、こうしてみると」

「こうしてみると？」

「異世界に來た事を実感させられる」

「そんなモンですか？」

「外に出るまでは、いつそ地球に封建制の国が残っていたと言われたほうが信憑性が高いと思っていた」

「はあ、なるほど。異世界設定とか、壮大なドッキリの方が信じ易いかもしせんね」

「だが、こうして世界の奥行きを見せられると、遠くまで來たものだ、とな」

遠く空を見上げてみても、コテツの居た地球と変わったところは見当たらない。

「大丈夫ですよっ、ご主人様。私がいいますからっ」

「まあ……、ある程度俺の世界の話題が通じるのは、助かる」

と、そんな二人に駆け寄る人影が一人。

コテツが足音のする方に目を向けると、底にはクラリッサが立っていた。

「コテツ・モチツキ。なにいきなり家から出てるんですか。村長さんが何かしたかって戸惑ってました」

「まあ、少しな」

クラリッサは、コテツに呆れた目を向けている。

世間知らずを見る目だ。

「まあ、それは異世界から來たんだから色々あるんでしょうけど。村長さんは今、いつ盗賊が山を降りてくるかって怯えてるのです。」

それを安心させるために胸を張るのも、私たちの仕事。余裕のあるフリだけでもなさい」

「そうだな。すまん」

「さて、じゃあコテツ、行きますよ」

「どこにだ？」

踵を返したクラリッサに、コテツは首を傾げた。

「訓練です、付いてきなさい」

有無を言わせず、クラリッサは言い切る。

これに逆らうと、ろくなことになる。

ちくちくと、嫌味が続く上に、結局訓練させられるのだ。

コテツは、無言で立ち上がった。

そして、二人無言で歩く。

さほど広くも無い村を出て、膝を付く機体の元へ。

装甲を登ってするりと胸のからコクピットに入り込む。

コンソールを弄ると、ハッチが閉められ、機体が立ち上がった。

それは、クラリッサの機体も同じのようで、アインスと似ているようで、どこかスマートな印象を受ける赤い機体が立ち上がる。

それと同時に、コクピットに声が響く。

『真剣だけど、問題ありません。あなたの剣くらい避けるし、こっちは寸止めにするから』

「了解」

コテツは短く答えた。

確かに、コテツもクラリッサも、壊れる寸前で止めるくらいの技量はある。

それに、コテツのアインスであれば、壊れたとしてもディステル

ガイストがある。

山賊が警戒する件に関しては、他の面子に相乗りするなり、SHの手のひらに乗るなりして移動し、必要とあらばディステルガイストを呼び出せばいい。

そもそも、城内で信頼を得るまでコテツは一日も無駄にできないはずの立場だ。

だから、訓練も当然。

熱が入る。

『じゃあ、行きますよ!』

クラリツサからの通信が届くと同時、高速で赤い機体が踏み込んできた。

シユテイルフランメ。特徴は高出力による機動力とハイパワー。弱点は装甲の薄さ。クラリツサはその弱点を巨大な大剣を盾代わりにも扱うことで、機動力を殺さずカバーすることができる。

コクピットには、その大剣が風を切る音すら聞こえてきた。

(機体が少し振り回されているな……)

考えた瞬間、インパクト。

横から迫る黒い大剣を、コテツはブロードソードを立てることで対応した。

「……ぬ」

初撃は防御に成功。

しかし、通常の出力が違いすぎる。

ともすれば押し切られかねない。コテツは受け流すように、しゃがみ込む。

頭上を大剣が駆け抜けていき、コテツはそのまま大剣を振り切った体制のシュティールフランメに突きを放つ。

「んっ……！ 悪くないけど、当たらない！！」

あるいは当たるかと思われた攻撃だが、すんででクラリツサは身を翻した。

コテツから見て右に体をずらしたシュティールフランメが、そのまま縦に剣を振り下ろす。

コテツは、片膝について、剣を横にし受け止める。

「ぐ……、くっ」

機体が軋む。

出力の違いは絶対的な差として、コテツのアインスを押しつぶさんと押し掛かって来ていた。

まず一番最初にガタがくるとすれば腕だ。まず腕が裂けて千切れる。

（避けられるか……？）

迷う暇はない。潰されない内にかする必要がある。

コテツは連動型操縦桿を握り、繊細な操作を行った。

機体を右にずれるようにしながら立ち上げらせ、剣は次第に切っ先を下へ向けるようにする。

調整をしくじれば立ち上げられず潰されるか、先に大剣が滑り落ちて体を切り裂くかのどちらかだが、コテツは上手く成功させた。

かみ合っていた刃は滑りあい、大剣は地へと向かう。

コテツはそのままブロードソードを横薙ぎにするが、あっさりと弾かれた。

（やはりこの動かし方だと、攻めは合わないな）

考えながらも、機体を動かす。

とりあえずは距離を取る。大剣の間合いの外へだ。

（しかし、このラグと即応性の悪さ。俺の世界で行けば何世代前の機体になるんだ……？）

クラリツサが踏み込んで、連撃を行う。

（しかも魔術補正か、妙に性能が良いから手に負えん）

まともに受けてはいられない。

その全てをコテツは流すように受ける。

（この世界の技術では操縦周りの設計は難しすぎるのか？ だから機体性能にばかり目が行ってしまっ……、いや、マイルドな方が確かに動かしやすいか）

続く連撃。

コテツは受け続ける。

（……まあ、今回はこんなものか）

そして、最後に、コテツは持っていたブロードソードを弾き飛ばされた。

「参った」

『いつも通りですね！ コテツ・モチツキ！ シャルロット様が直

々にあなたを鍛えているというのに申し訳ないとは思わないんですか！！」

そんな声を聞きながら、コテツはコクピットから出て、機体を降りる。

そして、そのままコテツは近場にあつたベンチに座り込んだ。少し遠くでは、クラリツサが機体を降りているのが見えた。

そんな彼女は、機体を降りるなり、すぐさまコテツの前へとやってくる。

「今日も私の勝ちですね」

そして、そう言ってクラリツサは無い胸を張った。

コテツは、そのクラリツサを見上げ、素直に頷いた。

「そうだな」

「……。ええ、これで私の何勝でしたっけ」

「七勝目だ」

「……そう」

何故か、彼女の眉間には皺が寄っていた。

コテツにも、機嫌がよろしくないことは見て取れる。

「……歴代最弱ですものね」

「そうかもな」

いや、現在進行形で悪くなっている。

コテツが言葉を紡ぐ度に、彼女の顔は不愉快そうに歪んでいた。

「本当、前代未聞ですね」

「だろうな」

「なにか思うことは」

「ない」

コテツは真顔で答えた。

「あなたは……！」

「なんだ」

「あなたは一体何なんですか……！？」

「君は俺に何を答えさせたいんだ」

そして遂に。

コテツはクラリツサの堪忍袋を引きちぎってしまったことを知ることとなった。

「……悔しがってくださいよ」

ぼつり、とクラリツサはその言葉をこぼした。

コテツは、意味がわからず首を傾げる。

「何故だ？」

すると、まるで堰き止めていたものが決壊したかのように。

「どうして悔しがりもしないんですか！」

遂に、クラリツサは語気を強めて言い放った。

コテツは、表情に出さないまま面食らっていた。

「負けても馬鹿にされてもへらへらと！　それが愉快的な訳じゃない

んでしょう？　あなたが悔しいと言っのなら――！！」

コテツは、黙ってクラリツサを見上げる。

「ど、どうしてそこで捨てられた犬みたいな顔するんですか……」
「すまん」

捨てられた犬のような顔、というよりは困り顔だ。

コテツは人付き合いが下手だ。それを求められなかったからだ。
機体に乗って、勝ち続ければ何も文句は言われなかったのだ。

「なんで、謝るんですか」

「すまん。……とりあえず、どうして俺が悔しがらないのか、という話だったか」

コテツは、人付き合いの薄さゆえに戸惑う。

が、しかし、彼はそれでも一応考えて答えることにした。

コテツは、クラリツサを見上げたまま、口を開いた。

「負けたら死だった。悔しがる暇もない」

情けもまた誉れであるこの世界とは違う。

コテツの世界はもっと血なまぐさい。むしろ、エースは意地でも殺さなくてはならない存在だ。

「次があるのは素晴らしいことだ」

「だ、だからって！　どうして、あなたは……」

言葉に詰まるクラリツサ。それを見上げながらも、コテツは彼女の言葉の意味を考える。

「あなたを見てると苛々します！　どうして、あなたは平然としてるのです！」

「君は、俺に悔しがって欲しいのか」

「っ……、そう」

クラリツサ。クラリツサ・コーレンベルク。

優秀だが、まだ未熟。融通が利かないが、真面目な努力家。

「……君が、努力家だからか」

「は？　あなたは何を言っているのです？」

どうやら、上手く伝わらなかったらしい。

コテツは今一度言葉を吟味する。

「つまり。努力もせず、嘲笑される側に甘んじていながらも、エトランジエでありアルトの操縦士に納まった俺が気に食わない、ということではないのか？」

「っ……！！」

少なくとも。ただコテツ・モチヅキが気に食わないというわけで突っかかってきているのではない、とだけコテツは判断できた。

とりあえず、彼女が努力家の一人として怒っているのだ、ということも、わかった。

つまるところ、努力家からすれば、努力しないコテツは見えてて苛立つ、嫌いだ、ということなのだろう、と考えたのだ。
だが。

言われたクラリツサは、驚いたような顔をしていた。
まるで、シヨックだ、とでも言いたげな顔だ。

「違う……、違いますっ！ もう……、知らないっ！！」

クラリツサが踵を返す。

コテツは声を掛けようとしたが、言葉が見つからなかった。
ただ、クラリツサの背を見送って、コテツは首を傾げながらのろのろと立ち上がる。

「……難しいな」

ぼつりと呟くが、それに返ってくる答えはない。

と、そこへ、見計らったかのように、あざみがやってきた。

「訓練、おしまいですか？」

「ああ」

頷くと、あざみはタオルを差し出し、コテツはありがたくそれを受け取った。

そして、少し、あざみに聞いてみる。

「あざみ」

「なんででしょう？」

「努力家にとって、努力しない人間は、どう映る？」

言葉に対し、あざみは首を傾げ、数秒の思考の後、考えを語った。

「私も努力家じゃありませんからわかりませんが。努力しろよこの野郎！ って感じじゃないですかね？」

「……ふむ」

結局、移動と訓練で日は暮れかけている。

コテツは、村に戻って眠ることにした。

「ねえ、ご主人様」

夕食を終えた後、ふらりと外へ向かい、一人佇んでいたコテツの背に声が掛かる。

コテツを主と呼ぶ女性など、一人しか心当たりはない。
あざみだ。

「なんだ」

「ご主人様って……、操縦以外基本的にダメ人間ですよね」

確認するような言葉に、思わずコテツは脱力する羽目となった。

「……否定の言葉は出てこないが。一体何の用だ」

「いえね、今日の訓練が終わってからクラリツサさんにガン無視されてたなあ、と思ひまして。何かあったんですか？」

「ふむ、まあ、そうだな。怒らせた」

事実だけを、コテツは短く告げる。

「怒らせたって……。まあ、いいです。とにかく、明日は出撃ですね」

「そうだな」

今日が終わり、明日の日が昇ればコテツ達は山へと向かうことになる。

コテツの初仕事であり、何もかも未知数だ。

「頑張りましょう、ご主人様っ」

「そうだな」

「むう……。やる気ないですねー」

拗ねたように口を尖らせ、あざみはコテツを見る。

そして、すぐに表情を戻し、コテツに向けて、妖しく笑った。

「そんなご主人様に一つご忠告を」

「なんだ」

「何も持たない、夢も見ないし願望もない。それは自由で楽ですけど」

月夜の下で、黒髪の少女はコテツに向かって囁いた。

「状況はそんな貴方を許しません。結果が同じなら自ら進むか、無理やり背中を押されて進むか。どっちがいいか、決めておいた方がいいですよ——？」

言うだけ言って、後はおやすみなさいと言い残し、あざみはコテツの元を去っていく。

「……この世界には、お節介焼きが多いのか？」

残されたコテツは、一人ぽつりと呟いたのだった。

10話 すれ違う訓練（後書き）

次回辺りから戦闘に入ります。

11話 イージーストレート

翌日。

S Hに乗って、一同は山へと向かっていた。

「しかし、相手の規模はどのくらいなんだ？　そもそも、三機で戦えるのか？」

コテツは、モニタの向こうに向かって質問を投げかける。

『問題ない。多くて十機。少なければ一機。構成員は三十はいるだろうが、全てがS Hを持つているなどということはあり得ない。目撃情報では四機は確認されている。伏兵追加で考えて、六機前後といったところか』

「こちらの二倍いると思っていいいのか」

『だが、こちらは騎士団長と副団長だ。そして、お前はデイステルガイストに乗れば一騎当千も同じだろう？』

「さてな」

しばらく歩き、山は目前となる。

緑が生い茂る、変わったところは見受けられない山だ。

そして、その目前でコテツは機体を立ち止まらせた。

『どうした？』

「妙だ」

嫌な、予感がしていた。

無論、それはただの予感であり、気のせいであるとも言える。

だが、戦場において臆病であることは、生き残る上でプラスにな

る。

『怖気づいたのですか？ コテツ・モチヅキ』

コクピットに、クラリツサの声が響き渡るが、コテツは無視して山を睨み付けた。

リーダーには、何の反応もない。

やはり、妙。

（ここまで何の偽装もせずにSHで歩いてきた……。どう考えても山賊にばれているはずだ。なのに相手のSHが一機も見えない……。）

定石であれば、斥候を出す。

山賊にそういった用兵術がないとしても、見張りぐらいは立たせるはずだ。

「畏だ」

コテツは強めに口に出す。

『畏？ 山賊たちは飲み明かして寝こけているだけかもしれんぞ』

違和感は、嫌な予感に変わって、ひしひしと迫ってきていた。

あまりにも静かな山。まるで嵐の前の静けさではないか。

敵のSHを見つけて慌しく駆け回るでもなく、ただ、静か。

（十中八九、待ち伏せか）

コテツの感覚からすれば、静か過ぎるのだ。

そう、過ぎる。まるで、あえて息を潜めるかのような。

静寂に徹しているかのような空気。

この業界で慎重に過ぎるとい言葉はない。

用心に用心を重ねてなお、一撃で死ぬ可能性のある世界だ。

樂觀どころか、もしかするとこちらを一瞬で葬り去れる罠が張つてある可能性を考慮すべきだ。

少なくとも、コテツはそうあるべきだと考えていた。

だが、しかし。

『怖気づいたのですか、コテツ・モチヅキ。ならば、あなたはここに残っていないさい』

「罠の可能性は」

『どちらにせよ私たちは山賊を倒さなければならない。なら、どちらも一緒です。待ち伏せされていようと、私と団長の腕なら問題になりません』

『悪いが、こればかりはクラリッサと同意見だ。やることは変わるまい。それに、罠があつたとしても、それごと突破するまでだ』

ここは、そう。

ここはコテツがいた、泥まみれの戦争を続ける世界ではない。

正々堂々を誉れとする、騎士の世界なのだ。

（軍人の理屈は騎士には通用しないのか……！）

そこをコテツは失念していた。今所属しているのは合理性を突き詰めた軍隊ではないということ。

齒噛みした時にはもう遅い。

『そこまで言うならあなたはそこで見ていなさい！ 私が一人で片付けてきます！』

既にクラリッサは大きく飛び上がり、山へと駆け出していた。

「シャルロッテ、すぐに呼び戻せ」

『そこまでか？』

「ここまでやって何もしないということは懷に潜り込ませる気だ」

『いや、しかし山賊にそのような高度な考えがあるとは……』

シャルロッテが呟いた瞬間、場に動きがあった。

山中に突如現れる反応。立ち上がる一機のSH。

「……アレはなんだ？」

「ストラッドですね。量産型ですが、バランス良く纏まった軽快な動きをする機体です」

コテツの隣で、じつと事態を見守っていたあざみが呟く。

緑の、スマートな機体だ。

「意匠が、随分と違うように見えるが」

「我々の機体が騎士に似た意匠なのは軍のモノだからです。民間用は多種多様です」

コテツからしてみれば、そのストラッドは随分と軍人的な外見に見える。

そして、その緑の機体は、ナイフを片手にクラリッサのシュティールフランメに斬りかかる。

そんな中、シャルロッテは呟いた。

『ふっ、お前の嗅覚もまだまだだな。アレが罠だとすれば』

そして、余裕たっぷりの笑み。

クラリツサの機体が、背の大剣を跳ね上げる。
それは明らかにナイフの迎撃には間に合わないような速度だった
が――。

『随分とお粗末だ』

刃ではなく、柄を振り下ろして、クラリツサはそのナイフを弾いて見せた。

『舐められたものですね！』

そして、手首を捻って横薙ぎ。

相手のストラッドは、慌てて後ろへと避けて、尻餅を突く。

そのまま、クラリツサは大剣をストラッドの眼前に突きつけてみせる。

『おとなしく、機体を降りなさい。そうすれば殺しはしないです』

確かに、見事な手際であった。

この腕の差、そして、武器無しではクラリツサに山賊が敵うわけが無い。

あっさりと、無力化されストラッドのコクピットハッチが、開く。

『やはり、警戒しすぎだな、コテツ。山賊のことだ。昨晚飲み明かして、大半が使い物にならないのだろう』

（いや、しかし……）

果たして、コテツが異世界の山賊について知らないだけなのだろうか。

だが、コテツの嫌な予感ほ払拭されないでいる。

むしろ、更に深まっていく。

（上手く行き過ぎている……！？）

そう、むしろ、だ。

相手の本拠に飛び込んだら、一機だけという温い待ち伏せ。

そして、あっさりと負け、素直に投降する盗賊。

あまりに上手く行き過ぎていないか。

だとすると、これは相手の仕組んだものではないのか。

そして、これが本当に相手が仕組んだものだとなれば、狙いはなにか。

（あの機体は罠。だとすれば次に狙うのは……）

考えてみれば、恐ろしく簡単だ。

今、クラリッサは一機に剣を向け、足を止めている。

——恐ろしく、いいのだ。

「狙撃だ、クラリッサ！ 避けるっ！！」

『え？』

コテツが叫んだのと、レーダーに光点が映ったのは、ほぼ同時だった。

そして。

クラリッサが驚いた声を上げた瞬間には、既に銃声が響いていた。

『あ……、きゃあああああ！』

倒れていく機体に、コテツは歯噛みした。

（なんと腕だ……！ 機体が起動してから一瞬で関節に当たった！）

山賊の放った銃弾は、クラリッサの機体の膝の裏に命中し、そのまま貫いた。

結果として、左足の膝から下が切り離され、機体はバランスを保てず仰向けに地に伏すこととなった。

コテツの元まで、地響きが聞こえてくる。

『な……、クラリッサ！ 無事か……！』

『は、はい、団長、なんとか。ですが、足がやられました！ 機体を立て直せません……！』

クラリッサの声は、ほとんど悲鳴と言ってもよかった。

完全に嵌められた。油断し、釣られて、撃たれた。

これでクラリッサはまったく身動きが取れない。

コクピットを出たが最後、すぐさま撃たれてしまったらう。そうなれば、ハッチをロックして神に祈るほかに、出来ることなどない。

『すぐに救援に向かう……！』

その状況を見て、シャルロッテが叫ぶ。
だが、その彼女を、コテツは制止した。

「待て」

『一体なんだ……！』

「これこそ罠だ。落ち着け、シャルロッテ。クラリッサはすぐには死なん」

瞬間、今一度銃声と悲鳴が響く。

銃弾が、クラリッサの機体の胸部装甲を叩いた。

威力的に貫通することも無く、少し装甲が削れただけだったが、部下の悲鳴はシャルロッテの頭に血を上らせるには十分でもあった。

『なにを戯言を！』

「だから待てと言っている！」

遂にコテツは、声を荒げた。

クラリッサが先行してしまったのは、コテツの態度が中途半端だったからでもある。

だからこそ、今回は意地でも止めることにした。

「狙撃手には常套な策の一つだ。一人目の手足を撃ち抜き、甚振って、それを見かねて出てきた仲間を撃つ」

例え機体の元に辿り着くまでは避けられてもだ。例えば、自機のコクピットにクラリッサを招きいれようとすれば、その間は確実に避けられない。

機体を担いで戻ったとしても、運動性は加重によって大きく落ちる。避けきれない。

そしてもう一つ。

クラリッサは、人質でもあるのだ。妙な動きをしてもクラリッサは殺す、と。

『ならばどうすればいい！ 指を啜えて見てるというのか！』

さらに勘が正しければ、クラリッサの周囲には十機近いSHが潜伏している。いや、これはほぼ確定と言ってもいい。

ここまで周到な相手がこれしか手勢を用意していない訳は無い。いかに上手くクラリッサの機体を確保できても集中砲火を受けて、

クラリッサは無事ではられないだろう。

(ならば……)

と。

コテツが自分の考えを述べようとしたそのときだった。
クラリッサから通信が入る。

『怖気づいたのなら、帰りなさい、コテツ・モチヅキ!!』

まるで、よくしなる鞭のような声だ、とコテツは思った。

「君はこの状況でなにを……」

敵のテリトリー内で機体は動けず、身動きがまったく取れない。
果たして、その恐怖はいかほどか。
なのに、クラリッサは言った。

『これは私のミスです。あなたがフォローする必要は……、ないです』

「だが……」

『帰りなさい！ 私は自分で何とかします!!』

自らでは機体も立て直せないこの状況で。

しかし、彼女はコテツの助けを拒む。

確かに、そうだ。コテツもまた、このような状況になったなら、
放っておけというだろう。

己のミスでの危機的状況。おいそれと助けは呼べない。

(だが、俺は死なせたいとは思えん)

死なせたくなひ、と、コテツは思ふ。

間違つてゐるのだ。先を展望せず、流されるままに生きる自分が生き残り、将来有望なクラリツサが死ぬ。

そんなものは、間違つてゐる。

無論、コテツも死にたいとは思つてゐない。

ならば、答えは一つ、全員で生き残るしかない。

『あなたでは足手まといですから！　だから、帰りなさい！！』

だが、話は聞いてくれそうにもない。

コテツは、押し黙つた。

(……駄目か)

そもそも、コテツはコミュニケーションは得意ではないのだ。

彼女を上手く説得する言葉も何も思い浮かばない。

どうにかしようにも、彼女がそれを許さない。

故に、八方手詰まり。

なのだが。

しかし、しかしだ。

ただの一度も。

望月虎鉄は戦場で諦めることを望まなかつた。

だからコテツは息を大きく吸い込んで。

叫んだ。

「——話を、聞けええええッ！！」

一緒に乗っていたあざみが耳を押さえて顔をしかめるが、とりあえず無視した。

そして、モニタの端に映るクラリッサとシャルロットが驚いた顔をしていたが、それも無視だ。

やっと静かになった。ここに来てやっと、コテツは発言権を得た。
(やってみようじゃないか。伝える努力というものを……！)

思い浮かぶのは、リーゼロッテの言葉。

こうなってしまったのは、コテツの怠慢でもある。

何も伝えようとせず、信頼されようとしなかったのはコテツの失敗だ。

だから、今語る。

「いいか！ 俺は君が思っているほど弱くないっ。そしてもう一つ！」

慣れないからこそ、最短で、簡潔に。

「——君は必ず助ける。絶対にだ」

11話 イージーストレート（後書き）

そろそろテンション上げていきます。

展開の強引さとか、力不足を実感しながら書いてますが、二章も大詰め。このまま走りきりたいです。

ちなみに、本編でも出てきますが疑問が出るかもしれないので先にここで。

軍用機：ある程度の整備を前提として、魔術と機体性能を優先。優れた魔術は銃に勝ると言う考え。ついでに、剣で戦うのが華々しい騎士の流儀である。見栄と威圧を意識して洗練されたデザインを目指す節がある。

民間機：満足に整備を受けれない可能性も考え、汎用性を重視。また、魔術が使用できないものも多いので、銃を持つことが多い。弾丸は魔術の展開スピードに勝るという考え。

12話 リバーサル

生身で森をひた走る。

それが、コテツの出した答えである。

『ご主人様ー、貴方ほんとに人間ですかー？』

シャルロットが警戒しているように見せかけ、極めて遅いスピードで山を登り、それを囷にコテツが生身で走る。

これなら、気づかれずにギリギリまで接近できる。

『ちよつと正気じゃないスピードが出てるんですけど……』

「殺人マシーンに乗って生きている人間を人間と呼ぶなら、人間だが」

無謀にも見える策だが、コテツの走る速度は、常軌を逸していた。それ故に、迷わずコテツは其の選択肢を選んだ。

『初耳ですけど、それ』

コテツにとっては、否。コテツの居た世界においては、腕のいいパイロットをエースと呼ぶのではない。

従来機を一足飛びに越えた、エース機に乗ることができた者をエ

ースと呼ぶのだ。

エース機を起動させるために、何人のパイロットが死んだか定かではない。

ただ、少しの加速で人体が破壊される機体群を動かすには、それほどまでのことが必要だった。

「俺が君に平気な顔で乗れるように、俺はそれに乗り、慣れた。その結果だ」

腕のいいパイロットを捨石にしてもエースを得ようとする風潮はどこから生まれたのか。

それは、最初に乗りになせてしまった男が居たからだ。

そのエースはパワーバランスを覆すほどに強かった。それ故に、その彼と同じものが必要だったのだ。

AI分野も研究されたが、実用化に成功したのは結局戦争も末期。その上、人の操る繊細で有機的な操縦に敵うことはなかった。

それ故に、万の人間を殺してでも、あらゆる勢力はエースを作り出すことに躍起になる。

そして、そんな風潮の中、コテツはエース機に乘せられ、生き残った。

その上更に。人間とは必要以上に適応する生き物で、機体に慣れた。

エース機の機動によって人体に掛かる過負荷は、脳の使用領域の拡大と、筋肉の異常発達を招く。

『つまり、アルト乗りになれるひと、なった人は全て、人間やめつつて事ですか？』

ヘッドセットから聞こえる声に、コテツは答えなかった。
そうとも言えるし、そうでもないと言える。

一応遺伝子的には人間とまったく変わらない。

（一番変わるのは精神的部分かもしれんが）

コテツが係わり合いになった全てのエースはどこかずれていた。人として致命的に、ブレていた。

「だが、便利だ。平和なときにはまったく役に立たないが……！」

と、木々の向こうに赤い影が見えた、と思ったその瞬間。身の危険を感じて、コテツは大きく横に飛びのいた。

『ご主人様！！』

轟音と共に、地面が決れる。

「どうやら目視で発見されたようだ。シャルロッテ、あざみ、を頼む！」

『任せてくれ』

『お任せあれっ』

言葉を伝え、コテツは走ることに集中した。姿勢を低く、ただ、クラリッサの下を目指す。

上を見上げれば、既に十機近い機体が動き回り、その中の一機は、コテツに銃口を向けている。

「くっ……」

勢いのまま、前に飛ぶ。

背後の地面が抉れ、振動と共に土や木の破片がコテツの背を叩いた。

『こ、コテツ・モチヅキ、来てるの!?!』

クラリッサの慌てたような、驚いたような声がコテツの耳に聞こえてくる。その声に、攻撃を受けているような焦りはない。

どうやら、所詮生身の人間だと思って、クラリッサを人質として扱うつもりはないらしい。

好都合だった。

「すぐに着く」

『やめなさい! 危険です!!!』

「そんなこと、言われなければわからないと思うか?」

危険は百も承知。コテツはただ、付近を穿つ銃弾を無視して走り続ける。

「それに、君は俺が嫌いだろう。ここでもしも事故死したなら、それはそれでラッキーだ」

皮肉るような、コテツなりの冗談。

恐ろしいほど笑えない冗談だったが、冗談のつもりである。

そうかもしれないね、と軽口のような言葉が返ってくるだろう、とコテツは考えていた。

しかし。

コテツの予想に反し、返ってきたのはそんな台詞ではなく。

『そんなわけないじゃないですか?……』

返ってきたのは、涙声だった。

『あなたは大切なエトランジェ様なんですよ……！？　ばか！！』

コテツは、酷く面食らう羽目となった。

（なんだと……？）

彼女は、コテツを嫌っているのではない、と言う。

しかし、言われてみれば、彼女は非常に優秀で、物事に簡単に私情を挟んだりしない人間だ。

そう、コテツ自身がそう評価したのだ。

『決して好きだと思ったことはありませんが！　誰が死んで欲しいなんて思っもんですか！！』

決して彼女はエトランジェが期待はずれだったからと言ってわざわざ差別をするような人種ではない。

そして、嫌いではない、と彼女は言う。

ならば、彼女の態度はなんなのか。

（怒って、いるのか？　俺が不真面目な態度だから）

そして、思い出す。

（彼女は悔しがれ、と言った。悔しがらせたいと）

あの態度の理由。

それが、嫌いから来るものではないのだとしたら。もう後は一つしか思い当たらない。

思い当たって、コテツは思わず呟いた。

「……なんて不器用な」

あざみの言葉を借りるなら、『努力しろよこの野郎!』ということだ。

つまり、敢えて嫌われる態度で発破をかけようとしていたのだ。

(そこまでの考えがあったかどうかは知らないが……)

不器用に、あえて苛立つ態度を見せて、発奮させようと。

(不器用すぎるだろう……。俺には難解すぎる)

まったく、コテツには伝わっていなかった。純粹に嫌われているとすら思っていた。

だが。

がらんどうの心に、炎は燃え上がる。

(なんともまあ、伝えようとしなければ伝わらないことの多いことか。……リーゼロッテの言う通りだな)

『帰りなさい!』

「断る」

背後では、ディステルガイストが非常に緩慢な動きで動いている。パイロット無しではあの程度の動きしかできない。まさに動くのだ。

それでも、あざみも頑張っているのだ。

「ずっと、不器用な湯を入れられていたらしいからな。今の俺は、

やる気に満ち溢れているんだ――」

コテツは走る。

彼我の距離は約十メートル。

ここから先は限りなく迅速に、だ。

「クラリッサ！！ ハッチを開ける！！」

瞬間背後に衝撃。

迷わず、跳んだ。

そして、勢いのまま垂直になった壁のような装甲を駆け上がる。

無論、重力に逆らえずやがて駆け上がる速度は零になり、今にも逆走を開始せんとするが、そんなことは最初から承知のこと。

「届けっ」

伸ばした指が、装甲の縁に引っかかる。

そのまま、腕の力だけで引き上げて、転がり込むように、コテツは仰向けの機体の上に着地した。

そして。

コテツは即座にずれた胸部装甲の下。コクピットに潜りこんだ。

「――着いたぞ」

やはり、一人乗りのコクピットに二人は狭い。

コテツはクラリッサを押しつけて、高速でコンソールを操作し始める。

「あなたは……っ、なんで」

クラリツサは、泣きそうな顔をしていた。
綺麗に整った顔が、台無しなほど。

そんな彼女に、コテツは操作を続けながら、真顔で答える。

「君は若い」

「だからって……」

「君は可愛い」

「なっ……！」

「君には未来がある」

「あ、あなたは何を言って」

そこまで来て、自分は何かおかしいことを言っただろうか、とコテツは首をかしげた。

「戦うよりも。子を産み、育て、次の時代を創る。そういうものの方が尊いんじゃないのか？」

果たして、この世界では違っただろうかと。

しかし、クラリツサは、今、泣きそうになっていたことすら忘れて、呆けていた。

「君ほどの器量ならきつといい男を捕まえるだろう。そして家庭を作る。素晴らしいことだ。まあ、決め付けるわけにも行かないが、しかし」

コクピットハッチが閉じる。

「君は生きる。死ぬにはまだ早い」

「……」

首にコテツの首に回された腕に、ぎゅっと力が籠る。

「時代を守るために戦うのも、創ることに負けてはいません」

耳元でクラリッサが囁き、コテツは頷き返す。

「そうか」

クラリッサは、じっとコテツを見つめた。

「それに、あなただって」

「……それもいいかも知れんな。当面、嫁でも探す……、か？」
「な、なにそれ……、ぶろぽー……」

「さて……。機体を立て直すか」

コテツは、操縦桿を握りながら、もう片方の手の指でコンソールを叩く。

「……あ、む、無理です！ そんなの！！ もう片足もないって言うのに！」

「問題ない」

少しずつ、機体の上半身が持ち上がっていく。

さすがにこれには相手も気が付いたらしい。

唐突に弾丸が飛来する。

「きゃあ！」

「……バランサーをオートからマニュアルへ……！ 片足へのエネルギーバイパス遮断……！！」

掠める、周囲に着弾する、中^{あた}る。

良い当たりを受けた。肩の装甲の隙間に当たった弾丸が腕をもぎ取っていく。

「そ、それに、片足に、今腕も片方なくなりました！ これでは踏ん張りが利かなくて剣もまともに……」

だが、コテツは表情一つ、変えはしなかった。

「——十分だ」

同時に、機体が立ち上がる。

瞬間、その機体は空へと舞い上がった――。

「……今回は手加減しない。機体に合わせて能力を下げるくらいなら、思い切り機体を振り回してやればいいッ――」

「な、なんだアイツは――！ どっかおかしい――！」

盗賊の目に映るのは、手負いの獣だった。
四肢のうちの二つを切り落とされた、容易な獲物のはずだった。
だが、現実はどうだ。
あれは――、捕食者だ。

「当たらねえ！ 当たらねえ！！ 当たれえ！！」

手に持つ銃。攻勢魔術よりも威力は低いが、連射性に優れる。
だが、現実は一体どうしたと言うのか。
連射するだけ無駄ではないか。

「……無駄弾だな」

その紅の獣は、片足だけで立っている。
巨大な剣を、片腕だけで支えている。
獣が、跳んだ。

そして、剣を大きく振り回す。
それだけで、当たらない。

振り子のように、独楽のように、大剣の動きに耐えるどころかあ
えて振り回されるように。

機体は移動を繰り返す。

細かく跳躍を刻み、遠心力に任せ弾を避け。
時に弾き。

そして、それは大きく天へと舞い上がる。

「チャンスだ！！」

仲間の誰かが言った。

空中では無防備、ここに至っては願ってもない。

「うおおおおおおおおおおおおお!!」

『撃て撃て撃て撃て!!』

『当たれ!! 当たれよ!!』

『さ、さすがにこれだけ撃てば……』

撃つ。撃つ。撃った。

手持ちの弾装を空にする勢いで撃った。

下に控えている機体との戦いを気にすることすらなかった。
ただ、ひしひしと感じるのだ。

——コイツは、ヤバイ。

本当に、現実はどうなっているのだ。

弾が、当たっていないではないか。

風切り音が耳朶を叩く。

まるで振り子。右へ、左へ、大剣を振り回しあの紅の機体は動く。
そして、盗賊は気が付いた。

(敵は……、今ッ)

風切る音は死神の足音。それとも、鎌を振る音か。

「俺の真上にいるッ——!!」

死神の声は、やけに冷たく響いた。

『——遅い』

12話 リバーサル（後書き）

遂に反撃開始です。

13話 紅色スカイダイブ

戦場は、唐突な攻守の変化に浮き足立っていた。

圧倒的機動を見せ付ける、赤い機体に、全員が異様なものを感じていた。

そして、その視線の只中で、コテツは機体を動かす。

「こ、こんな技術を隠し持っていたと言うのですかっ！ コテツ・モチツキ！」

「君以外にも言ったのだが、この動かし方は褒められたものではない」

山の下へと向けて、シュティールフランメが駆ける。

片足だけで、跳ねるように。

「半ば、今回の戦闘で壊すつもりで動いていると言って良い」

腕も足も一本しかないと言うのに、コテツの胸中にあるのは、生半ではない全能感。

コテツが今、この機体の主導権を握っている。機体の限界を見て動かすのではない。コテツの限界に、機体を合わせている。

だから、飛び交う弾丸の渦中でも、負ける気はしない。

「別に訓練も手を抜いている訳ではない。機体に負担を掛けないもつとも効率的な操縦を模索している」

今まで、訓練で本気を出さなかった理由は、そこだ。

今の操縦法の肝は、コテツが機体に合わせないことにある。

機体に振り回されるのではなく、機体を振り回す。そうすることで、戦力は強引に底上げされる。

だが、それには問題点も一つある。部品の損耗が著しく激しいのだ。

今とて、繊細な操作によって完璧な角度で行われるはずの強引な着地が、操縦系統の悪さにより大雑把な判定で行われることとなり、衝撃が損耗に繋がっている。

無論、十全なメンテナンスを受ければまったく問題ないのだが、常に万全であるとは限らないのが戦場。

「だが。今この時においては数分持てば問題ない！」

大剣を振るう。

弾丸を弾き、そして、勢いのままに機体は大剣を追うかのように飛び上がる。

更に大剣を振るう。遠心力で勢いを横に殺して着地。そしてまた跳ぶ。

『止める！！』

「止まらん！！」

眼前に現れた敵が、両断される。

シュティールフランメはそのまま前へとすり抜けた。

更に二体前に出て、銃撃を行う。

コテツは、フットペダルを大きく踏み込む。

機体が、再び空へと舞い上がる。

それは、大剣を下に、滑空するようにしつつ銃弾を弾いた。

そして。

コテツは、前方の空を睨み付けた。

宙に浮かぶのは、白と黒の機体。ディステルガイスト。

コテツは、相棒に向かって叫ぶ。

「あざみつ、来い！」

『はい！！』

シュテイルフランメは――、ここまでいい。

背後からの弾丸を、振り向きもせず逆手で後ろに回した大剣で受け止める。

右へ、左へと細かくステップを踏みながら前へ。
そして。

背後から今一度迫る大口径の狙撃の弾丸。

「行くぞ、クラリツサ。舌を噛むなよ……！？」

「え？」

背後に斜めに突き刺す大剣。

シュテイルフランメはその大剣に足を掛ける。

弾丸は――。

その大剣に直撃した。

『ご主人様！！』

「おおッ」

大剣の反動も受けて、機体が、空へと舞い上がる。

背後から、いくつもの弾丸が迫る。

避けるための、防ぐための大剣はない。

しかし、否、だからこそ機体はまっすぐに昇っていく。

空に浮かぶモノクロの機体へ。

この世界で、相棒となったディステルガイストの元へ。

「ディステルガイストッ！」

「はい！！」

ディステルガイストとシュティールフランメの影が重なる。

同時に、コテツはコクピットハッチを開いた。

自ら目視する視界の向こうには、既にコクピットハッチを開けたディステルガイストがいる。

「おおおおおおおッ！！」

——跳躍。

「きゃあああああああああ！！」

抱え上げたクラリツサの悲鳴と共に、コテツはコクピットから跳んだ。

一瞬にして風の抵抗を受ける体。

眼下には、緑の景色。

そして——、目前には相棒のコクピットが見えた。

「おかえりなさい、ご主人様！」

「ああ」

そこには、あざみが待っていた。

着地、成功。

コテツは、すぐさまシートに座る。

ディステルガイストのコクピットは複座であるため、ある程度広

い。

クラリッサは右後方へ。

「……救出完了」

操縦桿を握り、コテツは眼下を見つめる。

下では、シャルロツテが敵と戦闘を繰り広げている。

クラリッサが無事に救出されたため、積極的に踏み込んでいた。

コテツも、援護せねばなるまい。

「では行くか——!!」

——やきもきしていた。

今、隣にいる男に、クラリッサはずっと、そんな気持ちを抱いていたのだ。

ソムニウムのSH乗りなら誰でも憧れるエトランジェ。

呼び出されたのは、死んだような目の男だった。

しかして、その男、SH乗りの憧れは。
大勢の期待と羨望を胸にやってきた彼は――、
弱かった。

だが、そんなことは構わないのだ。最初は誰だって弱い。クラリッサだってそうだった。

問題なのは、強くなろうとしなかったこと。
まるで何もかも諦めたようなその目。

クラリッサは、嫌な目だと思った。

どこか、クラリッサを見上げる者達の視線に似ている気がした。
同期は、異例の若さで副団長にまで出世したクラリッサを羨ましが
る。

『羨ましい』『才能がある奴はいいな』『天才は素晴らしい、と』

(違う、私は努力してきた……)

同期の言葉が嫌いだった。

クラリッサは、努力しているつもりだった。真面目に訓練し、時には半日以上SHに乗り続けたこともあった。

強くなりたくて、ずっと訓練を続けた。

だから、クラリッサはそういう目が嫌いだった。

上を見上げるくせに、そこへ向かおうともしない目。

ただ、彼らはそれでも構わないのだ。その目を向けられるほうは厄介だが、向ける側としてはまったく問題ない。回りも何も言わないだろう

しかし、コテツはどうだろうか。わかりきっている。コテツは誰かに見られ続ける。

そして評価を下される。『今回のエトランジェは役立たずだ』と。ただ、実際にそうなくてもコテツは動じなかった。上も見ず、下も見ず、ただ前を見ていた。

だが、思う。愉快な訳がない。その状況が好きなわけがない。

だから、やきもきした。苛々したのだ。

深く考えていたわけではない。悪役になろうだとか思っていたわけでもない。

ただ、クラリッサにとっても、エトランジェは憧れだったのだ。だから、弱い上に上を見ようとしないうコテツを、どうにか動かしてやりたいと思ったのだ。

この、独活の太木を。
だが。

今、この時を見てみればどうだ。

(こんな、生き生きとして……)

まさに、状況は圧倒的。

クラリッサを気遣ってか、機体の動きは酷く緩慢だ。
なのに、当たらない。ふらり、ふらりと弾丸を避ける。
まるで、幽霊のように。

幽鬼のように。

『ひっ……、』

「手遅れだ」

そして、ふらりと接近し、するりと斬る。

『うわああああ!!』

それだけで、周囲に敵影はいなくなった。
今、今斬ったのが最後から二番目。

そこで、コテツは山の上へと呼びかけた。

「さて、残りは狙撃手、お前だけだが、どうする?」

そして、一步、前に出る。

次の瞬間、ディステルガイストが首を逸らし、そこを弾丸が駆け抜けていく。

「……面白い」

機体が、走り出す。

右へ、左へ、避けるたびに弾丸が駆け抜ける。

（相手も……、上手いですね……！）

当たれば、できるだけダメージが大きくなるように相手は撃ってきている。

対するコテツは。

（楽しそう……）

いつもと同じ仏頂面が、どこか楽しそうだった。

そして、そんな時、声が響いてくる。

相手の、狙撃主の声だ。

『あー、くそ、アンタ上手いな』

『お互い様だ』

『ひよいひよい避けてくるような奴に、言われたかあ、ないね』

軽そうな、男の声だった。まるで、苦笑しているかのような。

二人とも、妙技を披露したままだというのに、妙に軽い。

そして、走る足が唐突に速度を落とす。

「さて、着くぞ」

冷たく響いた声に、やっぱり返ってきたのは軽薄な声だった。

『知ってる』

瞬間、緑の機体が山の木々の中から身を現した。

緑のシートがはらりと落ちたところを見るに、シートを被ってうつ伏せに隠れていたのだ。

そして、起きるなり、緑の機体は逆手に持ったナイフをディスプレイガイストへと振るう。

『行くぜっ、こっちも負けられねーんでね!』

「あざみ、あの機体は一体なんだかわかるか」

「私にもわかりません。ただ、どうも接近戦用カスタマイズを受けた機体のようです。気をつけて」

「わかった」

会話をしながらコテツが刀でナイフを弾くと、すぐに相手は拳を戻して今一度刃を放つ。

また受ける。

放つ、受ける。

高速の連打と、防御が始まった。

「やるな」

『どーも。アンタ、名前は?』

「名乗らなければ駄目か?」

『どういつこったよ』

「名乗るとか、騎士のそういう感覚には馴染めん」

『同感。だけど、アンタの名前は知りたい』

「コテツ・モチヅキ。これでいいか？」
『わかった。覚えておく』

そこでやっと、ナイフの連打が止んだ……、と、思ったら次は蹴りだ。

コテツは横から顔面付近へ迫る足を、腕を立てて受け止める。

「……そちらは名乗らないのか」

『問われて名乗るもおこがましいが……、アルベール・ドニ。機体はシャルフ・スマラクト。しがない盗賊だ』

その隙に、コテツは左手の刀を振り下ろす。
即座に、アルベールは機体を後ろに引かせた。

「良い腕だ。騎士になろうとは？」

『憧れたこともあったがね。俺にや馴染めねえや。魔術も使えねえしな』

「それで、山賊に？」

振られる刃を、アルベールはダッキングを用いてかわす。

『そんなわけないだろ。俺とて元冒険者だぜ？』

「なら何故？」

今度はアルベールがナイフを振るい、コテツは二歩下がって間合いの外に出る。

『昔、仲間と一緒にとある依頼を受けてな。ボコボコにのされて打ち捨てられたのさ。そのまま死ぬはずだったが、救助を受けて俺はこうして生きてる……、つつっわけだっ』

更に踏み込み。逆手持ちから順手に変わり、鋭い突き。身を半身にして回避。

「その救助者が山賊だったのか」

『いや？ 俺を助けたのは、何の変哲もない村の奴らだった。村のガキが俺を見つけて、だ。その時俺達は冒険者をやめて、その村で生きることを決めた』

「ふむ」

『問題は、その後その村が焼けたことさ。唐突に盗賊がやってきて、村はどうしようもなくなった、村民は困るよな。隣村に助けを求めてみたが、結局受け入れの余裕はない。そうなりや、生き残りは後は野となれ山となれ、だ』

ナイフを刀で受け止めつつ、コテツは呟いた。

「ただの村民が山賊に、か」

『俺たち救われた冒険者が盗賊をどうにか追い返したのが生き残りの多さにつながったが、その生き残りの多さが受け入れられないという結果に繋がった訳だ。残念だ』

クラリツサとしては、聞いてて耳が痛い問題だ。

盗賊の退治も、その後の被害の責任も、国の管轄内である。

誰が怠慢だったのか。地方領主かもしれないし、クラリツサだったのかもしれないし、もっと別の誰かかもしれない。

顔をしかめてみるが、状況はどうあっても変わらない。ただ、クラリツサは黙って苦虫を噛み締めたような顔をする。

「なるほど、大体わかった」

『幸いだったのは、俺たち救助された冒険者がいた事だろ。皆SH

持ちだ。だから山賊やつてられる』

（なるほど、それでこんな数を揃えて策を用いるのですね……！）

と、そこでクラリッサはやっと納得した。

やけにSHが多いことと、盗賊や山賊にしては高度な戦術を用いることに。

大半が元冒険者で構成されているなら、こういった戦術を取ることもあり得る。

『あー、くそ……、上手いなアンタ。だが、俺も負けらんねえ。行くぜ……！』

振るわれる拳。煌く刃。

「甘いつ」

打ち返す刀。

ナイフと刀は、刀が、勝った。

刀が相手のナイフを捉え、弾く。

ナイフが手を離れ、後方へと飛んでいった。

（やった……！）

クラリッサがそう思ったのも束の間。

「罨か……！！」

ナイフを弾いたと言ったのに、拳はそのまま迫ってきているではないか！

『キマった!!』

拳は刀の刃を捉えた。

(弾かれる! そしたら、体勢が崩れて無防備に——)

そんな中、クラリツサはコテツが操縦桿を握る手を緩めたのが、見えた。

弾き飛ばされる刀。

だが、ディステルガイストはそのまま拳を振るうことに成功していた。

『んなっ!』

相手が、前のめりになりながら、避ける。
そして、二機は、大きく距離を取った。

『……やるねえ。楽しいよ、アンタ』
「気が合うな——」

13話 紅色スカイダイブ（後書き）

敵らしい敵がやっと出てきました。

次回、戦闘決着です。

しかし、今回は戦闘パートが長すぎた気がしますね。もっとテンポよく行きたいです。反省点が増えました。

14話 Let's Rock!!

緑の機体が、拳を構えている。

コテツは、この世界に来て今までになく、愉快的気分だった。

「あざみ。出力を七十%落とせ」

「ええ!？」

唐突な言葉に、あざみは驚いていたる。当然、クラリッサもだ。だが、コテツだけが笑っていた。

「すまんが、俺の我俣だ」

普段からは考えられないほど獰猛に、だ。

「全力でやりたい」

そして、驚いていたあざみだが、コテツが言うと、唐突に彼女は笑い始めた。

「ふ、ふふふ、ふふ、そうですか。ああ、ふふ、はい。私のパートナーは我俣ですね。ですが。私のパートナーとしては素敵な我俣です」

『出力低下』

機械音声が響き、出力が落ちたことを確認する。

後はクラリッサだ。自称相棒はともかく、彼女はコテツの我俣に付き合わせることはない。

そう思ってコテツは口を開く。

「クラリッサ、君はシャルロッテに回収してもらえるか？ 些か危険だ」

対するクラリッサは、首を横に振った。

「ここまで来たら、最後まで付き合います。コテツ・モチヅキ。今更降りるなんていわせませんが。騙していた分、存分に見せなさい」
「騙したつもりはないが」
「わかつているわ。だから、それで手打ちにしてあげるって言ってるんです。負けたら承知しません」

ならば、異存はない。

そして。

（負ける気もない……！）

コテツは、腕を振って出力の状況を確認。そして、左右に構えた腕を、体の前に。

『おいおい、出力を低下だの聞こえてきたんだが、舐めてんのかい？』

「気に食わないなら、上げないと手に負えないくらいやればいい」
『違う』

睨み合う二機。

「ふふ……、そしたら、今回はデッドラインは無粋ですかね……」
「なにをする気だ？」

妖しく笑ってあざみは言った。

「私の得意分野は光ですからね。こういうことも可能なんですよ?」

瞬間、前に出したディステルガイストの腕、そのすぐ前に光が灯る。

そして、光は文字を描き始め。

『行くぞっ!』

相手が拳を振り上げた瞬間、言葉になった。
描かれた文字は。

右腕に『——Let's』。

左腕に『Rock!』。

「Let's Rock!! 意識するなら……」ノリノリで行こうぜ』つてところですかねえ?」

「——中々粋な演出だ」

> i 3 2 3 5 3 — 3 1 2 5 <

『おおおおおおお!』

翠に煌く拳が迫る。

屈んで避ける、そこから足払い。

小さく跳んで避けられた。そこから、相手は空中で蹴りを放つ。

大きく仰け反り、回避、そのまま蹴り上げ。

だが身を捻ってかわされる。

コテツは着地時に蹴り上げた足を地に付け軸足に、回し蹴り。腕で受け止められる。

『甘え！！』

胴に拳が迫る。

「……甘いつ」

コテツは迫る腕を掴むと同時に、受け止められていた足に更に力を入れ、投げる。

『おわつとと、地面はどこだ？』

「下だ」

『そりゃそつだ』

自ら敢えて飛ばされることで、横に一回転しながらも、アルベールは着地。

そして、屈んだ姿勢からの鋭い蹴り。

まるで力ポエラのようなようだ。どんな瞬間でも威力の乗った蹴りを放ってくる。

だが、コテツの顔に焦りはない。

「鋭い。だが、それだけだ」

身を逸らして、避ける。

『手厳しいねえ。そいやつと！』

アルベールは更に、蹴りだした足を地面について、低く深い踏み込み。

掌底。

その掌に向かって、コテツは拳を突き出した。

拳が、掌を弾く。

シャルフ・スマラクトが半歩引いた。

——双方、至近距離。

『オオオオオオオオオオオオオオオオッ！！』

緑の拳が煌いた。

瞬間、拳と拳が打ち合い、離れる。

「まだだっ！」

『お互い様だッ！』

今一度、もう一方の拳が重なり、離れる。

『更に！』

「見えてる！」

拳がかち合う。そして離れる。

『ま、だ、まあ、だああ！！』

「……！！」

殴る、離れる。

殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る！

拳で拳を打ち落としあい、打ち落とされた拳をまた放つ。

壮絶な打ち合い。

神がかったラッシュ。

『おおおおおおおおああああッ!!』

それは最後に――。

――緑の拳が抜けた。

『俺は！ 恩を、返すッ!!』

迫り来る拳。

このまま行けば、機体の頭部に直撃する。

果たしてどれほどのダメージがあるかは分からないが、相手の渾身の拳だろう。無傷とは行くまい。

（羨ましいことだ）

そんな中、全てがゆっくりに見える世界で、コテツはふと、考えた。

（……俺には生きる理由もない）

死にたくは無い、とは思うが生きる理由は今だ見つかっていない。

『その死にたくない』だって、大した考えがあるわけではない。

ただ、自殺したいとは思わないだけだ。

つまり情性だ。情性で生きている。

生きる理由など、どこにも存在しないのだ。

（だが……!）

しかし、ふと、コテツは思い浮かべる。
背後にいる、己を主と言った相棒。
応援すると言ってくれた従者。
不器用に、湯を入れ続けた、少女。
そう――。

(……死ぬ理由も見つからないッ!!)

アルベール・ドニ。

金の長髪に、碧い瞳。軽薄そうな顔。着古した、迷彩服。

それでも、昔は真面目に騎士を目指していた男だ。

それが無理だと悟ってからには冒険者に転向。そして、山賊と言う
数奇な運命をたどった。

そして、騎士を断念せざるを得なかったアルベールだが、しかし、
魔術は使えないがその分別の分野を限界まで鍛え上げ、練り上げた。
自分でも、一角のものだと自認している。

対する相手は、どこがおかしかった。

(ありえねー、ありえねーってこりゃ)

何故なら、最初のナイフを敢えて弾き飛ばされての一撃。

アレは必殺のはずだったのだ。あえて抵抗無くナイフを弾き飛ばされて、そのまま刀に拳を入れる。

そして、体勢が崩れたら追撃だ。後は反撃の隙も与えない。

（だが、アイツはそれを回避した……！）

彼もまた、意趣返しのようにあえて自分から刀を手放した。結果、無様に体勢を崩されるどころか反撃を放ってきた。

そして、このラッシュ。

相手の技量は凄まじかった。

（すげえよ、そりゃ。拳での接近戦仕様じゃねえーんだろ？ なのに、拳闘仕様のシャルフ・スマラクトに付いて来る……）

わざわざ、拳で拳を打ち落としてくる。

（ああ、すげえ。そう、十分アンタは頑張ったともさ。だがね、機体の仕様はガチだよ。出力を下げてなけりゃ、これで俺に負けることもなかったかもしれんけど）

あくまで正々堂々とやってきた相手に敬意を払い、アルベールは拳を振るう。

そして。

（ありえねー……、ありえねーよなあ、こりゃあよっ）

勝った、と思ったのだ。勝利を確信していたのだ。

渾身の拳は突き抜けたはずなのだ。

ラッシュに競り勝ち、その拳は相手に直撃するはずだったのだ。確かに、最大の拳がヒットしたと、思ったのだ。

『——お……、お、おおおおおおおッ！——』

だというのに。

（何で俺が殴られてるんだっ——！）

避けられた。

土壇場で、首を逸らされた。

一寸も無い距離で。

（ありえねえ！ あの戦いの中で避ける余裕なんてどこにあった！
！ どうやったらアレを避けられる！？ まるで、まるで分かって
たみてえに——！）

そして、もぐりこむような拳が、顔面に直撃した。
大きく、後ろに飛ばされる。

「ぐおおおおおおッ！」

必死でアルベールは機体を操作した。
倒れたら終わる。
そこで終わる。

「転ぶなよおおおおッ！？」

果たして、祈りは届いた。
大きく背後に滑りながら、シャルフ・スマラクトは立っている。

確かに、大地に足をつけていた。
だが。

だがしかし、自嘲気味に、アルベールは笑う。

「あーくそ。乱暴なノックだなあ……。死神さんはよ」

既に、眼前にそれはいたのだ。

煌々と赤く目を輝かせる、モノクローム。

眼前に立つ、死神。

「イカしてる……。いや。——最高にイカしてるぜ、アンタ」

まるで、鎌の刃でも首に当てられたかのように。

ひやりとした声が、耳に届く。

『——終わりだ』

瞬間。

アルベールの体を衝撃が貫いた——。

（これで、良かったんっ、かねえ……。？ どうせこんなこと、続け
てられるわけもねーしさ……）

緑の機体が、立ち上がることは無かった。

14話 Let's Rock!! (後書き)

えー……、デイステルガイストの外見がちまちま変わってる件に関してですが、デイステルガイストはある程度の自己修復機能を持っていて、戦闘毎に得た経験の元、装甲の形を最適化している……、見たいな感じで納得してください……、すみません、画力の無さです。ごめんなさい。

ちなみに、腕の字は書き換えたわけではなく、あざみが光魔術で腕の前に字を描いた形となります。終わった後は、粒子撒いて消えました。

ということで、戦闘終了。次はエピローグ。

15話 剣戟長閑

「……よくやったわ、コテツ」
「ああ」

王女の執務室。

今日も王都は長閑である。

「山賊の捕縛、お疲れ様。何か欲しいものはあるかしら？」
「報酬なら既に貰ったが」

貰ったのはそれなりの額。相手が相手だけに、そこそこの金額はもらえた。

だが、アマルベルガは首を横に振る。

「良かったのは、騎士団副団長の態度を変えたことだわ」

つまり、クラリツサが態度を変えた、と言うことだ。

それがどうしたのか、と首を傾げるコテツに、アマルベルガは説明する。

「渋々ながら、彼女が貴方を認めざるを得ない、というニュアンスの言葉を謁見の間で言ったおかげで、予想以上の効果が出たの。こ

れで、貴方への誹謗中傷も多少は落ち着くわ」
「そうか」

盗賊の討伐が終わって以来、別に態度が変わることも無かったが、それでもコテツの一端は認めてくれたということか。

「それで、成果に見合った褒美をあげると言ってるの」

言われて、コテツは思案するように顎に手を当てた。

「なるほど……」

「何か無いのかしら？」

問われ、コテツは少しの思考の後、答える。

「そうだな——」

去っていくコテツの背を見送って、ふとアマルベルガは呟いた。

「行つたわね」

「……お呼びですか？」

それと同時に、入れ替わるようにシャルロッテが室内へと入ってくる。

それを見届け、まるで溜息でも吐くように、アマルベルガは言った。

「欲がないのも、困り者だわ」

「コテツ、ですか」

「ねえ、シャルロッテ。召喚当初、一番最初に私は彼になんて聞いたと思う？」

シャルロッテが首をかしげ、アマルベルガは続ける。

「富と権力と名誉。それに女でもいい。貴方はなにがいい？ そう聞いたのよ」

「答えは？」

「……どうでもいい、よ」

「……コテツの言いそうなことです」

同時に、アマルベルガは溜息を吐いた。

「先代ほどお人好しでもなければ、先々代ほど女好きでもなく」

「強欲でもなければ名誉も欲しがらないですか？」

「そういうの、扱い難いわ」

そう言って、もう一度溜息を吐く。

「悪人でないだけ、マシでしょう」

「悪人の方が扱いやすいこともあるわ」

悪人なら、金で釣る、物で釣るなどの対策もあるのだから。
しかし。

考え出して、頭が痛いアマルベルグは思考を止めた。

そこに、シャルロットから声が掛かる。

「ところで、コテツは一体なにを望んだのですか？ 今回の件は」

問われ、アマルベルグはつい先ほどの会話を思い出した。

「彼が望んだのは――」

「よお、アンタがコテツ・モチヅキだった？」

「ああ。話は聞いているか？」

コテツの部屋。そこには、コテツと客が一人。

長い金の髪に、軽薄そうな顔。

アルベール・ド二は、敵意を向けるでもなく、コテツの前に立っていた。

「聞いている」

「そうか」

コテツがそういうと、極めて軽薄そうに。
アルベールは極めて重要な言葉を口にした。

「——国の犬になれってんだろ？」

「ああ」

——そう。今回の件でコテツが要求したのは、アルベールだった。
エトランジェは、権力や階級から乖離したところに存在する。究
極な所、極限に一人。

（面倒ごとを押し付けたいだけ……、とも言うが）

だから、仲間が欲しい。

コテツは、最前線で動き回ることによって成果を上げるタイプだ。それ
をするため、戦場でフリーになるために、後方を任せる仲間が必要
だ、と今回の件でも再確認することとなった。

何もかも、一人では不自由がすぎるのだ。

無論、問題が無いわけではない。エトランジェは権力、階級から
乖離している存在であるため、人数が増えると、まったく新しい勢
力となってしまう。

そうすると、国内の勢力に危険視されかねない。

それ故に、勢力と見られない程度の人数に仲間はとどめておかな
ければいけない。

となれば、優先されるのは質。そして、コテツは騎士と今一つ合わない。

そう考えるとアルベールだけが、完全に条件を満たしていた。故の勧誘。それに対し、アルベールは軽薄なままだった。

「それで、返事は」

問いに、にへらとアルベールは笑う。

「いいよ。やってやるよ」

「そうか」

「なんせ……、村の皆が人質だからな」
「そうだ」

アルベールを仲間にする交換条件。

それは、山賊団の仲間の命を保障することだ。後は、少しの金。それだけだ。

だが、十分のようだった。

アルベールから大した不満もあがりはしない。だがしかし。

しかし一つだけ。その軽薄さを潜めて、彼は問うた。

「一つ、聞かせてくれ」

じつと、アルベールはコテツの目を見ている。

コテツも、彼を見返した。

「なあ……。俺を倒したのは国の犬、だったのか？」

国に対し、アルベール、いや山賊団全てが複雑な感情を抱いていることは、人の機微に疎いコテツでも想像できた。

適切な援助をしてくれなかった国、そしてその国に仇なした自分たち。複雑だろう。

だから、国の犬に従うのは、抵抗があるのかもしれない。

「そうかもしれん」

だが、否定する要素はなかった。

今のコテツは、王女の言うままに動くだけだ。

「アンタにや、生きる理由も、やりたいこともねーのかい」
「ない」

あれば、今頃ここにはいるまい。

コテツは言い切った。

そうして、返ってきたのは、

「ああそーかい。俺は、王女の犬の犬、か」

失望したような、そんな声。

それを聞いて、コテツは椅子から立ち上がった。

話が纏まったことを報告しておかなければなるまい。

だが、ただ一つ、部屋を出る前に、コテツは一つだけ呟いた。

「ない、が。——今はそれを探している」

そして、彼は歩き出す。

「この国の行く末も、現状も知ったことではないが、……今の所の

宿を壊されるのは困る」

果たして呟いた言葉は、アルベールに届いたのかどうか。
ただ、別の言葉が返ってくるだけ。

「この話は、王女がやれって言ったのか？」

コテツは、否定の言葉を返す。

「いや、俺の要求だ」

「……アンタが？」

少しの間が空いて、問い返された。

コテツは、簡潔に返す。

「ああ」

そして、最後に。

もう一つ、彼は問うた。

「なあ、俺の仲間の命は、保障されんのかい？」

「こちらのミスでお前の仲間が死んだなら。俺が王女を握り潰す」
「……つく」

返事はない。

だが、数歩歩いた所で、ばん、と。

コテツは唐突に背中を叩かれた。

怪訝そうに振り向くと、そこにはアルベールが笑っている。
にっこりと、人好きのする笑みで。

「は、っはははっ……。王城で王女を握り潰す、だって？ 最高にイカレた答えだ。やっぱ気に入ったよ、アンタ」
「そうか」

「手伝うよ、アンタのその探し物」

馴れ馴れしく、アルベールはコテツと肩を組んだ。
コテツは、表情一つ変えずに返す。

「助かる」

「ところで、俺の仲間は……」

「誰も殺してはいない。少なくとも構成員三十七人は全て捕縛された。あまりに潔く聞き分けがよいものだから連れて帰るのに苦労したぞ」

「おお、サンキユ。さすがダンナだぜ」

「……なんだそのダンナという呼称は」

「雇い主だろ？ だからダンナ」

「……そうか」

「俺のことは、相棒って呼んでくれてもいいんだぜー？」

「押しかけ相棒は間に合っている。アルベール」

「アルって呼んでくれ、長いだろ？」

「そうだな」

「ダンナ」

「なんだ」

「——サンキュ」

「……なんのことだ」

「俺たちの、命の恩人だろ」

「顎でこき使いたいだけだ」

「へいへーい、了解ですよっとダンナ」

二人の男が、廊下を仲良さげに、歩いていく。

そう、今日も王都は長閑であり。

そして、今日も荒野には剣戟が響いている。

『遅いですよ！ コテツ・モチヅキ！』

「……いつも通りだ」

『本気を出しなさい！！』

「本気を出さずに勝つための訓練だろう。これは」

赤の機体と青の機体が交わり、そして離れる。

『う、うるさいですね！ 黙りなさい！！』
「……………」

『何とか言ったらどうですか！』

「どっちなんだ」

『好きになさい！！』

「そうか。ではそう言えばなんだが……………」

『……………なんですか』

細かく後ろへと跳んで距離を稼ぎながら、コテツは呟く。

「俺を擁護する発言をしてくれたらしいな」

すると、コクピットの向こうから、やけにわかりやすい動揺が返ってきた。

『だ、誰から聞きましたかそれを！』

「王女から」

『……………な、なんですか。なんなのよ……………、笑いに来たんですか……………？』

「……………いや、ありがとう」

『……………えっと。は、反応に困ることを言わないでくれますか！』

「……………了解」

『ば、馬鹿にして！！』

「していない」

『してます！！！！』

「していない」

呟きつつ、迫る大剣をコテツは受け流す。

『さあ！ 馬鹿なことを言っていないで訓練を続けます！！ あなた

は、この私がどこに出しても恥ずかしくないように鍛えてあげますから！ コテツー！』

ひたすらにクラリッサが攻め、コテツが受け流し続け。

「——了解」

それはまるで、今の会話の縮図のようだった。
だが、どこか楽しげに——。

今日も王都は長閑である。

15話 剣戟長閑（後書き）

やっと二章終わりました。

そして、二章の間になんとかユニークPV総計が二万越えしたり、千人を超える方にお気に入り登録していただきまして、身が引き締まる思いです。

さて、アルベールが加入です。ロボット物には必須といえる主人公の相棒的ポジションに納まりそんな感じです。

とりあえず、仲間も増え、安定期に入ったので次章はゆるく短めの奴で行きたいと思います。

15・5話 剥れパートナー（前書き）

八割方設定書きです。本編的には無駄な設定も多いです。
必要な部分は本編でも再度書きますし、必ずしも見る必要はありません。

最初と最後だけ見るのもあります。

15・5話 剥れパートナー

ある日の昼。

コテツは、部屋でひたすら黙って本を読んでいた。
今日の訓練は休みである。そうすると、当然一日暇が出来上がる。
しかしながら、この世界について無知であるコテツは、こういった暇に少しでも知識を溜め込まなければならぬ。
の、だが。

「ご主人様あああ！」

「……何の用だ」

背後から飛び掛るように、あざみが抱きついてくる。

コテツは、半眼で背後を見つめた。

あっけらかん、とあざみは言う。

「あ、いえ、別に用はありませんけど」

「……」

「ぐ、冷たい視線が痛いです……、いやでも私山賊の件で凄い地味地味だったような気がするんですよっ！　だ、大丈夫ですよね？」

クラリツサさんなんだかんだ言いながらくつつくとかないですよ
ね？　ね？」

「なにを言ってるんだ君は……」

「とにかく、そういうことです。私は細やかなところで好感度を稼ぐんです」

「とりあえず、言っている意味がわからないが。一応の所、問題ないと返しておこう」

「はい。ところで、なに呼んでるんですか？」

唐突に、あざみはコテツの肩から顔を出して、コテツの手の中の本を覗き込んだ。

コテツは事実だけを簡潔に伝える。

「辞典だ」

「……辞典？」

首を傾げるあざみ。

確かに、辞典は普段の読み物としては違和感があるだろう。

コテツは、その辞典に目を落としながら、答えた。

「魔術とやらで、話せる読める書けると来たが、意味の分からない単語もある」

すると、ぼんとあざみは手を叩く。

「あ、なるほど。確かにそうですね。ご主人様は今世間知らずですから」

「ギャップが今後悪影響を齎すかもしれん」

「先の件のように、ですか？」

「ああ。俺の軍の常識と、騎士の常識が食い違っていた結果だろう」

「そうですか……、はい、勤勉なのはいいことだと思いますよ。あ、そうだ、でしたらお話ししましょうか？」

「なにをだ？」

「色々です。これでも私、長生きですから。博識なつもりですよ、多少は」

「なるほど——」

あざみは、コテツの背後から抱きついたまま、耳元で囁き始める。

S
H

「S H。シユタールヘルツォーク、ですね」

「この世界で作られた、魔術と科学をあわせた人型機動兵器、という所までは分かる」

「まあ、現在の一般的な認識だと思いますよ」

「……そういえば、君はそのプロトタイプだったか」

「はい、だからそこそこ詳しいつもりですよ。もともとS Hはこの世界の魔術で研究されていた魔導人形、所謂ゴーレムですね。それを初代エトランジェが科学を取り入れて製造したのが、アルトです」

「そして、それを解析して作り出したのが――」

「そう、ノイと呼ばれる機体群です。ただし、初代エトランジェの技術を解析しきるコトはできず、アルトとノイの間には性能差が横たわっています。まあ、腕のいい魔術師が造れば匹敵する可能性もあるのですが」

「そんなものか」

「ええ。足りない科学は魔術でカバーです。まあ、全体的に未熟な科学を魔術で補う空気はありますね。アルトは、科学を魔術で補助。

しかし、後年の物に至るにつれ、魔術と科学の融和を目指したものが目立ちます」

「初代には、アルトの技術を伝えるつもりは無かったのか？」

コテツが問うと、あざみは困ったように頬を掻いた。

「本当はですね。初代は、こうして民間にまで普及して、一般的に戦闘を行うなんて考えてなかったのですよ」

「ふむ？」

「本当は、龍を殺すための、S H、なのです」

聞きなれない単語に、コテツは首を傾げることとなる。

「龍？」

「ご主人様の居た世界と違って、ここには魔術がありますから。特殊な生物は多岐に渡ります。そして、その中でも人にとって危険なもの。その際たる例が龍なんです。今となってはほとんど数はいませんが、大きくて、簡単に大魔術をぶっ放しますから。そんな龍が、運悪く街や村の上を通ることがあるのです」

「つまり、災害に近い、と」

「そう。初代の時は、王都にそれが迫っていたそうです」

「それに対抗するための、アルトか」

「はい、つまりそういうことです」

「私のコトですね。アルトは高性能な分、内部処理や制御が肝心なのですが、ハードはともかくソフトは門外漢だった初代だけではどうも対応し切れませんで。魔術師の協力を得て先天的に決まった機体と接続できるヒトのようなものを造りだしたわけです」

「見た目上は、人にしか見えないが」

「頑丈、老いない。あと、ついでにシリーズによっては違つかもしれませんが、高めの身体能力と、十二分な魔力容量を備えています」
「他はなにか？」

「そうですね、女性型しかいないことですかね」

「君しか知らないから分からないが、そうなのか？」

「なんでかは私も良く知らないです。製作者が男嫌いだったとか、女性の方が細やかな気配りができるだとか、いろいろ諸説ありますけど、詳しいことは……」

「まあ、別に問題にはならないだろう」

「そうですね、後の役目は、悪用を防ぐ、でしょうかねえ。正式に操縦士になってしまえばある程度の権限で無理できますけど」

「そうでなければ、エーポスのほうが立場は上、か」

初代エトランジェ

「んー、これは私も詳しく過去を聞きだしたりとかしたわけじゃありませんからねえ。大したことは言えませんけど」

「とりあえず、聞かせてもらいたいのは、彼がどうしてここに来て、そしてどうなったのか、だが」

「来たのは、事故だそうですね。ご主人様と同じ、時空間圧縮系の爆発でも受けたんじゃないですかね。そして、残念ですけど彼がどうなったのかは、誰も知りません。一機の機体と共に、ふらりとどこかへ消えてしまいました」

「……そうか、謎が多いな。代々続くエトランジェのことも、分かっていたようだしな」

「そうなんですか？」

「君の機体の腕の文字や、エトランジェと言う名称。彼はドイツ人らしいが、所々にわざわざ英語を使っている。これは後続のエトランジェへのメッセージのようなものだろう。後続までがドイツ人は限らないからな」

「うーん……、不思議な人でしたけどねえ。ユーモアのある、ヒゲの生えたナイスミドルですよ。気になりますか？」

「興味はあるな。調べてみたい所だ」

エトランジェ

「説明されてると思いますけど、ソムニウム王国で召喚される異世界人のことです。主に、SHに何らかの形で関われる人間が召喚されるとされています」

「何らかの形で、とはパイロットであるとは限らないのか？」

「はい。腕のいい操縦士ではなく、操縦士の素質があるもの、つまり先代みたいな例もありますし、もしくはノイに画期的な改造案を

生み出した人物もいます」

「技術者もありうる、か」

「はい」

「ところで、初代が来たのは偶然、だそうだが、その後何故、このシステムに繋がったんだ？」

「実は、初代が行方不明になった後ですけど、初代が召喚された地点は空間が不安定なことになっていることがわかったんです。それを調査した結果、そこに巨大な魔力をぶつけると、まあ、途中に複雑な術式が入りますが、異世界人を召喚できることがわかったのです。そして、初代のような利用価値の高い人間が他世界にいるとなれば、答えはひとつでしょう。ちなみに、一応初代に似た波長の人間を探すことでSHに関わる人間を探してるみたいです」

「反対は無かったのか？」

「これがですね、最初は非人道的と言っていた方もいたのですが、どうやらこちら側から開けるのは片側の門だけらしく、来るのは、向こう側でも門を開けた人間だけだったのです」

「つまり、死に掛けた人間、か？」

「はい。もしくはご主人様のような空間が不安定な状況だった、みたいなの。ともかく、こちらと、他世界の両方で門を開けて初めて世界が接続されます。すると、健全な人間は召喚されないとはいいますから。その上、世界を渡ったときに何かがあるのか、怪我まで治りますから、逆に人命救助、という大義名分までできちゃったんです」

「そして、死んだと思ったら生きてた、だから大した不満も出てこないか」

「あっさり国の重鎮に納まれますしね」

「ちなみに、怪我が治る理由は確定してませんが、世界を渡る途中の空間で、多量の魔力素を浴びるために体が修復される、と推測されています」

ソムニウム王国

「この大陸の端っこの国です。王都の背後は海ですね」

「どんなものだ？」

「番付的には中間ですかねえ。昔はそこそこ強かったんですけど。先々代が国を傾けまして」

「先代は？」

「名君ですよ。傾いた国を一人で立て直しました。その無理が祟って早死にしたといつてもいいんですけど」

「そして、今、か」

「何とか立て直した国を王女がどうにか保ってる状態です。実は、戴冠式もまだなんですけどね。だからって他に任せてはまた傾きますから、一人で踏ん張ってます」

「他に王族はいなかったのか？」

「先代の王が無茶すぎて子を残す暇もなかったんですよ」

「だから一人だけ、か」

「そういうことです」

生物について

「そう言えば、先ほど話に上がったが、危険な生物は多いのか？」

「そうですね。ご主人様のいた世界と比べれば、ずっと。この世界には魔術がありますから」

「先ほども聞いたが、何故魔術と生物が関係する？」

「たとえばですけど、ご主人様の世界では龍なんて空想でしたよね。じゃあ、何で空想なんでしょう」

「存在しないからだ」

「存在できないんですよ。そもそも。オーソドックスな龍といえば羽の生えたトカゲですかね。ただ、その羽で浮力が得られるわけがありません。だから龍は存在しえないんです。代わりに、存在できる形として、恐竜が存在します」

「魔術があるならば、飛べる、か」

「そういうことです。生き物はその環境に合わせて進化するものですから、当然のように魔術があるなら、そういう方向に進化するわけです」

「つまり、俺の常識を外れ、魔術をベースにした生き物が現れると見てもいいんだな？」

「はい。それらを総称して、魔物と呼んでいます。魔術に適応した動物ですから。もちろん、魔物になっていない、未適応の動物もいますよ？ まあ、とにかく、魔術ぶっ放す敵から、ありえないほどでかい敵もいますから、気をつけてくださいね」

「ふむ……、そういえば、盗賊を倒しに行ったときも見かけなかったが……」

「まあ、あの辺は整備されてますから、大きい獣はいませんし小さいのはわざわざSHに近寄りませんよ」

「それもそうか」

銃について

「ところで、今の所人間サイズの銃を見たことが無いのだが」

「あー、実はですね、S Hの銃の解析は済んだんですよ。構造もわかったんです」

「ふむ、なら何故？」

「ところが、小型化すると精度が酷くなって、まともに動かないんです。だから、今の主流は単発式のです。S Hみたいに連射できるならいいんですけど、単発だとも使いにくいですから。魔術のほうが便利です」

「なるほど」

「ああ、でも超凄腕の魔術師が部品製作すればいいのが作れるそうですよ。設計図引かないといけませんけど」

「どちらにせよ軍備には向かない」

「はい。一部の冒険者が懐にしのばせる位です」

「そうか」

「まあ、今日はこんな所にしましょうか。魔術とかについては、また後日」

「そうだな」

と、一旦話が止まった所で、今度はあざみが質問した。

「ところでなんですけど、先の件の……、アルベル、でしたっけ？ 彼を部下にしたって本当ですか？」

「アルか。ああ、そうだが」

「あ、そうですか……、って聞いてませんよ！ というか愛称呼びですか！ 私も呼んでください！」

「……君は愛称にするほど名前が長くないだろう」

「あざみんって呼んでください。ご主人様」

「断る」

「えー……、じゃあ、とりあえず詳しく説明してください」

「わかった」

頷くと、コテツは辞典を閉じ、口を開いた。

「アルは、先の件の褒美として、王女に身柄を要求した」

「えっと、私に不満とか、ありますか？ なんか機体が鈍いとか」

「そういうのじゃない。俺は前線で一人戦いたい。が、こうして他と組まされることを考えると……」

「後方のお守りというか、部隊との間に摩擦が起きないようなクッションが欲しい、と？」

「理解が早くて助かる。他にも多少思うことはあるが。留守の間を任せたい、とかな」

「ははあ、自由に動きたいからおいておくってことですか？」

「だいたいそんなところだ」

「はい、大体わかりました」

アルベール・ドニ

「今は俺の部下ということになっている。最初は騎士を目指していたそうだが、魔術が使えない、考え方が合わない、と冒険者に転向。その後、依頼を失敗し、近くの村民に救助され、その村の村民となるが、村が焼けて山賊に、と言ったところか」

「数奇な運命ですねえ」

「乗機はシャルフ・スマラクト。接近戦から狙撃までこなす万能なパイロットだ」

「確かにそこそこでしたかね。器用貧乏かもしれませんけど。ああ、でもどちらかと言えば格闘戦のほうが得意そうですかね。ナイフを使えば軍格闘臭いですけど、徒手になったら力ボエラみたいになりましたし」

「近づかれる前に倒すのが一番だ、とは言っていたがな。ちなみに年齢は二十八、だそうだ」

「年下ですね、そうは見えませんが」

「背も高いしな」

「ご主人様も低くは無いはずですが、相手は外人顔ですもんねえ」

「…」

「……」

「あ、もしかして若く見えるの気にしてるんですか？」

「気にしていない」

「即答ですか」

「……気にしていない」

「なんか可愛いですね」

シャルフ・スマラクト

「アルの乗機だな。濃緑色の機体で、機体自体は近接カスタマイズを受けているらしい」

「確かに、マニピュレーターの強度は驚きの領域でしたね」

「後は運動性と出力を重視したようだ」

「結構なハイスペックに纏まってますよねー。腕のいい魔術師でもいたんでしょうか」

「基本的には狙撃銃とナイフがメイン武装。後は魔術具を少々と言っていたが……、魔術具とはなんだ？」

「ああ、魔術の籠った道具のコトですよ。メインじゃないってことは多分、使い捨てですね。イメージは手榴弾でよろしいかと」

「なるほど。適正が無くても使える、ということか」

「高いのを切り札として持つてる人も結構いますね」

「と、まあ、こんな所か、話すべきは。今の所は、だが」

そう言つて、コテツは言葉を切つた。

しばらく、無言が続く。

そして、不意にあざみは呟いた。

「……私が、ご主人様の相棒ですからね」

「どういうことだ」

「ご主人様の相棒は、私ですから」

と、そこで思い当たるのはアルベールのことだ。

「……君とアルでは相棒の意味合いが違うと思うが」

「……ご主人様の相棒は、私なんです」

今度は、拗ねたような声。

コテツが、なんとなく振り向くと、頬を膨らませて、あざみはそこに居た。

「あー……、嫉妬、してるのか？」

「違います、これは決定事項なんです。ご主人様の相棒は私、嫁は私、私のお婿さんはあなた。あーゆーおーけい？」

言われて、内心コテツは困り顔。

「嫌だったら、操縦下手になってください」

「それはできない相談だな」

「なら、決定事項です」

そう言つて、再びあざみは頬を膨らませた。

視線を前へと戻したコテツは、やはり内心困っていた。文字通り死ぬほど戦に明け暮れていた彼にはこういった距離の関係は馴染みが無い。

元の世界において、コテツは周囲から一歩引かれる存在だった。

エースとはそういうものだったからだ。

よつて、エースや英雄と扱われた彼だが、他人からのアプローチは遠巻きなものだった。同じエースから追いかけられたこともあるが、彼女は常軌を逸していたため、コテツ内のカウントには入っていない。

後は、ガチホモ集団と名高い部隊に配属され、渋みがかつた男たちに迫られただけだ。その件に関しては思い出したくない記憶の一つとして、心に刻まれている。

つまり、仕事以外での深い付き合いに碌なものがなかったのだ。

（参るな……。反応に困る）

無表情のまま微動だにしないコテツ。

（何か、すべきか）

コテツは、逡巡に逡巡を重ね、行動を考える。
そして結局。

「ふえ？」

あざみの頭を、コテツは撫でる。
そして、驚いた顔のあざみに向かって、ただ一言。

「……頼りにしている」

「……あ、はいっ」

あざみは、目を瞑って、コテツの手を受け入れた。
振り向くと、さつきとは一変、あざみが目を瞑って、ニコニコと笑っている。

「ねえ、ご主人様、中庭行っ一緒にお昼寝しましょうよ」

「いきなり、なんだ」

「いいでしょう？ ね」

「何故」

「大切なパートナーですから、大事にしてください」

「しれっと自分で言うのか、君は」

「えー、じゃあ今度一緒に出かけましょうよ。街とか、案内しますよ？」

「ふむ、それは頼みたい」

「じゃあ、決まりですね。絶対ですよ」

「ああ。覚えておこう」

コテツは苦笑しながら溜息を吐き、長閑な時間は流れていく。

15・5話 剥れパートナー（後書き）

これですつきり、02終了です。

次回は手ぬるく短く、そこそこに、日常に近めの部分を掘り下げたいと思います。

あと、魔物とか、ギルドがどうか、出てないファンタジー要素もとりあえず、構成を練る必要もあるので、更新まで少し空くかも知れません。一週間前後かと。
できるだけ早くどうにかするので、しばしお待ちを。

そう言えば、なんだか週間ランキングで八位に食い込んだり、最近ビビりまくりです。こりゃ、もっと頑張らないといけませんね。

16話 夢現

どこか、意識はぼんやりとしている。

「あざみ」

名前を呼ばれた。あざみは、ぼんやりとした頭で考える。
この声は誰だ、そうだ、聞き覚えがある。これは、姉の声。

「なんででしょう?」

あざみは名前を呼ばれて、まるで、決められていたかのように口が動いた。

ここはどこか。夜の城のテラスだ。
そしてこの会話。記憶にある。
ならば、これは、夢だ。

「まだ、主は見つかっていないのね?」

果たしていつだったか、そこまでは覚えていないが、確かに記憶にある。

確か、自分はこう返したはずだ。

「『別に要りませんよ、マスターなんて』」

すると、透き通った薄紫の髪が綺麗な姉は、困ったような顔をし

て、こう言った。

「悪くないものよ……。いいえ、とても素敵なことだわ、主がいるって」

「わかりませんね。お姉さまの言葉でも、どうも実感できません。マスターなんて居ても自由が制限されるだけじゃありませんか」

そういうと、姉は困ったように笑う。

（今なら、わかりますよ、お姉さま）

エーポスは、貴重な存在。言わばアルトそのものだ。そして、アルトは他の機体とは一線を画す。

軍事的に大きな意義をもたらす存在でもある。

と、なれば、生活はまるでお姫様扱いだ。さすがに王女に狼藉を働けば牢屋に入れられることになるうが、王女に頭を下げずとも、何も言われず、傍若無人な振る舞いをしても許される。

見た目どおりの小娘ではなく、長い時を生きた彼女らは、王であっても無視できない。

無論、姉妹たちの中に進んで狼藉するような者も居ないが、それだけの立場がある。

（本来の全力を出し切るといふ、あるべき姿に戻る喜び、対等に接してくれること、戦闘になれば、それ以上に使ってくれること）

だが、エーポスはアルトを動かすために存在しているのだ。

今だからこそわかる。エーポスは、主と共にあることこそがもっとも自然な姿だと。

故に、あざみは喜びを感じていられる。

「貴方にも、いつか見つかるわ。パートナーが」

「いりませんよ、そんなの」

「見つければわかるわ。私も、今はすごく楽しいから——」

姉は笑った。果たして、何故笑っているのか、あざみにはわからなかった。

姉のパートナーは六十年もすれば死んでしまうことだろう。なのに、笑っている。

（私も……、見つめましたよ、お姉さま。今が、すごく楽しいです）

だが、今ならば姉の気持ちができる。コテツという主に出会えたのは、この生の中で最高の出来事だ。

隔絶した操縦士としての能力と、不器用な人となり。それでも、不器用なりにあざみと上手く付き合っているという姿勢が、嬉しい。

この世では、そう。たった一人、その操縦士だけが、エーポスと対等でいられるのだ。

「見つけたら、離さないでね？」

その時のあざみは仏頂面をしていたが、今は内心で微笑んだ。

（はい、もちろんです——）

そうして、ふっと、目が覚めた。

「……ん」

朝日が眩しい、目覚め。

城の一室で、あざみは目が覚めた。

ここは、あざみに与えられた部屋だ。コテツと同じ部屋に寝泊りしようと思ったのだが、それは当の主丁にお断りされたので、仕方がない。

ぼうつとした頭のまま、どうにか身を起こすと、あざみは眠い目を擦る。

「夢、見てた気が……」

呟きながらも、あざみはベッドから降りた。所詮、夢は夢、忘れて当然のことだ。

何故か胸が温かいのは気になったが。

しかし、とにもかくにもだからといってどうということも無い、あざみはクローゼットから服を取り出した。

それらをベッドに乗せて、あざみはまずはパジャマのボタンを外す。

するり、と服が体を離れ、それもベッドに置かれる。ズボンのほうも同じように、だ。

そして、屈みこむようにして下着を脱いだ所で、あざみは姿見のほうを見た。

「特に、異常無し、ですね。健康的です」

そこには、健康的な肢体が映っているだけだ。妙な腫れや痣も無ければ、変に青くも無い。

「性的魅力は、そこそこだと思っんですけど……」

あるべき膨らみはちゃんとある。

どちらかと言えば肉付きのいい大人の女性というより、スレンダーな年頃の少女の風体だが。

「ご主人様の好みはどっちなんでしょう」

これで、守備範囲は十二歳以下の少女だ、といわれた暁には手に負えない、と思いつつもあざみはブラウスに短いスカートと、いつもの格好へと着替えた。

そして、定期的に使用人が変えに来る桶に溜まった水を使って、歯を磨き、顔を洗う。

使っている歯ブラシと歯磨き粉は、工学以外にはあまり頓着しなかった初代エトランジェがせめてこれだけはと定着させたものだ。他にも、エトランジェが定着させたものは、いくつかある。

「さて、身だしなみも大丈夫ですね」

今一度鏡を見て、胸元のリボンの位置を整え、にっこりとあざみは笑った。

（ああ、でも少し位お化粧をした方がいいでしょうか。けど、ご主人様そういうの好きじゃなさそうに見えますし）

化粧の香りに顔をしかめそうなタイプだ、とあざみは思考し、頭を振った。

（あーもう、男の人のことなんて気にしたことも無かったからわかりませんっ……！！）

考えを振り払うように、あざみは動き出す。

まずは部屋の外へ、そして当然のようにコテツの部屋へと向かう。コテツの部屋とあざみの部屋はそう、遠くない、というよりは近くにあざみが引越した。

私情半分だが、エーポスとその主はできるだけ傍にいたべきだという意見は、誰が聞いてももつともなものである。

（ともかく、ご主人様を起こしにいきましょう。こういうことは、日常から、ですよ）

うきうきとした気分で、コテツの部屋の前に立ち、そして、ノックもせずに扉を開けた。

いつもの部屋、無表情で仏頂面で、私生活でこれといって特筆すべきことも無い主の、何の変哲も無い部屋だった。

「ご主人様ーっ、朝ですよー！」

だが。

その部屋からは返事が返って来るところか――。

「……あれ？」

誰もいない。

きよろきよろと辺りを見回す。いない。

ベッドの布団をめくる、いない。

ベッドの上に寝転がってみる、いない。

枕に顔をうずめ、まだ残るぬくもりを堪能してみる、いない。

「――いません」

主のベッドの中、仰向けに布団の端を両手で握り、まるでまさに寝ようとしているような体制で、あざみは呟いた。

ぬくもりが残っているということは、布団を出てさほど時間が経っていないということだ。

不可解である。この時間、コテツは起きてはいても外には出ないし、今日は訓練が早いという話も聞いていない。だが、いない。

「別に隠れてるとかないですよね、ご主人様ー？」

その不可解さを解するために、あざみは不本意ながら立ち上がった。

徐に部屋を出て、廊下を歩き始める。

歩きながら、あざみは首をかしげた。

(……うーん、どこいったんでしょう、あの人。あー、でも気が向いたからってふらつといなくならないとも限らない気がしますし……、っと、危ない、通り過ぎる所でした)

そうして、思考に沈んでいると、思わず目的地を通り過ぎる所であつた。

すぐさまブレーキをかけて、あざみは右手に見える扉の前に立つ。そして、次を開いたのは。

「……あざみ？ 一体何かしら」
「ご主人様がないんですけどっ！」

王女の執務室の扉である。

ドアを乱雑に開けるなり、あざみは言った。
対するアマルベルガは、ペンを持った体勢のまま、半眼であざみを見つめている。

そして、数秒の時間を置いて、やっと謎の衝撃から立ち直ったアマルベルガは口を開いた。

「……コテツなら、ギルドへ登録に行ったわ。軍人なら、当然ですよっ？」

呆れたような声に、あざみは驚愕のあまり表情を凍らせる。
たとえ突如眼前に大規模魔術が出現しても、こうはならない。

「え？ ちょ、ちょ、ちょ、すつつぶ。待ってください」
「何かしら？」

「行った？ ご主人様が？ 外に？ つまり、もう城にいない？」
「そうよ」

「き、聞いてませんよ！ そんなの！！」

ばん、と机を叩くが、王女は涼しい顔。

「言っていないんでしょうね。コテツがわざわざ一緒に来いなんて言うと思う？」

「ないですね」

「……そこ、即答するのね」

「ないです」

「まあ、とにかくそういうこと。リーゼロッテを付けておいたから、心配はないわ」

そして、王女の言葉の中でリーゼロッテ、と聞き、思わずあざみは耳を振るわせた。

それは安心できる要素ではない。

「え、いや、大有りですよそれ」

「なにかしら」

「ありますって！ あの巨乳怖いです！ 女狐です！ ご主人様の貞操のため私追いかけますから、後よろしくお願いします！」

こうしてはいられない、と脱兎の如く走り出そうとするあざみだったが、アマルベルガに止められる。

「貴方はディステルガイスト使用の手続きがあるでしょう？」

そう、そうなのだ。

実は今日のあざみの予定は、書類を書いては提出することだ。ディステルガイストを自由に使えるようにするには、それなりの手順が必要なのだ。

思わず、あざみは足を止めた。

「ぐ、ぐぐ」

そして、そんなあざみの弱みに付け込むように、アマルベルガは言う。

「自分の乗機が使えるかどうかの作業をほっぽり出すパートナーを見たらコテツは……、まあ、何も言わないんでしょうけど、内心役

に立たないクス女だと思うに違いないわ」
「ぐぐぐぐぐぐ……」

今にも走らんとしていた足は地面に縫い付けられたようでもあった。

葛藤するあざみ。
そして。

「……ご主人様、あざみは職務を全うしますっ……!!」

悲壮感たっぷり、彼女は言ったのだった。

16話 夢現（後書き）

想定外に筆が進んだので、フライングで一話更新。
今から書き溜め作業に入ります。

まあ、今回のコンセプトは『緩め』なので、もしかしたら書き溜め
無しで更新するかもしれません。

17話 チェインハンド

「あれ？ ダンナ、その可愛い子誰？ ダンナの嫁？」
「滅多なことを言うな、アル。彼女の沽券に関わるだろう」

コテツは、城門の前でアルベールと出会う。
アルベールが興味を示したのは、コテツの隣を歩くリーゼロッテだった。

「え、えと。嫁、ですか……？」

リーゼロッテが、赤くなって戸惑う。
そんな彼女を見て、アルベールはにやにやと笑っていた。

「可愛いねエ。ダンナ、嫁のために生きるってのも、上等なんじゃない？」

「相手がいないが」

「あ、俺に背中から撃たれてえの？ ダンナ」
「何をいきなり」

理不尽だ、とばかりにコテツはアルベールを見つめた。
だがしかし、ひょいとアルベールはその視線を受け流す。

「まーいや。で、ダンナ、これからデートかい？」
「いや、今から冒険者の組合……、ギルドと言ったか。その本部に行く所だ」
「本部？」

聞き返してくるアルベールだったが、すぐに納得したのか、コテツの返事を待つ前に再び口を開いた。

「あー、なるほど。城の兵士は皆カード持ちだっけか」

「そういうことらしいな」

そう、コテツが外に出ようとしているのは、ギルドに正式に登録に行くためだ。

無論、コテツは冒険者ではないし、城の兵士も違う、だが、皆ギルドに登録したという証明のカードを持っているのだ。

理由は、幾らかある。

ギルド自体、国がスポンサーとなり、多大な出資をしている。そのため、国の兵士の手が足りないときは、ギルドから傭兵をかき集めることもある。

その際に、情報の共有を行うなら、ギルドで一括して行う方が手間が少ないのだ。

そしてもう一つ。兵士にもしも遠方への任務があった場合、現地で国から何らかの援助が出る場合がある。補給物資、もしくは追加の軍資金など。

その際の受け取りに、各地のギルド支部を使うのだ。任地で何かあった場合も、腕の立つ冒険者が集まりやすいギルドは都合がいい。それ故に王国軍の兵士は全て、冒険者ではないが、ギルドの身分証明を持っている。

そして、ご多聞に漏れず、コテツもまたその身分証明を受け取ることになったのだ。

「手続きは済んでいるらしいから、証明を受け取るだけだが」

そうして、アルベールは納得したらしい。

一度頷いて、彼は帰す。

「なるほどね。あー、でも俺もその内更新にいかねえとなあ。と、まあいいや、ダンナはデート楽しんできてよ」

そう言って、アルベールはひらひらと手を振った。

デートだのと、釈然としないが、どうすることも無くコテツは歩き出す。

そして、隣を歩いていたリーゼロッテへと視線を向ける。

「さて、リーゼロッテ」

唐突に呼ばれて、驚いたようにリーゼロッテは肩を震わせた。

アルベールとの会話が長かったらしく、気を抜いていたようだ。

呼ばれてすぐさま、気を引き締めようとばかりに、文字通り肩肘を張る。

「は、はいっ！　なんででしょう？」

「そのギルド本部とやらはどこだ？」

「あ、えっと、こっちですっ」

コテツの問いに対し、張り切ったようにリーゼロッテが歩き出した。

少し早めのペースで、尻尾を揺らしながら歩く。コテツも、それに続いた。

しかし、果たして何歩歩いた辺りだろうか。

コテツの目の前で、彼女の体が傾いだのだ。

「きゃんっ！」

可愛らしい悲鳴が響き、躓いたのだ、と理解したコテツはすぐさまその腕を捕まえた。

斜めに揺らいだ彼女を、引き寄せる様にコテツは腕の中に抱きとめる。

「大丈夫か」

抱きとめられた彼女は、別に怪我もなく、上手く助かったのだが、コテツが思うよりも数段彼女は動揺していた。

「あ、と、えあ、は、はいっ！ 問題ありません」

機体に乗ってない時はまるで変温動物と揶揄される鈍さのコテツであるが、この動揺具合はさすがに不自然だと悟ることができた。そして、彼はその不自然さに対し、口を開く。

「どうかしたのか？」

すると、言い難そうにしながらも、結局リーゼロッテは答えてくれた。

「その、優しくされるのって、珍しくて、ですね……、あの。私が転んだら唾を吐きかけるくらいで丁度いいと思います」

「……無理だ」

一体どれほど冷たく当たられたんだ、とコテツは思わず半眼になる。

「君は俺に鬼畜になれと」

言いながら、コテツは内心溜息を吐いた。

この世界に着てからそこその月日がたったが、未だにコテツには慣れないものがある。

その一つが、亜人差別だ。

多数が少数を駆逐するのは、世の常であれども、目下動く死体のようなものであるコテツとしては、精力的に動くものの全てが眩しい。常に人を見上げているコテツにとって、見下すのは馴染みがないものだ。

（むしろ、俺より彼女の方が、よほど人間的にできている）

と、思いながら、ふと気が付く。

アルベールとの会話だ。彼は差別を行っていただろうか。

「アルには差別の意図が見受けられなかったが、どういうことだ？」

差別を受ける――、野蛮な獣の混ぜ物として扱われ、常に見下される亜人のはずだが、アルベールにはそのような空気は見受けられない、どこるか褒めるような言葉すら口にしていた。

果たして、アルベールが特殊なのか、それともまた別に理由があるのか。

結果は、

「あ、冒険者の方は亜人を差別しない人が多い、らしいです。実力主義のところらしいですから」

と、言うことらしい。

確かに冒険者としては、単純に身体能力が高いという点が重要になってくるのだろう。

更に鼻が利くとか耳がいいとかがあれば完璧だ。

（むしろ、亜人を重用しないからこそアルトを運用できないのではないか……？）

あざみを満足させられる操縦技術など、世界を回ってもそう見当たらないだろうが、乗っても大丈夫、という点ならば亜人の方が数が多いのではなからうか、とコテツは考える。

そしてそれと同時に、もう一つの考えも浮かんだ。

（いや、逆にそれを恐れているのか……）

アルトを動かすには、常軌を逸した操縦技術が必要である、とはいえ、体に掛かる負担に耐えられる、というまず第一段階でのハードルが低いのだ。

むしろ人がやるより、望みは高い。

が、それをやると、人と亜人の関係が反転しかねないだろう。なんせ、アルトは強い。己の乗機だからこそわかる。亜人にその気があるかないかは関係なく、人はそれを恐れ、虐げ続けるというわけだ。

「まあ、俺には関係の無いことか。案内を続けてくれ」

考えを振り払い呟いて、コテツはリーゼロッテを見た。

「あ、はい」

再び歩き出す二人。

そして、すぐに城下町がコテツの視界へと飛び込んで来た。思わず、声を漏らす。

「こうして街に出たのは、初めてだな」

「そうなんですか？」

「城の外に出たのは訓練と山賊討伐の時だけだ。自ら外を見て回る余裕は無かったからな」

そう言つて、コテツは街並みを見つめた。

訓練の際も、山賊の件の時も裏道を通つたため、こうしてまじまじと見つめるのは初だ。

見た目上はまさに中世ヨーロッパ。レンガ造りの街並みが、コテツには新鮮に映る。

「活気があるな」

眼下は、とても賑やかだ。休みだからだろうか。

言つと、リーゼロッテは嬉しげに微笑んだ。

「はい。では、はぐれないように手でも繋ぎましょうか？」

そんな、楽しげなリーゼロッテに対し、コテツには断る理由もなかった。

「ああ」

頷いて、手を伸ばす。

すると、ぴくり、とリーゼロッテの耳と尻尾が反応した。恥ずかしがるように、赤くなり、彼女は耳を垂らす。

「え、あの。えと、冗談……、だったん、ですけど、その」

「む、そうなのか？」

「その……、コテツさんは冗談だと思わなかったんですか？」

「素人だからな。何があるか分からん。経験者に口出しをすべきではない、と思っただが……」

「えっと、じゃあ……、その」

おずおずと、リーゼロッテが手を差し出した。

本当に、手を繋ごう、と彼女は言っている。それくらいは、コテツにもわかった。

「ああ」

コテツが、その小さく柔らかな手を握る。そうして、隣り合って二人は歩いた。

「君と手をつないだのは、二回目だな」

「え？ あ、もしかして、隣国との――」

「ああ、そうだ」

隣国がステルス戦艦で襲撃を掛けたとき、コテツの手を引いたのは、他でもない、彼女だ。

どこことなく、感慨深い気分、コテツは浸る。

「手を引く君が、予想を超えて力強かったのが、印象に残っている」

何でもないことのようにコテツは言うが、女性に言っべき台詞ではない。

途端に、リーゼロッテは顔を赤くした。

「それは、私が亜人だからでして……」

「こうしてみると、小さな手だ。あの時の、力強さとは、似ても似つかん」

不思議そうに、コテツは己の手の繋がった先を見る。
そして、不思議そうに手を見るコテツに対し、リーゼロッテは微笑んだ。

「コテツさんの手は、大きくて優しい手ですよ」

コテツは、反応に窮した。こういったときの反応はどうすべきか、考える。

だが、窮している間に、リーゼロッテは話を続ける。

「私、男の人と手を繋いだのって、初めてです」

「俺じゃあ、役者が違うか？」

自分にはこういったものは似合わなさ過ぎる、と言った言葉に返ってきたのは、まるで叱るような声だった。

まるで、出来の悪い兄を、しっかり者の妹が叱るような、そんな空気。

「ダメですよ。コテツさん。卑屈なのは美德じゃないです」

果たして、客観的に見て自分はどうかのか。

コテツは考える。

（主観的に見れば、機動兵器に乗る以外に能も価値もない男だ）

客観的な答えなど、永遠に返っては来ない。

結局、わからないからコテツは曖昧な答えで返した。

「善処しよう」

そうして、二人は目的地へと辿り着く。
ギルド本部。

冒険者の総本山、と言ってもいいだろう。

17話 チェインハンド（後書き）

さすが休日、筆が進みます。

次回辺り、ギルド行きます。お約束です。
やっと異世界テンプレらしくなってきました。

18話 スターティングクエスト

冒険者組合。

通称ギルド。

「実態は、職業斡旋所と言ったところでしょうか。土木工事から皿洗いまで、仕事を回してくれます」

「ふむ」

「あとは、個人同士で依頼を受けるときに、申請すれば間に立ってトラブルが起こらないようにしたりしてくれます」

「無駄なトラブルを避けたければ、それが賢明か」

ギルドは、国営機関にかなり近い所のようなのだ。直接経営しているわけではないようだ。

冒険者が集まって作ったというよりは、冒険者が余りに野放図に動き回ると困るからトラブルを減らすために作られたような空気がある。

「しかし、まるで免許だな」

そう呟いて、コテツは手の中のカードを見た。

登録は、すぐさま終わった。というよりは、既に手続きが済んでいたもので、王女からの紹介状を見せて本人確認をするだけで終わったのだ。

そうして渡されたのが、掌ほどの大きさのカードだった。

表面にはコテツの顔写真とデータ。裏面には幾何学模様が刻まれており、何らかのデータが入っていると見える。

それをまじまじと見つめるコテツに、リーゼロッテは人差し指を立て、口を開いた。

「ええと、SHのコクピットに入れておけば、スコアの記録もしてくれるそうですよ」

「便利だな」

「それに、SHなんかで中に映像を記録しておけば、討伐依頼の証明になるそうです」

「しかし、非常に便利だが、改竄や偽造される恐れはないのか？」

たとえば、討伐証明映像をコピーして、似たような依頼が来たときに見せるような真似をする輩が出てきそうなシステムである。が、そのような事柄には、当然対策もあるらしい。

「ああ、その辺りはコピー保護とか、プロテクトだとか、魔術保護とか積んであるらしくて、そもそも、解析できたら冒険者じゃなくて学者として一財産稼げますよ」

「ということはもしかすると、このカードやシステムは……」

「はい、歴代エトランジェ様の一人が、初代ギルドマスターでして、彼が創ったものです」

いやに近代的だと思ったら、そういうことらしい。

たしかに、コテツが探せば、そこかしこに、歴代の影が見える。

例えば、街灯。しかもガス灯ならまだしも、太陽電池式である。

そして、上水道はないが、現代に近い下水道は何故か普及しているのだ。これもまた、エトランジェの影響だろう。

街灯には防犯効果がある、とか、街の清潔さは疫病などの防止に繋がる、という建前もあるのだろうが、せめて最低限これだけは、という文化の違いに戸惑ったエトランジェの最低限の要求、というものも感じられた。

これも、その一つだろう。

「代々エトランジ様は色々な物を残していくんですよ。先代は、とらんくす、っていう、下着を開発したとか」

（何を作ってるんだ先代……）

「他にも公表されてませんが付け耳っていう物がありまして。先代は亜人との融和を唱えていた方ですから、きっとそういう主張のためのものだって言われています」

（それは思うに先代の趣味だ……）

「あとやきゅうけん、という遊びを……」

（本当に何をやっているんだ先代……！）

顔も知らぬ先代だが、思わず半眼になってしまう。

これ以上聞きたいような、聞きたくないような、だ。

これ以上は色々ダメだ。コテツは黙って考えを振り払う。

そして、極めて真面目な思考へ。

（しかし、冒険者が……、半ば傭兵みたいなものだな）

思いつつも、コテツは依頼の紙が所狭しと張られているボードを見た。

「どうかしました？」

付いてきて、同じくボードを眺めるリーゼロッテに、コテツはボードを見たまま答える。

「いや、物は試し、一つくらい依頼でも受けようかと思ってな。君は先に帰ってくれて構わないが、外に出るもので、一番危険度が低いものはわかるか？」

免許を取ってすぐにペーパードライバー、と言うのも寂しいものだ。

だから、外も見ておきたいし、一つ位依頼を受けてみようと考えた。

「私も付いていきますよ。私はコテツさんのメイドですから。んー、でも危険度が低いですか。条件つきで探すなら、受付で聞いたほうがいいかもですよ?」

「そうなのか?」

「依頼はボードに貼りきれないほどありますから。国が重要と判断したものがまず最初に貼られます」

「他は?」

「どうしても依頼を受けて欲しい時、緊急で何か欲しいものを取ってきて欲しい時なんかは、お金を払えば貼ってもらえるんですよ。皆まずはボードを見ますからね」

「なるほど。とすれば、難度の低い依頼はあまり貼ってない、か?」

頷きながら、コテツはボードの紙を一枚一枚眺めていく。

問題なく字が読めるのは、召喚魔術にそう言った知識の伝達が含まれているかららしい。

便利ではあるが、思う所もある。

（他の知識を伝えないのは常識や情報は移り変わっていくからか、それとも下手に情報を渡して賢くなれたくないのか……）

知識を与えずにおくということは、染まらないという反面、染めやすいということでもある。

（その時の国に都合のいいことだけ知識として教えていけば、半ば

洗脳されたような兵士が――、まあ今はそんなこともないようだが)

と、そこで、隣から声が掛かった。

「あ、これなんてどうでしょうか。ソルシエの実の採取だそうです。森は近いですし、出るのも狼くらいですから」

「ボードに張るような依頼なのか？ それは」

「多分、ソルシエの実は魔術師の方が使うものですから、実験かなにかで緊急で欲しいんだと思います」

「別に依頼の大きさと、ボードに貼るか否かは関係ない、か」

どうやら、大したことのない依頼でもボードに貼られることは少なくないようだ。問題なのは、本人がどれだけ依頼を受けて欲しいか、らしい。

まあ、ともあれ、リーゼロッテの指差したその依頼は、非常に丁度いい。

外、というものを見ておきたいのだ。生身で。ぶつつけ本番で常識の違いに戸惑うのはいけないとこの間悟ったばかりなのだ。

リーゼロッテの言う狼が、コテツの認識とずれている可能性だつてある。

「では、受けてくるとしよう。その紙を持っていけばいいのか？」

「はい。あとはカードを出してください」

コテツは、言われたとおり、カードと依頼書を受付に提出。どうやら、カードに受けた依頼と成否が記録されるらしい。

(あまり失敗を繰り返すとブラックリストに入れられそうだな……)

前金だけ受け取って逃げたりだとか、そう言った旨い話はないら

しい。

考えている間に、既に受付は終わったらしく、カードが返ってくる。

それを受け取り、リーゼロッテの元へコテツは歩き、そして外へ向かおうと思ったのだが。

「ん？ 見ない顔だな、新入りか？」

リーゼロッテの目前で、背後から声を掛けられる。

振り向くと、そこに居たのは、大男だ。

赤銅色の肌に、まるで筋肉の塊のような体躯。蓄えられた真っ赤な髭。頭は禿げ上がっている。

上半身は半ば裸といってもいいだろう。ベルトが巻かれ、背には槍のようなものが見える。

イメージは歴戦の猛者、そのものだ。

「おいおい、随分ひよろつちいなあ、てめえ。どこのお坊ちゃまかしらねえが、こんなんで大丈夫かよ？」

男は、コテツを見るなり、鼻で笑った。

コテツは、どうすることもなく、その視線を受け流す。

こういったことは、前の世界でもあった。

古参は新入りに対し、上下関係を分かせようとする。そういうものだ。

こういった、力こそ全てである場所では、尚更に。

（これは、お約束という奴か……）

新入りへの洗礼。昔は一度機動兵器に乗れば皆黙ったものだが。しかし、コテツは冒険者ではないから頻繁にこちらを出入りする

こともない。

無理に力を見せる必要もなければ、相手がどれほどの者かも分からない。

だから、一発や二発なら甘んじて受けよう、と。

思っただが。

「なんだあ？ 魔術師か、オイ。本当に大丈夫か？ 防具は持つてんのか？ 魔術師なら魔法薬はちゃんと買っとけよ？ 生命線だからな、ああ、俺魔術つかわねえから貰ったやつ分けてやる、それと」

雲行きが、怪しくなってきた。

「魔術師だからって剣がいらねエわけじゃねえんだぞ？ 近づかれたらどうすんだ、その亜人の嬢ちゃんが守ってくれるかもしんねえけどもよ、囲まれたら全方位守れるって訳じゃねえんだぞ？ あとアレだ、ハンカチは持ったか？ ちり紙は……、ってどうした？」

どうやら、敵意はないようである。

むしろ、無さ過ぎて、コテツが頭を抱えるほどに。

「すまない、君という人間が掴めない……」

「ああ、自己紹介がまだだったな。俺の名はヴォルト。姓は要らねえだろ？ 冒険者同士なんだしな」

いや、違うそうじゃない、という言葉をコテツは飲み込んだ。

コテツは悟る。この男はおせっかい焼きだ、と。ついでに話も通じない。

「コテツだ。そしてこちらが」

「リーゼロッテです」

どうやら、冒険者同士なら、わざわざ姓を口にしない流儀らしいので、コテツもそれに倣った。

つまり、わざわざ詮索したりしない、ということだろう。

そして名乗りを終え、

「フン、コテツにリーゼロッテ、か。どうしてこの道に入ったか知らねえが……」

と、ヴォルトが言いかけたその時。

また一人、人数が増えた。

「ボス、依頼取れましたぜ、ってボス、何やってるんすかい？」

「ん、いや、こいつらにこの世界の厳しさを教えてやろうと思っ
な」

（……荒くれの中にも優しい人間くらい居る、ということしか分
らなかったわけだが）

ボス、と呼ばれたヴォルトの背後にやってきたのは、細身の男だ
った。

別に然程そうでもないはずなのだが、筋骨隆々の大男であるヴォ
ルトと並ぶと、まるで貧相に見える。

そんな彼の特徴は、短い茶の髪と、外人らしい甘いマスク。腰に
は細身の剣があった。

「相変わらずっすね、ボス」

「おおよ」

ヴォルトが大仰に頷き、それを見届けたあとで、男はコテツを見
つめる。

見定めるような視線が、コテツを貫いた。

「つつても、こんなのに塩送つてもしょーがないでしょうが」

「なにを！？ ラッド、テメ冒険者である以上、一緒に仕事をする
こともあるだろうよ」

「そんな時に、信頼できる相手になってないと困る、でしょう？ ど
っちにせよ無駄でしょうが」

そう言つて、ラッドと呼ばれた男は、馬鹿にしたような目でコテ
ツを見た。

「ひょろいうえに、亜人の女を連れてくるお坊ちゃんだぜ。どう考
えたつて将来性ねえや」

「馬つ鹿やる！ この先どうなるかわかんねえだろうが！」

「そうやって追い抜かされたら、俺たちが損だよ、ボス」

「追い越されたら追い越しゃいい」

「だから脳筋つて呼ばれてるんすよ、ボスは。どうせこりやどこぞ
の貴族のお坊っちゃんでしょうよ。期待かけたつてむだでしょ」

「き、期待なんかしてねえし！ 坊主に世間の荒波つて奴を教えて
ただけだし！」

言い争いを続ける二人。

そんな中、コテツは一応当事者の一人のはずなのだが。

(……これでも三十過ぎなんだが)

割とどうでもいいことを考えていた。

そして、ここではうっとしていてもどうしようもないことに、気
づく。

だから、口を開いた。

「とりあえず、行くか、リーゼロッテ」

「えっと……、いいんですか？」

「……多分な」

そうして、コテツ達は音もなくそこを立ち去ったのだった。

「ところでリーゼロッテ」

「なんですか？」

「……俺はそんなに若く見えるか」

「……え？」

「いや、忘れてくれ、なんでもない」

晴れ渡る空。

茶の道と、緑の草が茂る街道は、やけに爽やかだった。

「コテツさん、本当にそれ一本で良かったんですか？」

リーゼロッテの問いは、コテツの腰元の一本の剣に向けられている。

「鎧を着て戦ったことはないからな」

腰元の剣。それは、出てくる前に武器屋で購入したものだった。おあつらえ向きに、アマルベルガが支度金を用意してくれていたので丁度良かったのだ。

確かに、軍人なら帯刀もするだろう。

「結局、想像通り銃はなかったが」

「銃はオーダーメイドの高級品ですから」

そう言つて、リーゼロッテは苦笑いする。

本当にコテツの欲しい武器があるとすれば、それは銃火器だ。わかつてはいても、欲しくなるものである。当然のように腰に銃があつた身としては。

しかし、この世界、生身の人間用の銃はまったく普及していない。SHの銃の構造は既に解明され、さまざまな銃が作られている。しかし、構造が理解できたからといって、単純に作れるようになるわけではない。

SHサイズなら、魔術師が魔術で部品を製作できるのだが、生身の大きさだと、部品の精度が著しく落ちる。

製鉄技術がまったく追いついていないのだ。それを魔術でどうにか補っている状態。

だがしかし、小さく細かなものは精度が悪く、強度にも問題が出る。

「さすがに単発では役に立たんしな……」

結果が、構造を単純にした単発銃と、極めて腕のいい魔術師によるオーダーメイドだ。

そうになると、もう冒険者がたまに単発式を懐に隠して奥の手にするくらいしか、使い道がない。

「まあ、おいおい考えるとしよう」

ない物は仕方がない。コテツは心中そう断じた。

故の腰の剣だ。果てしなく適当に選んだと言ってもいい。そもそも、アマルベルガの支度金も大した値ではなかった。

登録を終えればコテツは帰ってくると思っていたのだろうし、腰に剣が刺さってないのはしまらないからせめて何か差しときなさいというのが彼女の言葉だ。だから、腰に差して格好が付けば適当な剣でもいい、とアマルベルガは小額を渡したのだ。

確かに、カードの受け取りが終わればコテツはフリーだが、それでも街を見てくる程度で、依頼を受けているなどとは、夢にも思っていないだろう。

しかし、関係のないことだ、とコテツは、道の向こうを見た。しばらく向こうに、森が見える。あれが目的地。

「じゃあ、行きましょうか」

「ああ」

「そういえば私、男の人と二人でお出かけするのも、初めてです…」

「俺では……、いや、君の初めてになれて光栄だ、と言うべきなのか？」

「そ、それはダメだと思いますっ。あらぬ誤解を招くんじゃ……」

「む？　どんな誤解だ？」

「え、えと。それはですね、ええと」

困ったように、尻尾が右へ左へと泳ぐ。

そして最後に、リーゼロッテが両拳を胸元で握り前かがみになると同時に、尻尾はピーンと天を指した。

「と、とにかくダメですっ！」

こうして、まるでピクニックにでも行くかのような手軽さで、二人は冒険に出かけたのだった。

18話 スターティングクエスト（後書き）

やっと外に出ました。

ギルドで依頼、俄然異世界らしくなってきました。
ただ、説明が多くて困ります。

19話 平穏安穩安閑

日差し降り注ぐ街道。

「えいつ！」

コテツは、剣で襲ってきた狼を薙ぎながら、横で別の狼を蹴り上げるリーゼロッテを見ていた。

腹に痛撃を貰い、唾液を吐き散らして狼は飛んで行く。一見華奢に見える少女の蹴りによって、だ。

「……凄まじいな」

その様を見て呟いた言葉に、リーゼロッテは少し顔を赤くした。

「戦いは素人なんですけど……」

むしろ、身体能力だけで戦えるのだからこそ凄まじい。

「今回は群れから外れた二匹みたいです。右手の方向から、群れの匂いがします」

そして、鼻も利く。

（冒険者も下に置かないわけだ）

これらの能力は役に立つどころか、酷い扱いをすれば、依頼の現地で亜人に皆殺しにされる可能性すらあるだろう。

冒険者として対等であることは、非常に賢明な判断だ。

かく言うコテツも、それなりの戦闘力はある。SHの操縦がそつくりそのままパイロットの強さに繋がるわけではないが、エース機に乗って鍛えられた体と、常軌を逸した動体視力と反射神経、そして確かな勘は、狼と一対一はもちろん、囲まれたとしてもそう負けはしないだろう。

「では、かち合う前に急ぐべきだな」

「はい」

森は目の前でもある。そして、避けられる戦闘は、避けるべきでもある。

二人は群れから離れるように走り出した。
発見される前に、森に駆け込む。

「森の中は？」

「……、だいじょうぶです。群れは居ないと思います」

すんすんと臭いを嗅ぎ、耳をぴんと立て、リーゼロッテは言う。

森の中は、木漏れ日だけがそこを照らしており、日差しはとても柔らかい。

群れは居ない、とリーゼロッテは言うが、そこかしこに生物の気配を感じる。

先ほどの街道よりも多彩な種類の生き物が、居ると思われた。

「では進むか。目的の木を見つけたら頼む」
「はい」

この世界の生き物は、コテツの主観から言えば、全体的に強靱であるといえる。

さほど大きな差があるわけでもないが、しかしどこことなく、元の世界の生物に比べ、筋力や耐久力に差があるように思えた。

「ソルシエの実は、濃い紫色の実で、見れば分かります。抽出して加工すれば、豊富な魔力素が手に入るので魔法薬に利用される、だそうですけど、魔術師じゃないので詳しくは……」

「俺も魔術師ではないからな。よく分かんが」

そう口にする、コテツの少し前を歩いて先導していたリーゼロットが、コテツの方を見て首を傾げた。

「……？　　そういえばコテツさんは魔術適正は……」
「ない、だそうだ」

魔術適正とは、文字通り、如何程魔術に適応できるかを示す単語だ。

空気中の魔力素を自分の体に通し、指向性を与えることで魔術は完成するのだが、如何程の魔力素を自分の体に通せるかによって、発動できる魔術の威力は変わるのだ。

そして、コテツは魔術適正を召喚時に計ったのだが、適正はなし。外気から魔力素を取り込むことはできないと知れた。

それをどう思ったか、リーゼロットは申し訳なさそうに顔を伏せた。

「えと、ごめんなさい……」

「いや、いい。今までなかったものが突然あると言われても戸惑うだけだ」

「で、でも、内在魔力は測ってませんよね？」

「ああ」

内在魔力は、その人間の体内にある魔力素を指し、その魔力素で魔術を行使することもあるし、周囲の魔力素を吸収して魔術を放つ場合は、周囲の魔力素に己の魔力素を付加して指向性を与えることとなる。

内在魔力は測定が難しく、設備が特殊な場所にしかないため、コテツの測定は後回しとなったのだが。

とにかく、その内在魔力を以って、リーゼロッテはコテツを励ました。

「だったら、もしかしたら内在魔力は素晴らしいかもしれませんよ
っ」

「だいいいが」

コテツとしては、あってもなくてもどちらでもいい能力だ。今までなくても良かったのだから、無理して欲しいとまでは思わない。なので、魔術の話はそこで打ち切ることに。

「そう言えば君は、森の歩き方に随分慣れているようだが」

城暮らしとは思えない、とコテツは口にして、話題を変える。

リーゼロッテは、コテツを先導し、後ろを振り向いたまま返事を返した。

「コテツさんこそ、やけに慣れてますよ？」

「兵隊である以上は、密林で活動することもある」

宇宙に戦場が移る前は、地球の密林で戦ったこともある。そこで生身で機動兵器に立ち向かったこともだ。

その経験が、コテツの足を鈍らせないのだが、果たしてリーゼロツテはどうなのか。

「私の生まれは森ですから」

答えは簡潔だ。つまるところ、なんにせよ慣れである。

「そうなのか」

「はい。森の奥の小屋にお母さんと住んでました」

「それが、城に？」

「はい。お母さんが死んで、街に出てみたんですけど、まあ、色々ありました。そんな中、偶然王女様に会いました」

具体的なことは、ぼかされている。

話したくないのか、気を遣われたのか。

「そうか」

ただ、どちらにしてもそれを無視して踏み込んでいい道理はない。コテツは短く答え、対するリーゼロツテは、優しく笑った。

そして――、

「だから、私、森の中は得意なんですつ。なんせ、十年くらい森に――、きゃんっ！」

彼女は太い木の枝に顔をぶつけた。

後ろを見ながら歩いていたせいだろう。いくら亜人とは言え、前

方不注意は危険なようだ。

そして、そんなリーゼロッテは後ろに大きく仰け反って背後へとバランスを崩し、本日二度目のコテツの腕の中へと収まった。

今回は手を伸ばすまでもなく、自ら胸の中に納まる形となったので、コテツとしては楽だった。

「……大丈夫か？」

「えっと……、あはは、ごめんなさい。けど、別に私には――」

「優しくするな、か？　悪いが、体も口も、勝手に動く方だ」

リーゼロッテは、恥ずかしげに体を縮こまらせる。

「えっと、その……、恐縮です」

そして、体勢を立て直し、再び歩き出した。

「大丈夫か？」

その動きがなんとなくこちなくて、コテツは聞いてみた。
のだが。

「あ、はい、だいじょうぶです。問題なしです、はい……、きゃんっ！――」

今度は、木の根に足を取られ、また背後へと倒れてくる。やはり、どことなくこちなかったせいだろう

先ほどと違い、少し遠かったので、コテツは一步前に出た。
すると、先ほどと同じように、受け止めることができた。

「そそっかしいな、君は」

「う……、すみません。これでも城では敏腕で通ってるんですけど」
「別に構わないが」

「今日は、コテツさんに助けられてばかりですね」

苦笑気味に言うリーゼロッテに、コテツは真顔で返答を返す。

「俺でよければ、いくらでも」

リーゼロッテの体は、やけに軽かった。やはり動物的な部分が影響するの。

そんな華奢な体を支えるぐらいなら、いくらでもできる。

「そ、そうですか？ ……じゃあ、お願いしちゃってもいいですか？」

「ああ、任せておけ」

「ありがとうございます、コテツさん」

そう言って歩くリーゼロッテの表情は見えない。どうやら、枝が顔に当たらないように注意しているようである。

だが、その尻尾は、なんだか楽しげに揺れていた。

それからしばらく歩いて、唐突に、リーゼロッテは中空、いや、とある木を指差した。

「あ、ありましたよ。コテツさん、あれがソルシエの実です」
「あれが……」

言われたとおりの濃い紫の実だ。分かりやすい。

「十分な量なってますね。空気中の魔力素があれば年中実はつけるんですけど、この量はラッキーです」

その実は、一本の木に沢山なっているが、それは珍しいことのようにである。

だが、喜びこそすれ、別に残念がるような理由はない。

「高い所にあるの、取ってきますね」

木を見上げるコテツに言うなり、リーゼロッテは駆け上がるように軽快に、木を登った。

さすが、というべきか、手馴れた様子で実を取っている。

コテツは、上はリーゼロッテが担当してくれるようなので、下のほうに実った実を回収する事にした。

紫の実に近づいて、引く。

別にコテツの常識から外れて特別硬いわけでもなく、普通に採れた。

そして、依頼書に記載された必要量になるまで、それを繰り返す。

優しい木漏れ日の中、ただ、それ続けた。

「ふむ、下はこんなものか」

結構な量を回収して、採取籠に入れる。

そして、木の下へと戻り、コテツは上で作業しているリーゼロッテを見上げた。

彼女は、エプロンの裾を持って、即席の袋のようなものを作り、その上にソルシエの実を乗せている。

コテツは、そんな彼女に向かって言葉を投げかけた。

「そちらはどうだ？」

「もう大丈夫ですかね。余分だった量はギルドで引き取ってもらえますし……、ってコテツさんっ」

不意に、何かに気が付いたようにリーゼロッテはうろたえた。

なんだ、とコテツはリーゼロッテを注視するが、彼女はそれに合わせるかのように更に慌てる。

「う、うえ、見ないでくださいっ！」

そこで、コテツも気が付いた。

それと同時に風が吹いて、スカートの中、白いストッキングとガーターベルト。

そして、その健康的な両足の間にある白い布が目映ったその瞬間。

「きゃっ、きゃあああ！」

彼女は、落下した。

(……またか)

驚きと同時に呆れがやってきた。

そして、半ば諦め気味に、コテツはその体を受け止めたのだった。

「あ、あ、あ、ごめんなさい！ 怪我はありませんか！？」

後頭部を強かに打ちつけはしたが、それで怪我をするほどコテツはそそっかしくはない。

リーゼロッテの下敷きとなり、仰向けに空を見上げながら、ただコテツはどこか長閑なものを感じていた。

(……命がけ、というほどでもなく。長閑に森を歩き、実を採ってそれを一人ではなく、二人で)

心配そうにコテツを見つめるリーゼロッテが、何故か微笑ましい。

「コテツさん！？ ほ、本当に大丈夫ですか！？」

リーゼロッテが、体を揺さぶってくる。

そんな中、コテツはぽつりと呟いた。

「……まあ、それも悪くはない、か」

呟いた言葉はどうやらリーゼロッテには届かず、彼女は首を傾げている。

「……？ あれ？ 今、コテツさん、笑いました？」

だが、言葉ではなく、表情として、彼女に届いた。

「そうか？」

「はいっ、笑いました」

リーゼロッテも、笑みを返してくる。

それが何故だかおかしくて、コテツは誤魔化すように言葉を唱えた。

「そうか。まあ、それじゃあ、帰るとしよう」

「え？ ああ！ ごめんなさい、重かったですよ？」

「いや、そうでもない」

急いで飛び退くリーゼロッテ。のろのろと立ち上がるコテツ。

「帰ろう」

「はい。あ、そうだ、実はいつまでお出かけするか分からないので、お弁当持ってきたんです」

「それは助かるな。道中食べるとしよう」

「はいっ」

来たときと同じように、長閑なまま引き返す。

森の中の生物は、別にわざわざ襲い掛かってくるような真似もせず。

鳥のささやかな鳴き声が聞こえてくるだけだ。

そうして、コテツの初めての冒険は幕を閉じた。

のであれば。

長閑で非常に良かったのだが。

「あれは……、ヴォルトに、ラッドと言ったか……、いや、それよりも」

目を引いたのは、街道に立つヴォルトとラッドの更に奥。そこにそびえ立つ、何か。

十メートルはあろう巨大な体躯。人型に近いが腕が長く地に着く、猿のような体型。

白い毛皮。そして、——敵意は獰猛。

「一体あれはなんだ……！？」

振り下ろされる拳が、地面を穿った。

「どうやらこのまま終わりとはいかせてくれないらしい……！！！」

それは魔物。

ブランサンジュと呼ばれる魔獣である。

19話 平穩安穩安閑（後書き）

次回、ちよつと生身で戦闘と参ります。

20話 ノンストッププレックレスライフ

街道を、街に向かってひた走る。

「すまねえ！ 巻き込んだみたいだ！！」

「いい！ そちらもアレに会いたくて会った訳ではあるまい！ それよりアレは一体なんだ！？」

背後には、白い狒々の姿がある。

気が付いたときにはコテツもリーゼロッテも、とつくに捕捉されていた。それに、ヴォルトとラッドに別方向へ逃げろ、と言っわけにも行かず、共に逃げるしかなかった。

「ブランサンジュ……、魔獣だよ！ 何でこんなところにいるのかわからねえ！」

「……狩り残してもいたのか？」

「ありえねえ！ 何のために俺ら冒険者や騎士団が常に目え光らせてると思っただ！！」

五倍を悠に超える体格差では、戦うと言う選択肢はどこにも浮かび上がりはしなかった。

となれば、ひたすらに街道を逆走するしかない。

幸い、背後の敵は非常に巨大ではあるが、その重量故か何とか走れば追いつかない。

（地球では、あのような生き物は自重を支え切れまい……！ これが魔力で身体を補強する、ということか！）

生物が魔力素を取り込み適応し、進化したのが魔物である。

その中でも獣をベースとしたものが魔獣と呼ばれる。
地球の物理法則ではありえないその体を、魔力によって支える、
魔なる獣である。

「……来るぞ！ 散開！！」

俄に攻撃の気配が見えて、コテツは叫んだ。
直後に、四人の下へ拳が振り下ろされる。

コテツは横に跳んで回避。リーゼロッテも危なげなく、軽やかに
前へ跳んで避けた。

そして、二人の冒険者も、また何とか避けられたらしい。

これまで、何度か拳が振り下ろされているが、未だに負傷者はい
なかった。

的が分散しているおかげだ。肝要なのは、四人と言う人数。

ブランサンジュと呼ばれた魔物は、四つの的に迷うのか、狙いに
甘さが生まれる。それ故に、この逃走劇を繰り広げられるのだ。

「ボス、街に着くまで何回これを繰り返しいいんですかね！」

「馬鹿野郎！ 死ぬまでだ！！」

そもそも、コテツとリーゼロッテだけであれば、逃げ切ることは
そう難しくない。

亜人の脚力と、コテツの全力疾走であれば、どうにか背後の敵か
ら距離を離すことができる。

それをしないのは、二人の人間の冒険者の存在だ。重量的に、担
いで走ることも難しい。

助ける義理もなかったが、彼らを見捨てたいとも、コテツは思わ
なかった。

だから、動局的の一つとして、彼らを支援する。

「リーゼロッテ、君は先に行ってくれて構わないぞ」

「いいえ、大丈夫ですから、気にしないで下さい」

そう言つて、少し前を走るリーゼロッテに、何故かコテツは安心した。

(……そうだな、彼女はそういう人間だ)

コテツ一人だったら、見捨てて逃げ出していたかもしれない。

コテツの生きた戦場とは、そういうものだったからだ。リスクとリターンが噛み合わないなら、合理的に捨てる。

例えばリスクが大きくても見捨てずに救おうとすること。それは、コテツが戦場に落としてきた物だ。

彼女は、それを持っている。コテツは、それを拾つてみたいと思う。

いつの間にか落としたモノ。それが必要なのかどうか知るためにも、コテツはその一つ一つを拾いなおしたい。

彼女なら、迷わず救おうとするだろう、そう思ったから、コテツは冒険者の二人を見捨てなかったのだ

「街が見えて来たぞっ、ラッド、テメエ気張りやがれ!!」

「へいよっと!!」

走り続けると、視界にぼつりと街の姿が見えてくる。

測ってはいないが、結構な距離を逃げてきたようだ

そのように、希望が見えてきたのだが、コテツは背後を見ながら口を開いた

「焦れて来るとしたらこの辺りか……!?!」

そう、ここからが正念場になるかもしれないのだ。

野生の獣に忍耐があるとは思えない、それに、獲物は逃げ切られる直前である。

果たして、背後の狒々がどこまで状況を理解しているか分からないが、街まで侵入することは危険だと分かっているのだろ。明らかに、背後から聞こえる吐息が荒く、苛立つような空気が見受けられる。

ということは。

大きなアクションがあるとすれば。

今――。

「来るぞ！ 全力で逃げろ――！」

四人の周囲を、影が覆う。

そう、狒々は、跳んだのだ――。縮まらぬ距離を埋めるため。この場の四人を、食い殺すため。

「……あ？」

間抜けな声は、ラッドのものだ。

彼は、呆けたように、空を見上げていた。

その空にある、跳躍した狒々の姿を。

「とにかく跳べっ――！」

コテツは、前に飛び込むように跳んだ。余る勢いを、前転して殺す。

直後に、彼を振動が襲う。

揺れる地面をコテツは疾駆、巻き上がる砂煙の中、リーゼロッテを視界に収め、走る勢いのまま、彼女を抱えて更に跳んだ。

「きゃっ、つて、コテツさん？」

間一髪、跳躍と同時に背後から風。巨大な腕が、背後を横薙ぎにしていた。

何とか、避けた。コテツもリーゼロッテも、無事である。

「くっ……、他の二人は！？」

それを確認するなりリーゼロッテを下ろし、コテツは背後を、二人の冒険者を探す。

ヴォルトは、地面に膝を付いてはいるが、どうやら腕は槍でガードしたらしい。問題ない姿が見えた。

彼はいい。まったく無傷とはいえずとも、普通に走れはするだろう。

奇襲も避けた後は街まで走り続ければいい。

——だが。

「ぐっ、おおおおっ……」

その傍らには、足を抱えて呻くラッドの姿が、あった。

「くっそ、こんな目と鼻の先で……！！」

悔しそうにヴォルトが吐き捨てるが、決して状況は好転しない。ブランサンジュの着地時に放たれた地面の破片が、ラッドの足に直撃したようであり、大きく足首の肉が抉れている。

それを見て駆け寄ろうとした二人を、鋭い声が貫いた。

「来るんじゃないええ！！」

ヴォルトは腕を横に、コテツとリーゼロッテの動きを制止する。

「ラッドはこのザマ。そして、俺もおめえらほど速くねえ。これ以上は世話かけらんねえよ、早く行け！」

「ボスも早く逃げてくれ！」

「俺がんなことしてたまつかよ！」

そう言つて、立ち上がりヴォルトが槍を構える。

コテツは、何もせずにそれを黙って見ていた。

ただ、微動だにせず待っていた。

ただ、立っていた。

——視界の端に、彼らに駆け寄るリーゼロッテを見ていたからだ。

「コテツさん、彼を担いで走れますかっ？」

コテツは、それを見て、口の端を吊り上げた。

（……ああ。彼女はそういう人間だ）

巨大な敵と、二人の男の間に立ち、リーゼロッテは白い狍々を睨み付けた。

「おいおい嬢ちゃん、俺は先に行けつつたんだぜ」

「私が気を引きますから、早く向こうへっ！」

それは、コテツの居た世界の軍人なら鼻で笑った行為だろう。

リスクとリターンの噛み合わない、無謀な行動だ、と。

だが、しかし、だ。

例えそれが、コテツの世界の常識とかけ離れていても、どんなに

無謀でも。

だからこそ彼女は、素敵なのだ。

「リーゼロッテ、君こそ逃げろ」

「コテツさん!？」

コテツは、彼女の前に立った。

そして、腰に差された剣を抜き放つ。

「ここは……、俺がやろう」

視界には、敵の姿だけが映りこむ。

他のことは、何も気にならない。

「馬鹿やろつ、無茶だ!」

どんな言葉も、知ったことではない。

拳が振りあがる。それと同時にコテツは駆けた。

「残念ながら相手は俺だ!」

その拳の狙いは明らかに手負いのラッド。

それを逸らすためにコテツはブランサンジュの足、関節部に刃を突き立てた。

毛皮に阻まれ、深く食い込むことはなかった刃だが、鬱陶しいとは感じたのか、ブランサンジュはコテツへと見事目標を変える。

ただし、ここで一つ問題も発生した。

「当てにはしていなかったが……!!」

握っていた剣、その半ばから先がない。

折れたのだ。狒々の毛皮は予想よりも硬く、持っていた剣は想定より脆かった。

迷わず、折れた剣をコテツは投げ捨てた。そして、振り下ろされる右拳を避ける。

大きく右後ろに下がると、ブランサンジュは、右拳を引き戻し、左拳を放った。

それを更に右に避けると、まるで駄々をこねるように、ブランサンジュは左腕を振り回す。

どうにか、コテツはそれを避ける。時に潜り、上を飛び越え、右へ左へと。

そして、左に大きく跳んだとき、ブランサンジュは左腕を引き戻すと、右腕を放ってきた。

どうにか、後ろに飛びながら伏せて、避ける。

「コテツさんっ、無茶ですっ！」

そんな中、聞こえてきたのはリーゼロッテの声。

どうやら、逃げ回っているうちに、後退させられたようで、逃げている三人と、上手く距離が取れていない。

「問題ない」

努めて冷静に、コテツは言った。

狒々を睨み付け、大地に立つコテツ。

彼に声をかけたのは、ヴォルトとリーゼロッテに肩を貸された、ラッド。

彼は驚いたように、理解できないというように、コテツに聞いた。

「あんたは、どうして……」

何故。どうして、と彼は問うている。

何故、戦うのか。どうして、ラッドとヴォルトを置いて逃げないのか。

答えは簡単で。ただ一つ、コテツは語った。

「……俺でよければ、いくらでも」

きっと、言葉の意味はラッドにもヴォルトにも、意味は分からなかっただろう。

ただ、リーゼロッテにだけは伝わる。
いや、伝わったのだ。

「コテツさん……」

そう、この会話は焼き増し。

森の時と、同じ。

「信じて、いいんですか……？　お願いしちゃっても、いいですか！？」

だから、返す返事も、また同じ。

「——ああ、任せておけ」

コテツは、今一度、ブランサンジュを注意深く見守った。
彼の心中には一つだけ、——策がある。

（……いくら魔術で補強されても。あらゆる物理法則から解放されたわけではない）

今まで、性能差のある相手とだって、コテツは戦ってきた。その度に勝ってきたのは、癖や弱点を見抜いて来たからだ。だから、今回もそうした。

（振れる腕は一本まで。バランスと重量の関係で両腕は同時に触れない——！）

癖と制限。必ず存在するそれを、今、コテツは見切った。

（そして、この距離ならば、腕を伸ばしきって攻撃するしかない）

案の定、拳はするように振るわれた。

コテツと狒々の長い距離を、拳が駆け抜ける。

そして、腕が伸びきる、コテツに拳が当たるその直前。

——コテツは大きく真上に跳んだ。

（そこに大きな隙が生まれる！！）

引き戻される腕。

——乗った。

コテツは、その腕に、乗っていた。

「お、お、おっ——！」

疾駆。

その太い腕を駆け抜ける。

腕から肩へ。そして、頭を、殴る。

「……せめて強化外骨格が欲しい所だ！」

残念だが、コテツの世界のパスワードスーツなどあるわけもない。武器も捨てた。後は、拳、ただ一つ。

ひたすら、殴る。彼は、何度も何度も、拳を狒々の頭へとぶつけた。

そこで初めて、狒々が吼える。目障りなのか、多少のダメージは与えられているのか。

そして、殴り続けるコテツに。

ブランサンジュの白い腕が、迫った。

迫る腕。死の気配。

コテツは、跳んだ。

「任せておけ、と言ったからな!!」

振るわれた腕が、真下を抜ける。

そして、コテツは勢いを付けて空中で一回転すると、ブランサンジュのその頭に。

渾身の踵落しを叩き込んだ――。

額に直撃する足。衝撃の後、落下。

毛皮を掴んで勢いを殺し、着地。

無論、倒せたわけではない。武器もなしに倒せるわけもない。だが。

目に見えて、動きが鈍った。

「今の内に逃げさせてもらおうっ」

コテツの攻撃は確かに、脳を揺らすことには成功していたのだ。ふらふらと揺れながら動く狒々を背に、コテツは全力疾走を開始する。

一気に距離を引き離し、三人の下へ。

背後の敵の動きは鈍い。ぐいぐいと、コテツはそれを引き離していく

そして、程なくして、コテツは彼らに追いついた。追いついた、のだが。

「……いい加減、笑えてくるな」

立ち止まる四人。

背後には、ふらふらと定まらぬ動きを続けるブランサンジュが一匹。

そして、前には。

また別の、ブランサンジュが、そこにはいた。人知れず、コテツは溜息一つ。

はたして、どうしたものか。

状況は絶望的である。背後のブランサンジュも、いつ回復するのか分からない。

まともにやりあえば、生き残れる気がしない。

その状況に、ヴォルトすら凍りつき、ラッドも、その体を震わせている。

そんな中。

その空気を引き裂くように、それは現れた。

『ご主人様、探しましたよっ！』

コテツは、呆れたように、肩をすくめて笑ったのだった。

「なんともまあ、いいタイミングだ、相棒——」

20話 ノンストップレックレスライフ（後書き）

今回はあっさり戦闘終了で。

03はほとんど世界観説明みたいなものです。

物語としては非常に中途半端なモノを感じてしまいましたが……。出さなきゃいけない設定と物語のバランスの難しさを感じます。

21話 スタートバイミィ

「まったく、探しましたよ。速攻で書類を片付けて来たんですからね？」

「そうか。しかし、よくここがわかったな」

「運命ですね、はい」

宙に立つディステルガイストのコクピットから見える風景は。

「……」

「……実を言いますと、ディステルガイストに乗れば、ある程度方向が分かるんですよ」

「そうか」

蹲る、白い山が二つ。それは、もう動かない。

「しかし、ブランサンジュですか。魔物としては、中の下ですが、巨獣内では下の下ってところですかね。大きいですが動きは鈍いですし、遠距離型SHならカモです」

「生身で会つと最悪だな」

「そりゃ、生身でなら討伐隊組んで相手しますよ」

勝負は、あっさりと決まっていた。

動きの鈍いブランサンジュとディステルガイストでは、根本的に違いすぎる。

あざみが下の下と言っただけあって、本当に何事もなく、全てが終わった。

「さて……、その男を回収してくれ」

「ん、なにかあるんですか？」

「足に怪我を負っている。帰りが面倒だ」

「了解です」

コテツは機体の片膝を付かせ、掌に、下に居る三人を乗せる。

「まったく……、たまにはたまには平和に行きたいものだ」

呟いて、コテツは大きく溜息を吐いたのだった。

「なあ、リーゼロッテ」

「なんでしょうか？」

街に戻り、ヴォルトはラッドを担いで去り、コテツは、城の自らの部屋へと戻り、疲れに任せて残った時間を無為に過ごした。

そして、夜。

コテツは、椅子に座った状態で、背後に控えるリーゼロッテに呼びかけた。

「あの白い……、ブランサンジュ、と言ったか。あれはよく現れるのか？」

「あ、す、すみません。安全な依頼って言って私が選んだのに……」

肩を落とし、頭を下げるリーゼロッテに、椅子に座っていたコテツは、本へと向けていた顔を上げる。

「いや、それはいい。想定外ならどんな状況でもあり得る。それより、ヴォルトがありえない、等と言っていたはずだが……」

あり得ないとヴォルトが言ったブランサンジュが二体も存在する。たとえ素人であるコテツであっても、違和感の一つや二つは覚えるものだ。

「あ……、はい、ありがとうございます。それで、ブランサンジュなんですけど、あれは、私もおかしいと思います」

「ふむ？」

そして、それにはリーゼロッテも同意見らしい。

「ここの周辺の街道に普通の魔物はともかく、巨大なタイプが出たなんて、長らく聞いてません。それに、ブランサンジュはもつと北のほうに居るはずだと……」

「なるほど」

確かに、あの白い外見も違和感が残る。岩場でも雪原地帯でもないのに、白いのだ。

明らかな違和感と不自然。きな臭いものが、そこにはある。

しかし、これ以上自分が考えても、わかることはないだろう、とコテツは判断した。

どこまで考えても違和感は違和感どまりで、解決することはない。

「ありがとう、大体分かった」

思考停止。この件に違和感があり、考えるべきことがあるならば、それを考えるのはコテツの仕事ではない。

報告は済ませた以上この案件はコテツの手を離れている。

（あれが日常ではないことが分かれば十分、か。基本的にはこの周辺の街道に危険は少ない。しばらくは、様子見すべきだが、ディステルガイストかアインスがあればさほど問題もないだろう）

そうして、再び本へと視線を戻すコテツに、リーゼロッテは微笑みかけた。

「そう言えばコテツさん」

「む、なんだ？」

本に落としたかけた視線を、コテツは再び上げ、リーゼロッテを見る。

彼女は、にこにここと笑っていた。

「今日のコテツさん、格好よかったですよ」

対するコテツは、いつものように反応に困る。

そして、困っている間に、勝手に言葉は続けられた。

「今日は、色々優しくしてもらったりして、本当に、嬉しかったです」

「そう、か」

「だから、ありがとうございます」

その礼に、コテツは何も答えなかった。
ただ、考える。

（結局、俺は一体何がしたかったのか）

リーゼロッテは自分の落としてきたモノを持っているとコテツは感じた。

それを眩しいと思った。

そして――。

それを能動的に守りたい、と思ったのだ。

（羨ましかったのか。ただ、道の花を守るような気分なのか。……
それとも、拾い直したいのか）

未だに、生きる理由も判然としないコテツ。

（アルは、女のために生きるのもありだと言った。そして、兵士として職務に人生を捧ぐのも、またありだろう。なくしたモノを拾って生きるのも、一つの道か）

思考を続けるコテツだが、不意の声に、意識は引き戻されることとなった。

「ていうかご主人様……、私にも構ってくださいよ！」

唐突に呼ばれ、コテツは視線をベッドへ動かす。

「ベッドに居るから、寝ようとしているのかと思っただが」

視線の先には、ベッドに寝転がって、足をばたばたと上下させるあざみの姿があった。

「してませんよう、まったくもう。今日は私が来なかったらどうなっただと思ってるんですか」

「それには感謝しているが」

「だから、もつと態度に出してください。例えばそう、あざみ、君のおかげで助かった、結婚しよう、とか」

「あざみ、君のおかげで助かった」

「はい、……続きは？」

「ない」

「……えー？」

「ところで君は、何故俺を探していたんだ？」

話を摩り替えるようにコテツが問うと、あざみは、不自然な笑顔で固まった。

彼女にしては、珍しく齒切れが悪い。

「ええ、と、それはですねえ」

「どうした？」

「いえ、別に大したことじゃないんですけど……。あれじゃないですか。……そのリーゼさんと、なんかイベントが起きちゃったら困るじゃないですか？」

「私、ですか？」

ぴこ、と耳を動かして、首を傾げるリーゼロッテ。
コテツもまた、首をかしげた。

「イベント？ よく分からないが、ブランサンジュの件を予見していたのなら、素晴らしい慧眼だ」

「いや、違うんですけど。違うんですけど、褒められて悪い気はしないので否定しません。あとそこっ、可愛らしく耳動かして首傾げないでくださいっ。もふもふして胸揉みますよ！」

「えっ、えっと、困りますっ！」

あざみが、リーゼロッテへと襲い掛かり、リーゼロッテが逃げようとする。

コテツは、ぼんやりとそれを眺めていた。
どこことなく、微笑ましい。

そう感じて、無意識に、コテツの口端は吊り上る。

（まあ、色々試して生きるか。思いつく限り全てを。どうせ、残りの人生全てが余った時間だ——）

彼にしては前向きに、コテツは決めた。

彼にとって今日という日常が、珍しく楽しいものだったからだろう。

翌日。

「で？ 買った剣を早くも折ったから、新たに給金してくれ、って？」

王女の執務室。

朝日が差し込む部屋に積まれたのは、紙の束。
呼ばれたので、コテツはこの部屋にやってきた。

「ああ」

「あのね？ コテツ、その剣、何を使って買ったか分かる？」

「金だ」

「税金だわ」

「そうか」

「それを一日足らずで壊したの？」

「そうだ」

「……貴方と話しているとたまに疲れるわ」

「すまない」

「そこで謝るから困るのよ」

「……すまない」

コテツの言葉に、アマルベルガは頭を抑えた。

「まあ、いいわ。無駄遣いなら他の貴族のほうがよっぽどだしね。言いたいのは、大切にして欲しい、ということよ。まあ、相手が相手だし、仕方ないと思うのだけど、それでもね」
「わかった。気をつけよう」

確かに、適当に選んだ拳句折った、というのは褒められたことではない。

折ってしまったのは不可抗力とはいえ、もっと剣を吟味すれば、ああはならなかったかもしれないのだ。

素直に頷いたコテツに、アマルベルガは満足そうな顔をした。

「素直で助かるわ。それで、ブランサンジュが出たそうだけど」

「ああ」

「なるほどね。警戒を強めましょう」

当然のように、アマルベルガは言った。

コテツは、この際だから、とこの件をどう思うのか、聞いてみることにした。

「ところで、君はどう捉えている？」

考えるのはやめたが、聞いて、知識や常識を収集することは重要だ。違和感の答えを探すのは無駄だが、知るのは無駄ではない。

問われ、アマルベルガは少しの思考の下、こう答えた。

「転移魔法の事故と他国の陰謀が二割ずつ、貴族の陰謀が五割、見落として偶然が五分ずつと見ているわ」

つまり、半分は貴族の陰謀ではないか、と見てみると彼女は言った。

「偶然では、ない、と？」

「そういう偶然が発生しないように、騎士団と冒険者がいるのよ。貴方がどう思っているか知らないけど、魔物が突如朝起きたらあの姿になっているなんてほとんどありえないわ。少しずつ大きくなっていく訳なの。だから、それまでの目撃証言もなく唐突に現れるなんて不自然だわ」

「なるほど、では送り込んできた、というのが有力である、と」

「そう、でも他国は今戦争をしたい状況ではないし、貴族連中が怪しいんだけど」

「そうか」

この国は貴族にも問題があるのか、とコテツは心に留める。

先々代の王が傾けた国を、先代が立て直し、戴冠も終わっていない王女がどうにか支えているような国だ。

探せばどこにでも問題は出てくるのだろう。

コテツは、そこで納得を覚え、質問をやめる。

「ところで、話は変わるのだが」

「何かしら？」

「俺が、ギルドで依頼を受けることは問題か？」

聞けば、アマルベルガはそれを肯定すると思ったのだが、あっさり彼女が首を横に振った。

「いいえ？　むしろ、常に仕事があるわけじゃないから冒険者として名を上げることは諸外国へのアピールにもなって助かるのだけど」

「いいのか？」

「ええ。遊ばせておくのも勿体無いし、有事の際に居てくれれば十分ではあるのよ」

「あまり長期に外に出るのは問題か」

「それも別に構わないわ。頻繁でなければ。最悪、王家の術で呼び出しできるのよ、エトランジェは」

「便利なものだな」

「呼び出しに応じるかはエトランジェ次第だから、宥めすかさないといけないのだけれど、貴方ならその心配もないでしょうし」

「俺がアルトを売り込んで外国に渡るとは？」

「そんな気力はないでしょ？」

即答され、コテツは黙り込む。否定もできないのが、困った部分だ。

「それで、貴方はなにか依頼を受けてみるつもりなの？」

「ああ」

「そう。やっと何かする気になったのね。いい傾向だと思うわ」

「ふむ、そうか？」

聞き返すコテツに、珍しく仏頂面の王女は微笑を見せた。

「ええ、きっと、その方が素敵よ」

「さて、昨日の今日で、だが」

そうして、コテツは再びギルド本部にいる。

理由は、なんとなく。

アマルベルガに正式に許されたから、というわけでもあるが。

それと、ヴォルトとラッドがどうなったか気になってもいるのだ。

まあ、ヴォルトたちに関しては、いればいい、という程度の気分
いなければいけないで、色々見て帰ろうと思った。

だが、まあ、あっさりとコテツはヴォルトとラッドの姿を見つける
ことができた。

ヴォルトも、すぐにコテツに気が付いたらしく、手を振っている。

「よう、コテツ、昨日は助かったぜ、ありがとな」

「いや、大したことではない」

豪快に笑って礼を言うヴォルトに答えて、そのままコテツはラッ
ドを見る。

主に、足だ。

「む。怪我は、大丈夫なのか？」

昨日の足が挟れたような怪我は浅いものではない。
が、コテツを発見したラッドは、何でもなさげに笑っていた。

「あ？ おお、心配、してくれてたのかね……？ まあ、俺のパ
ーティにや魔術師もいるんでね。回復系統の」

「便利なものだな、魔術とは」

「まあ、回復は燃費悪いし、扱いにくいんですがね」

ラッド。彼は、何故か先日のような刺々しさを消し、はにかんだ
様に笑ってそこに立っていた。

「ところで、アンタに言いたいことがあるんだ」

「聞こう」

「ボスは、外してくれるか？」

「かまわねえけどよ……、コテツ」

「なんだ」

「気を付けろよ……？」

意味深な言葉を言って去っていくヴォルト。

（一体なんだ……、暗殺でも始まるのか？ いや、話を聞いてみな
いと分らないか）

それを見送ってコテツが言葉を待つと、安堵したように、ラッド
は続けた。

「まず、アンタを坊ちゃんって呼んだ事を謝罪するよ」

「気にしていない」

「アンタのおかげで、俺は大切なことに気が付いた。今まで俺は、

他人を舐め切ってたよう。アンタみたいな男がいるとは思わなかった」

と、そこで。

何故か、頬を赤らめるラッド。

ふと、ヴォルトの去り際の言葉が気になった。

(……嫌な、予感がする)

何故か、その顔が、前の世界で連日とある部隊の男達に迫られたというコテツのトラウマを刺激した。

なんせ、男所帯が多い世界だ。そして、コテツの世界では、部隊全員がそういう趣味だ、という部隊があつたのだが。

彼らは、最初はコテツを馬鹿にし、コテツが一度戦闘をすると、目の前のラッドのようになったのだ。

そう、その部隊の彼らもまた。

「どうも、こんなんは初めてなんですがね。いやあ、なんというかこれは……」

こんな顔でコテツに愛を囁いたのだ――。

ああ、雲行きが怪しい。

どうして、こうなった。

誰が、男の頬を赤らめる顔を見たいというのか。

「……撤退」

コテツはぽつりと呟いた。

そして、もう一度。

「撤退っ！！」

「俺は、アンタのことがす——」

逃走。その言葉を最後まで聞く前に、コテツは全力で逃げ出したのだった。

（衛生兵はどこだ！！　主に、精神的衛生兵は……）

21話 スタートバイミー（後書き）

この辺で本格的に色々始めようと思います。

導入もやりましたし、キャラの紹介も済みましたし、世界観もある程度語った、と思います。

あとは話を展開する方向で。

全てを終わらせ、燃え尽きた主人公の再起と再生のストーリー、と書けば格好良いですが、つまり、コテツが真人間に戻るまで、です。とりあえず、閑話を少し挟んで、また纏まったストーリーを展開させたいと思います。

尚、この小説にB.L成分はまったく含まれません。今話最後は完全にネタのオチです。一応、念のため。

21・5話 マジックエンプティ（前書き）

いつも通りです。

読み飛ばして問題なし、もしくは最初と最後だけ読むのもあります。

21・5話 マジックエンプティ

「アル、聞きたいことがある」

「んー？ なんだいダンナ」

「魔術についてだが――」

「使えない俺に聞くかねえ、鬼畜だねダンナ」

「そうですよ！ 私に聞けばいくらでも答えますよ！！ 魔術の質問でも、スリーサイズでも、求愛にも応えます」

荒野、アルベールとの訓練を終え、大地に降り立ったコテツとアルベール、そして、タオルを持ってやってきたあざみ。

最近、アルベールとも、訓練を行うようになった。騎士団団長も副団長も、毎日コテツに付き合うほど、暇ではないのだ。

「俺も使えない。だから、使えない人間に聞いたほうが参考になる
と思ってな」

そして、アルベールは意外と博識でもあり、冒険者であった頃の知識と見聞は広く深い。

「華麗にスルーされました……」

「んー、魔術、ねえ」

「それに、騎士を志したなら、詳しくはあるのだろう？」

「まーね。無駄だったけどさ」

「俺としては、使えない人間から見た魔術が聞きたい。よろしく頼む」

「オーケイ、じゃあ、講義と行きましようかい」

「……ぐすん。ご主人様、私にも構ってください」

魔術

「魔力素を取り扱って、現象を操作する手法って定義付けられてるな」

「それは聞いたことがある」

「んで、魔術には大別して二種類あってだな。外成魔術と内成魔術の二つがある」

「ふむ」

「で、魔術の効果はさまざまで、火を起こしたりから、モノを生成することもできる。モノづくりの達人は機工士って呼ばれて特別扱いだな」

「SHの製作に携わる、か」

「ああ。装甲の生成とかな」

「どうやって発動するんだ？」

「頭の中で計算すればいいっていうか、頭で設計図を描く感じかな。発動できねーけど」

「脳で演算を行う、か」

「ぺらぺら喋る場合もあるよ。イメージとか、条件反射とかで計算を有利にするんだと」

「なるほど」

「SHに乗っていると、演算の一部を代理でやってくれたり、機体内に魔力循環させて増幅したりしてくれるぜ」

外成魔術

「空気中の魔力素を取り込んで、巧く体内で操作して放つのが外成魔術だな」

「そ。それで、どのくらいの量の魔力素を取り込めるかが外成魔術の適正って奴だけど、ダンナもゼロ？」

「ああ」

「俺もゼロ。と、話続けるけど、メリットは、デカイ魔法が撃てる

こと」

「デメリットは？」

「発動に時間が掛かるんだよね。精密にしようと思っただけ時間かかるし。それに、外から取り込んだ魔力を操作するのに自分の内在魔力使うから、ちまちました魔力操作が必要なんだってさ。

これは発動前に潰すのが一番だな。使えない身としちゃ、防御手段もあつたもんじゃねーからさ」

「そうか」

「ついでに、女の子のほうが外成魔術の適正が高い人が多いらしいぜ。余談だけど」

「何故？」

「外からモノを取り込むわけだから、なんつーの？ こう、女の人って、お腹ん中に命宿せるじゃん。生命のキャパシティがすごいんだよ。すげーよな」

「そうだな」

「外成魔術の適正を優先して、エーポスには女性型が多いという説は有力なんですよ。とすかさず会話に参加してみます」

内成魔術

「こりゃ、自分の中の内在魔力って奴だけでどうにかする魔術だな」
「メリットは？」

「とにかく速い。もうほとんど瞬時に出るよ。しかも手間かけないで結構な威力」

「デメリットは？」

「燃費が悪い、あんまりデカイの撃てないし、やりすぎると命に関わる」

「なるほど」

「相手にするなら、避けて徹して魔力切れを待つ。んで、内在魔力つてのは、人の余り生命力らしい」

「なるほど、それが底を尽きて尚魔術を使うと、命を削る羽目になるのか」

「そゆこと。こっちは、野郎の方が適正が高いらしいな」

「長期的な生命力では女性の方が上らしいが、そうなのか？」

「マジ？ いや、でもどっちかってと戦場じゃ野郎の方がしぶといぜ？」

「病気に対する抵抗力などよりも、身体的活発さか」

「多分そつだろ。で、ダンナの適正は？」

「不明だ」

「まだ測ってないのかまあ、。ありゃ、学院行かなきゃ測れねえもんな」

「アルはどうなんだ」

「俺はこつちもアウト。別に元気余ってりや使えるわけでもないらしいぜ？ 体外に出せるかどうかとかな」

「そうか」

「ちなみに、機工士はもつぱらこつちだってよ。外成だと不純物が混じるんだとさ。外成でSH造るやつは凄腕な」

魔力素

「こりゃ誰もよく知らねーんだよな。空気中に存在するし、人の中にもあるらしいし」

「指向性を与えれば、さまざまな現象を生み出す、か」

「そもそも妖精みたいな姿があるとか、粉みたいだ、とかよくわからんし」

学院

「先ほど話に出た学院とは？」

「アカデミーとか言われてる、魔術師の養成学校でもあるし、お偉いさんとかが延々研究してる場でもある」

（大学院のようなもの、か）

「で、内在魔力だが、測定が難しいらしくてさ。学院の方じゃないと測定できないらしいぜ。俺も、騎士見習いときそっちで測定さ

れて来た」
「そうか」

「こんなものか。助かった」
「おう、じゃーな、ダンナ」

一足先に、と去っていくアルベール。
残ったコテツとあざみは、並んで歩く。

「では、帰るか」
「え？ あ、はい」

王城付近に造られた練兵場の荒野は広い。

「ご主人様、私に聞きたいこととかありません？」

「特にないが」

「……そうですか」

「どうした」

「私にも構ってくださいよう！」

「……困る」

コテツにはウィットに富んだジョークを飛ばす話術もない。

「というか、ご主人様はいつになったら私の気持ちに伝えてくれるんですか？」

そして、黙ったままでいると、突如あざみが聞いてきて、ソレにだけは、コテツは真面目に返答を返した。

「悪いが、今君の気持ちには応えられない」

「今って、どういう意味ですか」

「残念だが、自分のことで精一杯だ。情けない話だが」

そもそも、この世界に来て一月足らず。

一切何も安定していないのだ。

「時間が必要だ。色々」

その言葉に、文句の一つでもあるだろう、とコテツは覚悟していたのだが、意外にも、彼女はあっさりと納得した。

「まあ、仕方ないですかね。ご主人様に余裕がないのは、分かります」

「いいのか？」

聞き返したコテツに、あざみは微笑んだ。

「なんせ、ご主人様が死ぬまで、私はずっと一緒ですから。待ちますよ、貴方が死ぬまでの間なら——」

荒野に、二人の足跡だけが続いていく。

21・5話 マジックエンプティ（後書き）

読み飛ばした方もいるだろうので、また後で報告しますが、次の水
木の曜日間、都合で自宅を離れることとなります。

帰るのは金曜ですが、その間、完全に文章製作が停滞しますので、
その分更新も滞ります。ご了承ください。

22話 とある訓練風景

「ダンナァー。ガチで本気な野郎に掘られ……、惚れられたかもしれないんだって?」

「どこでそれを聞いた」

「んー? ダンナの自称嫁」

「あざみか……」

「ダンナ的にはどっちが本命なんよ? 狐耳のあの子と、黒髪の子」

荒野に男二人座り込んで、言葉を交わす。

左右には、水色のコテツのアインスと、緑のシャルフ・スマラクト。

「本命もなにもあったものか」

「ダンナは硬派っつーか、トーヘンボクっていうかだねえ。俺ならあんな可愛い女の子、二秒で結婚してくれって言っけど」

「一緒にしないでくれ」

「結局、ダンナとしてはどう思ってるのよ。リーゼちゃんはまだ、普通かもしれないけど、あざみんはもうスキスキオーラ全開だぜ?」

下世話な男の会話である。

だが、肩肘を張る必要のない分、コテツにとって気楽でもあった。

「わからん」

「わからんってダンナ……」

「俺に恋愛は難解すぎる。理解に時間が掛かるだろう」
「重症だ……」

他者とのコミュニケーションすら希薄だったコテツは、そもそも恋愛以前の問題である。

そんな、よく分からない状況で答えを出すのは、あざみにとっても失礼だ。

「理解する気はあんの？」

「彼女がそれを求めるなら」

「今望まれたらどうする？」

「それは……、困る」

他に言いようもない。それこそいつもの善処する、だ。

（それに、彼女が惚れたのは俺ではなく、俺の操縦手腕だろう）

そして、そういう思いもある。腕のいい主を得て、浮かれているだけではあるまいか、と。

（時間が経てば、答えは出る。それまではなににもできまい）

そんなコテツに、アルベールは大きく溜息を吐いた。

「重症だねえ……、ダンナア」

「それに、今は自分のことでも精一杯だ」

「つまり、ダンナが恋愛するにや、結構な時間がいるってことだな？」

そう、コテツは思う。自分が関わるにしても、このような生きる

理由も目的もない、地に足の着かない男でいいのだろうか。

「まあでも、ダンナ。多分だけど、腕も確かでエトランジェとくりや、色々女の子が寄ってくるだろーよ。しかも、金くせえ、お嬢様がよ。そしてその背後には父親の影、だ」

「面倒だな……」

「ああ、でも、覚悟は決めといてくれよ。ダンナはそういう立場なんだ。政治的な世界にも立ってるんだよ」

それだけ言うと、アルベールは立ち上がった。

「そいじゃ、俺は帰るよ。ダンナは残るんだろ？」

「ああ」

「んじゃ。さて、気張ってダンナの生きる理由を探さねーとな。女の子のためにつ」

「面白がってるだろう……、アル」

「おうよ！ ダンナモテそうだし。それと、アレだ」

「なんだ」

「恋愛って、理屈じゃねえよ？ ダンナ」

そう言って機体の下に去っていくアルベールを、コテツは見送ったのだった。

『コテツ！ なにをふにやふにやしているのです！！』

クラリッサの、罵声が飛ぶ。

「そんなつもりはないのだが」

『その返答がふにやふにやなんです！ 改めなさい！！』

コクピットの中。青の機体が紅の機体と打ち合う。

アルベールとの訓練から継続して、今度はクラリッサとだ。

『ところであなた。ブランサンジュを倒したそうですが……』

「ああ」

『……』

と、そこでクラリッサは突如黙り込んだ。

コテツは、疑問に思いつつも、機体の操作を続ける。

そして、不意に、ぽつりとクラリッサは呟いた。

『……あなたにしては、上出来です』

照れたような声音。

彼女らしくもない。

「ああ、ありがとう……？」

思わず、コテツは疑問系で返事を返していた。

すると、クラリツサは怒ったように怒声を上げる。

『何故疑問系ですか！ 私が褒めてるんですから素直に喜べばいいんです！！ 素直じゃありませんね……！！』
(その台詞、君に返したい)

腹に思っことを抱えつつも、コテツはクラリツサの大剣を捌いた。

『しかし、あなたはブランサンジュに徒手でダメージを負わせたそうですね……』

「ああ」

当然のように、事実へ頷くコテツだったが、帰ってきたのは呆れたような声。

『馬鹿ですか。どうやってたらそんな風に育つの？』

『脳に負荷を与え続けることにより、脳の使用領域が拡大するらしい。そして、負荷に対し、体は強靱になっていく』

医者からの又聞きをコテツは話し、クラリツサは首をかしげた。

『脳の使用領域……？』

『殺人マシーンに乗り続けられ、人間をやめるとい話だ』

『コテツは人間ですけど？』

当然のように、彼女は言う。

だが、コテツは表情一つ変えずに返した。

「俺の世界では、こんな言葉がある。『エースは人間じゃない。エースは化け物マシンのパーツの一つだ。だから、エースも化け物だ』」

」

コテツの言葉に、また、クラリッサは黙り込む。
先の言葉は、コテツの世界では、エースを表す言葉として有名な言葉である。

誰が言い始めたか知らないが、今では共通認識だ。
しかし。

『……あなたは人間です』

彼女は言った。

「して、その根拠は？」

問い返すコテツ。

モニタの向こうのクラリッサは、真面目な顔をしていた。

『ありません』

「む」

『ありませんが……、私が言うからそうなのです。あなた如きでは、人間なのです。コテツ』

根拠も証拠も何もあつたものではない。

（俺如きでは、か。言ってくれる）

クラリッサとしては、らしくもない言葉だった。
だが、何故か、コテツの口端は、吊り上つたのだ。

「——素敵な根拠だ」

にやりと笑い、剣戟は続く。

「大分、様になってきましたね。私には到底及びませんがっ」
「そうだな」

訓練を終え、二人、荒野の大地で休憩を取る。
訓練が終わったからと言って、はいさよなら、というわけではないのだ。

お互い、訓練での意見交換を行ったり、親睦を深めたり、それらもまた、重要なコトの一つである。

そして、そんな中、一つ。

コテツはある質問をすることを、選んだ。

「クラリツサ」

「なんです？」

水筒から水をカップに入れて飲むクラリツサを見ながら、コテツは言う。

「君に、恋人はいるのか」

彼女はそれを、盛大に嘔き出した。

「ぶふっ！！ こ、コテツ！？ コテツ・モチヅキ！？」

（どうしたんだ……？ 気管にでも進入したのか）

オーバーなりアクションに戸惑いつつも、コテツは口を開く。

「なんだ」

「ほ、ほんき？」

今度は、舌つ足らずに聞かれる。
コテツは、信じられないが――。

「真面目だ」

それでも本気で真面目なのだ。
これでも。

先ほどアルベールに言われた言葉を思い出し、年頃の女性を参考
にしてみようと思ったのだ。

再三言っが、馬鹿みたいだが本気である。

「い、いませんけど、それが何か、あなたに関わるのですか！？」

「ふむ、では、今好きな人間はいるか」

「こ、コテツ！　いい加減になさい！！」

「真面目に聞いている」

「……う。いませんよ。ちょっと気になる人はいますけど……」

「ふむ、そうか。では、人を好きになったことは……」

「な、なんでそんなことばかり聞くですかあああ……！」

唐突に振るわれた拳がコテツの頬に突き刺さった。

そして、衝撃に戸惑ううちに、クラリツサは走り去っていく。

荒野で一人、コテツは首を傾げていた。

「……何故だ」

立ち尽くすコテツ。繰り返すが、全て本気だった。

そうして、しばらくの間立ったまましていると、不意に声が掛かる。

「ご主人様ー、お迎えに来ましたよー」

コテツを主と呼ぶのは一人。あざみだ。

にこにこ笑いながら、あざみはコテツの目の前に立っている。

「あざみか」

「はい、ついでに、これ」

そして、あざみは手に持っていた荷物、バスケットをコテツへと手渡した。

「リーゼロッテさんのおいしいサンドウィッチです」

「そうか、ありがとう」

座り込み、バスケットを開ける。

中には、言葉通り、サンドウィッチが沢山に詰まっていた。
今は丁度昼時。太陽が真上に見える。
空腹でもあった。

コテツは、一つサンドウィッチを掴むと、口の中に入れた。

「どうです？」

「美味しいな」

「くう、私の料理で言わせてみたいですね……。要練習です」
「君は料理はできるのか？」

聞くと、あざみはあっけらかんと答えた。

「できませんよ。だから、練習です」

「そうか」

それは決して悪いことではないだろう。

あざみ。エーポスである彼女は、大切に扱われ、さまざまな経験
をしてこなかった。

それをやりなおすのは、今からでも遅くはない。

（俺は、どうだろうか）

コテツはどうか。まだ分からない。

ただ、コテツは呟く。

「あざみ」

「なんでしょっ」

「……恋愛とは、難しいな」

「えっと。ご主人様、大丈夫デスカー？」

22話 とある訓練風景（後書き）

これは閑話ですので、二話で終わる予定です。次の話の構成が決まるまでの時間稼ぎと言っても構いません。

日常風景を描く方向で。いまいち面白いが微妙ですが、本編まとまるまで少々お待ちを。

そして、前回の21・5話でもお話しましたが、次の水曜日から三日間、家におらず、外に二泊することになります。そのため、更新が滞ります。ご了承ください。

23話 シティ&ジョーク

城。

「ご苦労さまです」

門番に挨拶されて、コテツは城の中へと入っていった。

（あの目は、慣れないな……）

門番は、尊敬の眼差しを向けて、コテツを見送る。他の一部兵士もまた、コテツにそんな視線を向けてくる。腕の保障されたエトランジェ。それだけで、兵士にとって尊敬するには十分らしい。

それに、現在、国を救い、反目していた騎士団副団長を認めさせたなどと、噂には事欠かないのがコテツ。

そう言った視線は、山ほど送られてくる。

（……困るぞ）

一人、コテツは軍服の襟を正した。

なんとも、居心地が悪い。コテツは、自分のことをさほど上等で

あると思っていけないのだから、そんな視線を受けても困るに決まっている。。

畏怖も、侮蔑も慣れたものののだが、これだけにはどうも慣れない。

だから、そんな視線に押されるようにコテツは早足で廊下を歩くことができるだけ早く、自分の部屋に、だ。

と、そんな折、コテツは廊下でシャルロットと出会うこととなった。

「珍しいな。こんなところで会うとは」

いつもの軍服。背筋を伸ばして歩く凜とした姿。

彼女は、コテツの姿を見つけるなり、口を開いた。

「コテツ、丁度いい。アマルベルガ様がお呼びだ、行つて来い」

珍しい、と思ったらどうやら、コテツを探しに来たようである。

なるほど、そうなれば、部屋に向かうそのままの足で、王女の執務室へ行く他ない。

と、目的地を変えて歩みを続けるコテツ。その隣に、シャルロットがついた。

「君も来るのか？」

「いや、放っておいたらお前は来ないかも知れないだろう？」

「……そういう風に見えるのか」

「ふらふらと風に煽られそうに見える」

「……そうか」

流石のコテツも、呼ばれて行かないなどという真似をするつもりもないのだが。

しかし、シャルロッテの同行を固辞するような理由もない。

「そういえば君は、中々訓練に出てこないが、忙しいのか？」

そして、黙って歩くような理由もまた、ないので、話題を変えて話しかける。。

のだが。

一瞬にして重くなる空気。

（一体なんだ……！）

どんよりとした陰気な何かはシャルロッテから漂ってきていた。
そして、陰気なシャルロッテから、陰気な声が、発される。

「いや、私が出ても仕方ないだろう……？ お前の方が強いし……、
クラリッサにも追い抜かされそうだし……、アルベールと言う男も
入ってきたし……、お前の本気の一端を見て、だが私の方が強いと
か思っで、恥ずかしいし！」

「……ああ、いや」

いい歳こいてなにをいじけてるんだこの女……、という言葉は、
鉄の意志で飲み込んだ。

「……ええとだな。君のそのない操縦は一級品だと思う……、ぞ
？」

そして戸惑いながら、コテツは当たり障りのない言葉を考えてい
く。

「それに君は指揮もできる。部下からの信頼も厚い。俺には無いも

のだ」

指揮を執ったこともないでは無いが、しかし、結局コテツは一人で前に出るほうが性に合っている。

所詮将の器ではなく、兵士の器だと言うことだ。

その点彼女は、間違いなく、将の器だ。

「そ、そうか……？」

「ああ。問題ない」

果たして何が問題ないのか。コテツにも分からないが、とにかく頷く。

すると、シャルロッテは途端に表情を輝かせた。

「そうか！ よし、では私も参加しよう。さあやろう、すぐやろう」

「……待て。王女の執務室に行く必要があるんじゃないのか」

どうやら、人知れず余程落ち込んでいたようである。

そんなシャルロッテは堰切って荒野に行かんとするが、コテツに止められ、しゅんとする。

「あ、ああ……、そうだな。すまない」

「いや、いい」

そうして、コテツとシャルロッテは、執務室へと入った。

「アマルベルガ様。コテツを連れてまいりました」

シャルロッテが凜とした声で言うと、椅子に座って書類に目を落としていたアマルベルガが、顔を上げる。

「ご苦勞様。シャルロッテはさがって頂戴」
「は」

退出するシャルロッテ。

それを確認して、コテツは口を開いた。

「何の用件だ」

「そうね、聞きたいのだけど、依頼は決まった？」

依頼。つまり、ギルドの依頼のことだ。

依頼を受け、この王都を離れることは、王女から直々に許可された。
た。

せつかくのエトランジェも、戦闘がなければ意味がない。それでは死蔵された調度品と変わらない。

故に、依頼を受けて名を上げることこそ、今のコテツにできることでもある。

そして、依頼を受けて外に出られるということは、コテツにとって、願ってもないことだった。

「とある貴族の護衛を受けようと思っている。外の街へ行けるし、丁度いいだろう」

「そう、どれくらい掛かるの？」

「二週間ほどだ」

「許可するわ。まあ、好きにしていって言ったけど、長期の依頼の場合は、一応報告して頂戴」

「分かった」

正式に依頼を受けたわけではなく、目星をつけたただだが、コテツはその依頼を受けるだろうと見ている。

今の所、何より外が見たいのだ。この世界で生きる、情報量がまったく持って足りない。

「それと、リーゼロッテも連れて行ってね？」

「それは構わないが、義務でもあるのか？」

コテツが聞き返すと、アマルベルガは首を横に振った。

「いいえ、だけど、貴方がいなきゃ、あの子は一人になってしまうでしょう？」

「確かに、そうだな」

「それに、エトランジェの専属だから、色々他人の目もあるのよ。あと……、彼女もあんまり外を見たことないだろうし」

（最後の部分が占めるウェイトが大きいな。それが本音か）

王女は、よくリーゼロッテを気にかける。

しかし、連れて行くことに關して、コテツにまったく異論はない。コテツはまずこの世界の歩き方すら知れたものではないし、あざみもどことなく不安である。

あざみは箱入り娘と言っても過言ではなく、知識はあっても、実践には向かないタイプ。

その点、リーゼロッテが役に立つことは、前回の依頼で実証済み。そして、コテツは彼女に恩義も感じている。恩義というほどのものでもないかもしれないが、私生活で特に世話になっているのは、彼女。

「異論はない。……しかし、リーゼロッテのことを、随分気にしているのだな」

ぼつりと、コテツは口にした。

アマルベルガはコテツを見て、困ったように苦笑する。

「そうかもね。あの子は私が拾ってきたから」

「そうだったな」

「ええ。そうなのよ」

「詳しくは語らず、か」

「気になるのかしら？」

「いや、そうでもない」

「でしょう？ それに、私が語るのは、多分フェアじゃないでしょうし」

「そうか」

言いながら、アマルベルガは書類を机に置いて、立ち上がる。

「まあ、でも、貴方が来てから、リーゼロッテは楽しそうだわ。とてもいいことだと思う」

「そうか」

「だから、大切にしておいて。頼めた義理ではないけれど」

「そのくらいは、構わない」

コテツは頷く。コテツを召喚し、国のために戦えと言ったアマルベルガを、別にコテツは恨んでいない。

むしろ、役目を与え、衣食住を与えた彼女には、感謝してもいいと思っっている。憎むほどの理由がないだけでもあるが。

だから、頷いた。

それで、この話題は一旦終わり。

「それで、本来の用件なんだけど」

そして、アマルベルガは本題を口にした。

そう、これが、本題。

彼女は、真顔でこう言った

「——コテツ・モチヅキ。私を街に連れて行きなさい」
「……は？」

コテツが思わず固まるのも無理はない。
そんな、無茶振りだった。

「私を連れて街に下りなさいといってるのよ。コテツ。別に大したことじゃないわ、買い物して帰ってくるだけだし」

「それができる立場ではないだろう」

「できるわ。コテツ、女王命令よ。ほらね、貴方に命令できる立場だわ」

「……君はまだ戴冠を終えていない王女のはずだが」

「変わらないし、すぐに女王になるわ。すぐにね。次期女王だもの」

「考え直す気は？」

「ないわ」

きつぱりと言われ、コテツは溜息を吐いた。

「こんなこと頼めるの、貴方しかないのよ。他の人は絶対無理やり止めるでしょうし」

「俺が止めるとは？」

「そんな精力的に私を止める気力があるの？」

問われて、やはりまた、コテツは溜息を吐く。
そして。

「ついでに、門番に見つかったらまずいから、抱えて窓からお願い

ね」

「……君のドレスはまずいだろう」

「あら、何を見ているのかしら」

「む」

先ほど立ち上がったときから見える体の全体像に映る服は、上等なドレスではなく、カートルと呼ばれるワンピースのような筒型衣服に、エプロンという、まるで街で見かける娘のような姿である。

それを見て、コテツは三度目の溜息を吐いた。

「周到なことだ」

「当然の努力よ。さあ、連れて行きなさい」

「仕方がない……」

結局、コテツは折れた。どう頑張っても、彼女はその手この手を使つて連れて行かせようとするだろうから。

黙つてアマルベルガの隣に立ち、彼女を抱え上げる。

そして、躊躇いもなく、コテツは窓から飛び降りた。

一瞬の浮遊感。そして、重力の手に捕まえられて、落下。

城壁の上で一度着地し、再び城壁の外へと飛び降りる。

「聞いてはいたけど、凄まじいわね……。亜人並じゃない？」
「知らん」

こうして二人は、街へと降り立ったのだった。

そして、一時間後。

「それにしても、街に来るのは久々だわ……」

早くもコテツは疲労を覚えていた。

「……何か買ったりとかはしないのか」

いわゆるウィンドウショッピングと云えばいいのか。

昼の街を右へ左へとふらふら巡り、そして売り物を見ては移動する。雑貨屋へ、古着屋へ、花屋へ、八百屋へと、ふらふらと、取りとめもなく。

それだけの行為を、アマルベルガの後ろに付いて行っただけだが、しかし疲労が酷かった。

せめて、何か買うならすっきりとするものを、と言葉にしたコテツに、アマルベルガは振り向いて言った。

「無駄遣いはいけないわ。この服だって、わざわざ要らないのを貰い受けたのよ？」

「徹底しているな。しかし、アマルベルガ、君は——」

「アミイ」

コテツの言葉を遮るように、アマルベルガは声を被せる。

コテツが何のことだか分からず、返事を返さずにいると、今一度アマルベルガは口を開いた。

「アマルベルガの名はまずいでしょう？　だから、アミイと呼びなさい。今の私はただの街の娘だわ」

「了解。ではアミイ」

「なにかしら」

「何故君は、街に下りたんだ？」

コテツは問う。

別に欲しいものもないなら、一体何故街に来ることにしたのか。買う物もないなら、出るだけ無駄だろうに、と。

「街が見たかったのよ。たまにはね」

何時でも見ればいい、できれば自分を巻き込まない方向で。

というコテツの思いを知ってか知らずか、アマルベルガは語る。

「戴冠を終えて女王になったら、見れなくなるかもしれないからね」

「そうか」

「それより、お腹が空いたわ。その屋台の焼き鳥を買って頂戴」

言いながら、彼女は焼き鳥を焼く屋台を指差した。

コテツは半眼でアマルベルガを見つめる。

「自分で買ったらどうだ」

「無駄遣いはいけないわ」

「俺は構わないのか？　出所は同じだと思うが」

「貴方のお給料は貴方のお金だわ。使い道は自由よ」

「その台詞、君そっくりそのまま返そう。君は王女だろう？ アレくらいの金額なら」

「今の私はアミイだわ。ただの街娘、だから、男の人に奢ってもらうのも、普通のことよ」

そこまで来て、コテツは諦めた。

この王女は、こうなってはてこでも動かない。

「わかった、買ってこよう」

「あら、奢ってくれるのね」

なんとなく、その声に喜色が混じっているような気がして、コテツは呆れ顔をする。

「君がそう言っただろう」

「強制はしてないわ。だから、ありがとう」

「……どういたしまして」

釈然としないまま、コテツはアマルベルガに焼き鳥を渡した。

（俺の知る焼き鳥と同じかどうかは怪しいが……）

何か得体の知れない鳥の肉かも知れないそれが串に刺されたものを、アマルベルガは口に含んだ。

咀嚼、嚥下、そして、口を開く。

「あら、おいしい」

「なら、もう少し楽しそうな顔をしたらどうだ」

「残念だけど、営業スマイルしか持ち合わせてないの。見たい？」
「ならいい」

基本、仏頂面しか見せないアマルベルガだが、外交には笑顔の仮面というものも必要なのだろう。

果たしてどんな顔だろうか、とは思うものの、コテツは特に、今この場で見たいとは思わなかった。

「貴方の分は買わなかったのね」

「無駄遣いはいけない」

まるで、意趣返しのようにコテツはしれっと言つてのけた。
アマルベルガも、表情を変えずに返す。

「じゃあ、これは無駄遣いじゃないの？」

そう言つて、アマルベルガは焼き鳥の串を見せるように少し持ち上げた。

コテツは、それを見て、口を開いた。

「空腹の街娘に、食事を奢るくらいの甲斐性が必要だろう。城の兵士としては」

「そう、じゃあ親切な城の兵士さんに一口上げるわ」
「そうか」

差し出されてくる串から、肉を一口貰う。

得体が知れないとはいえ、見た目はただの焼き鳥だ。見た目上は美味しそうに見える。

そして、実際に美味だった。

コテツはぽつりと呟く。

「……美味しいな」

「貴方も、もう少しうれしそうな顔をしたらどう？」

コテツは、仏頂面で返した。

「生憎、持ち合わせていない」
「そう」

二人、愛想のひとかけらも無く、街を歩いていく。
そんな中、アマルベルガは隣を見ずに、言葉を紡いだ。

「さて、次はどこに行きましょうか」
「まだ行くのか」
「ええ」

コテツのげんなりとした表情に気づかずにアマルベルガは歩く。
いや、気づいていて無視しているのか。
そんな彼女は、ぽつりと漏らすように言った。

「ねえ、私がいえば、また貴方はこうしてここに連れてきてくれるのかしら」

コテツは、仏頂面のままで返す。

「……ギルドのボードにでも張っておけ」
「……」
「なんだ」
「貴方でも、冗談は言つのね」
「君はどうなんだ」

コテツの質問に、アマルベルガもまた、真面目な顔で返す。

「ねえ、私が世界を変えたい、と言ったら、冗談に聞こえる？」

「……どうだかな」

「そう」

「まあ、あまり下手な事を言ってくれるな。なんせ、こちらに来て日が浅いからな。信じてしまつかもしれん」

「——そう」

「疲れたな……」

ベッドの上に仰向けになり、コテツはぼつりと呟いた。

その後、アマルベルガに連れ去られ、街を東へ西へ歩き回り、結局何も手に入らず、帰ってきた。

肉体疲労よりも、やはり精神的疲労が酷い。

「女性の買い物とは、ああも不可解なのか……？」

呟いた言葉に、更に言葉を返したのは、リーゼロッテだ。

「……お疲れ様です」

苦笑気味に、リーゼロッテは言う。

そんなリーゼロッテに、コテツは思い出したように口を開いた。

「そういえば、リーゼロッテ」

「なんででしょう？」

「近々、二週間ほど出かける。君も来るか？」

二週間ほど。とある貴族を護衛し街道を馬車で移動する。

片道で一週間弱。出先への滞在も含めると、丁度二週間ほどだ。さほど簡単な旅、というわけでもないのだが。

「はい」

すぐに、リーゼロッテは頷いた。

「何も、聞かないんだな」

コテツの言葉に、リーゼロッテは、はにかむように、微笑む。

「はい。私は、コテツさんのメイドですから」

「そうか」

それだけ言って、コテツは目を閉じる。

「おやすみなさい、コテツさん」

「ああ、おやすみ」

そうして、コテツはまどろみの中へと、落ちていった。

23話 シティ&ジョーク（後書き）

というわけで、予定通り三日ほど出てきます。

ちよっとした小旅行みたいになるので、次は日曜辺りに、新章でお会いできたらいいなと思ってます。

24話 ストレンジスタート

大剣と刀が打ち合う。

甲高い音を立てて、今日も二機のSHが荒野を駆ける。

片方は、赤く、大剣をその手に握る、クラリツサのシュティールフランメ。

そして、今までと違ったのは、コテツの乗機。

刀で打ち合うその姿は青ではなく、白と黒。

『本当につ……！ 強いん……、ですね！』

今までの訓練では考えられないほど、余裕のない声を上げるクラリツサ。

手続きを済ませ、ディステルガイストを駆って戦いを繰り広げるコテツは、眉一つ動かさずに対応していた。

「機体のおかげだ」

『出力を下げて相手をしておきながらそれって嫌味ですか！』

「愛の結晶ですよ、私とご主人様の」

「思い通りに機体が動くのなら、性能の問題はある程度無視できる」

あざみの言葉を見無視して、コテツは呟いた。

思い通りに動く機体は、何一つ、ただの一度も直撃を許さない。

振り下ろされる刃を刀で受け流し、流しきった後、そのままシュティールフランメへと刀を振るう。

クラリツサは、後ろへ跳んで、それをかわした。

ディステルガイストは、何の文句も言わず、コテツの思い通りに動いている。

——操縦系統。

コテツがこの世界の機体に対し悩まざるを得ないファクターの一つだ。

果たして、何がどのように悪いのか、と言われればコテツはこう答える。

大雑把過ぎる、と。

目盛りの少ない定規のようなものだ。ディステルガイストが先ほど行った大剣を受け流す動作も、絶妙な角度と力で受け止めることによって成立する。

だが、アインスではそうはいかない。四十二度で受け止めるべき手首の角度が、五度刻みでしか受けられず、四十五度ないし、四十度で受け止めてしまう。

些細な違いであっても、エースの操縦は常軌を逸した繊細さを持つ。致命的なのだ。

しかし、大雑把であることは、悪いことでもない。

大雑把と簡単であることは、概ね似ている。つまり、操縦が簡単である。

更に、機体の反応に微妙なラグがあるということも、微細な違いだが、初心者が焦らずにすむ。

「まあ、アインスでの訓練も続けることになるだろうが」

「ご、ご主人様の浮気モノ！」

対するディステルガイストの操作性だが、非常に繊細で、感度が良い。

逆に言えば、少しの誤差が操作ミスになる。

だが、パイロットの操縦をそのまま現実を起こすことのできるこ

の機体であれば。

『行きます!』

振り下ろされんとする大剣、振りあがる腕。

その腕の下へと姿勢低く入り込み、そして、真上へ蹴りを放ち、大剣を弾き飛ばす。

『なっ!』

そのまま、蹴りの勢いで飛び上がったディステルガイストが更にもう一方の足で、シユティールフランメに回し蹴りを放つ。

こんな芸当も、可能だ。

「……仕留めたと思ったが」
『舐めないで頂きたいですね、コテツ。私も以前のままではないということですよ』

ただし、完全に崩れた体勢へと叩き込まれた足は、シユティールフランメへダメージを与えることはなく。

半透明の、薄い緑の板に、阻まれている。

「防壁魔術、という奴か」

『先の盗賊への無様な敗北からも、得るものはあったという事です。避ける、ないしは大剣で防げばいいというのが持論でしたが、もしもの盾は必要です。手に持たなくていいなら尚更良い』

「無様でもあるまい。君が生きて、二の轍は踏むまいと思っている以上は、君は負け犬ではない」

『そうですか……、では死んで負け犬になるわけには行きませんかね』
『っ』

半透明の板が割れると同時に、クラリツサは大きく後ろへ飛び退いた。

再開された回し蹴りが空を切る。

そして、シュティールフランメは、落下してきていた大剣を掴むと、油断なくそれを構えた。

対峙する二機。

『そう言えば貴方は、今度依頼に出るそうですが』
「ああ」

依頼。予定通り、貴族の護衛だ。

娘と共に、王都の舞踏会に参加し、しばらく滞在していたそうだが、帰りの荷物が増えたと同時に、馬車も増えて護衛が足りなくなっただそう。

ということで、自分の領地まで一週間ほど、護衛を増やすことになった。コテツは、その中の一人として既に登録されている。

『どれくらい？』

「片道一週間。着いた街も少し見るべきだと思っているから、大体二週間ほどになるか」

『……そう、長いですね。しかし、大丈夫なですか？ コテツ。初めての旅にそのような長い依頼を選んで』

振るわれる大剣を次々といなし、逆に押し返しながらコテツは答える。

「一人で行くわけではない、問題ではないだろう」

『そうですか。ところで、出発は？』

「明日だ」

『……早いですね、コテツ。……まあ、せいぜい頑張りなさい』
「そうさせて貰おう」

瞬間、コテツの刀が、クラリツサの大剣を再び弾き飛ばす。
地面に突き刺さった刃が、鈍く、光を放っていた。

翌日。

コテツは王都の外、門の前に立っていた。

「貴方が、依頼を受けてくださる追加の冒険者の方ですか？」
「ああ」

発車を待つ馬車が四と、冒険者と、依頼主直属の兵士の姿がいくらか見える。

そんな中、コテツの前に立つのは白髪交じりの背の高い紳士だった。

「……ふむ、大丈夫ですか？ まあ、さほど危険な旅路になるわけではないのですが……」

言いつつ、紳士、依頼主である、リヒャルト・イクールはコテツ達を一瞥して、言葉を濁す。

コテツ、あざみ、リーゼロッテと、女性の多い面子を心配しているかと思われるのだが、そんな視線に、言葉を返したのはコテツではなく、あざみだった。

「大丈夫ですよ。ご主人様はエトランジェなのですから！ そして、私も魔術が使えますし、リーゼロッテ……、その彼女もまた、亜人の身体能力を持っています」

果たしてそう簡単にエトランジェであることを公言していいのか、迷っていたコテツだが、あざみの態度を見るに問題ないらしい。

まあ、確かにエトランジェとして名前を売るべきなのだから、当たり前なのだが。

しかし、そのあざみの言葉によって、リヒャルトはコテツ達を見る視線を変えた。

「確かに、ギルドの紹介ではコテツ・モチヅキとありましたが、これが、今代の……！ ……最優の名を継ぐに相応しい方なのですか？」

最優の名。コテツには理解できないワードが、驚愕気味のリヒャルトの口から語られる。

が、あざみもリーゼロッテも表情を変えないことを見るに、どう

やら広く知れた単語らしい。

だから、コテツもこの場で反応することもなく、ただ、話が進むのを待った。

「ご主人様なら、最優よりも、最強の方が素質があるでしょうね。ええ、私を使いこなせる以上はそれくらいになって貰わないと困りますんで」

「ほほう、それは頼もしい限りで……」

あざみの言葉に、リヒャルトはそう言っただけで笑みを見せた。コテツは話に入っていけず黙っているし、リーゼロッテもまた、傍に控えているだけだ。

「では、よろしくお願いいたしますよ、エトランジェ殿。ああ、それとこれは、個人的なお願いなのですが」

「なにか？」

笑顔で、あざみが応対する。コテツは既に口を開くことを諦めた。自分が下手なことを言うよりも、あざみが対応したほうが確実であるとの判断だ。

「どうやら、皆様年若いようですし、娘を気にしてやっていただきたいのです」

「娘さん、ですか？」

「無論、無理にとは言いませんが、大人に囲まれての一週間の道のりは息が詰まるだろうので」

「ははあ、なるほど、いいですよ。機会があれば娘さんとお話でもすればいいんですね？」

「ええ、そうですね。娘にとってもいい経験になるでしょうし」

どうやら、そういうことらしい。年若い、というよりも、コテツ以外の女性メンバーの方にこの言葉は向けられているのだろう。

それに、若く見えるがコテツは三十を超えていたりもするのだし。

「それでは失礼します。荷物のほう、よろしくお願いしますよ」

「はい、お任せあれ。無事に着かせて見せますよ」

頼もしいあざみの言葉に満足したのかにこやかに、リヒャルトは去っていく。

それを見送って、コテツ達は自分の担当の馬車へと歩き出した。

「……ふむ、視線が痛いな」

そんな中、コテツはそう漏らす。

先ほどから、コテツは周囲を歩く冒険者の視線を感じていた。

まるで、品定めするような、ねっとりとした視線だ。

「それはそうですよ。コテツさんは、今みんなの注目の的ですから」

居心地悪そうにするコテツに、そう言って苦笑したのはリーゼロットだ。

どうやら、そうらしい。コテツの名前は召喚当時から広まっているが、コテツの顔を見た者は少ない。

そこでエトランジェのワードの一つでも出れば、真贋関わらず注目を浴びるというものだ。

「噂になってますよ、街では、そのう、三メートルの大男とか、腕が凄い長いとか……」

「コクピットに入りきるのか、それは」

複雑そうな表情でコテツは、馬車の中を見た。

中身は聞いた通りの追加の荷物だろう。思うに、舞踏会で送られた贈答品の類だろう。上等な包装に包まれた箱が並んでいる。

「私たち、どこで寝ればいいんでしょうねえ……」

そうして、馬車の中を見てのあざみの第一声がこれだ。

三人、馬車で待機する分には問題ないが、寝るスペースはあるのかどうか。

「まあ、一人分くらいのスペースはあるだろう。最悪、俺とあざみはコクピットで寝ればいい」

「わ、私だけ馬車でなんて寝れませんっ」

「俺としては、コクピットの中の方が快適なのだが」

コクピットは人が寝るように造られてはいないのだが、仕事とあらば、コクピットから何日も降りずに戦い続けるのがコテツの世界の兵士だ。

むしろ、慣れない馬車とコクピットであればコクピットの中のほうが落ち着くとさえ言える。

「あー……、私もエーポスですしねえ……。恥ずかしながら、操縦席の方が落ち着くんですよね……」

そして、困ったように呟くあざみ。

ただ、その辺りについては、コテツは樂觀していた。

深刻そうでもなく、いつも通りの口調で口を開く。

「まあ、寝る際は馬車を止めての野宿かもしれん。余り心配する必

要はないだろう」

「そう……、ですか？」

心配げに見つめてくるリーゼロッテに、コテツは頷きを一つ返す。

（まあ、いざとなればどうにでもなる）

そうして、その話を終えたこととし、今度は彼は、疑問をあざみへと向けた。

先ほどの、会話についてである。

「それより、ところでだが、先ほど最優というワードが聞こえてきたが、一体なんだ」

最優。エトランジェに関する言葉なのだというのは分かったし、予想も付くが、自分に関係することである。

聞いておかずにもいられなかった。

問われたあざみは、考えるようにしながら、口を開く。

「先代の……、まあ、通り名みたいなものですかね。歴代で最も優れたエトランジェといわれてますから」

「そんなに、強かったのか？」

あざみが皮肉も言わずにパイロットを褒めるようなことは珍しい。そう思ったコテツの問いに、あざみは否定を返した。

「まあ、独創的な人でしたけど、彼より強かった人は沢山います。だから、最強じゃなくて最優なんですよ」

最強ではなく、最優。強さではない所で、先代は優れていたとい

うことか。

黙りこくつて、コテツは次の言葉を待った。

「彼を、最優足らしめる要素は、彼のエトランジェ観にあります」

「……エトランジェ観？」

「そうですね……、あるエトランジェは言いました。”エトランジェは剣である。硬きものを切り裂く名剣だ。”また、あるエトランジェは言いました。”エトランジェは槍である。誰よりも前に立つ、戦場の一番槍だ。”まあ、このように例えには武器や防具が多いのですが、先代はこう言ったのです。”エトランジェは旗だ。決して倒れちゃいけない国の旗だ。”と」

つまるところ、エトランジェという存在をどう捉え、どのように動いていくか。それはエトランジェによって千差万別なのだろう。

その中で、先代の出した答えは、誰よりも秀逸だったということだ。

「彼が召喚されたのは、紛争に、他国との戦いもある戦乱の時代。その中で、彼は何よりも戦場に立ち続けることを優先したのです」
「なるほど、だから旗か。エトランジェの存在は味方の士気に影響を及ぼす、ということだな」

コテツの世界のエースもそうだった。敵味方にエースがいればその戦いは五分。味方のエースがいなくなれば絶望、味方にだけエースがいれば、勝ったも同然。

だから、エースは撃墜されることは許されず、相手のエースを倒すのが義務だった。

「はい。一人で戦局を変えることよりも、決して落ちず、一騎打ちとなれば必ず勝ち、決して功を焦らず深追いせず、戦線を支え続け

るのが彼のあり方でした。彼が戦時中に撃墜された数はゼロ、機体に受けた損傷は両手の指で足りると言います。まあ、多少誇張はありますが」

つまり、ひたすら安定を重視し、味方を鼓舞し続けることこそがあるべき姿だと、先代は判断し実行した。

「そのおかげで、どのエトランジェよりも戦術的勝利を収め続け、最優の名を手に入れたのですよ。先代は」

と、そこまで説明されて、コテツはリヒャルトに向けられた視線の内容を、本当に理解した。

「なるほど、それ故に俺に向けられる視線も相応になる、ということか」

先代が優れていればいるほど、今代への視線は厳しいものになる。今の所魔術も使えないコテツが持つのは、己のパイロットとしての腕、ただ一つ。

なのだが、安心させるように、あざみは笑った。

「大丈夫ですよ。ご主人様は、最優にはなれなくても、最強の素質がありますから」

「だいたい」

「そうじゃないと私が困りますよう。まあ、ご主人様もいつか、答えを出すことになるでしょうし、そのときにはきつと」

いまだ、答えの欠片も見つかっていないが、果たして、コテツは先代に追いつけるのか。

（考えても仕方がない、か）

いつかはいつかだ。今ではない。

そう考えて、コテツは一度、馬車から離れた。

出発まで、今しばしある。もう少し経ってから、という依頼主の言葉なので、依頼主が行くといえばすぐさま行かねばならないが。

しかし、コテツの体感で十分ほどは猶予があることだろう、と彼は判断した。

「ねえ、ねえ、その人」

そして、歩いて数秒。コテツが一人になったのを見計らったかのように、女の声が彼に掛かった。

「何か用か」

前から歩いてきたのは、コテツと同じ、冒険者。こちらは、元々いた護衛団の一人なのだが。

ぶつきらばうに返したコテツへと、彼女は唐突に妙な質問を寄越してきたのだ。

「貴方は、どちらに付くの？」

コテツには、意味の分からない、何かを。

（……どちらに？ 異世界用語か？）

意味が分からない、ということはこの世界特有の言葉なのか、と戸惑いは表に出さず、心中首を傾げるコテツを余所に、女は続けた。

「だから、お嬢様と、依頼主、どちらに付くのかって言うことよ」

コテツは、考える。

どちらに付く、ということは、お嬢様とやらと、依頼主が対立している、ようである。

依頼主はリヒャルト、そして、お嬢様は多分その娘だろう。そのどちらに付くのか、聞いているのだ。

（派閥でもあるのか……？）

下手な返答はできないと判断し、コテツは正直な答えを返す。

「すまない、意味が分からない」

すると、女は目を丸くした。

「え？ 何も知らずに来たって訳？」

まあ、少し情報が知れた。どうやら、この件について、コテツ以外は大体何か知ってるようだ。

が、未だに情報は少なすぎる。

「ああ、俺はただの荷物の護衛だ。それ以上のつもりはない」

それ事実だけを簡潔に告げ、コテツはそれ以上の言葉を言わずに女を見守った。

長く青みがかった黒髪を一つに束ねた、旅衣装の女は、納得したように、天を仰いだ。

「あーあー、なるほどね。そっか、じゃあ、変なこと聞いたわね。忘れて」

「とりあえず、中立ということにしてもらえるか」

「わかったわ。ええ、できればこちらに付くか、そのまま中立貫いてくれればうれしいけど」

そう言っ、女は歩いて去っていく。

(……一体、なんだ?)

どうもききな臭い感じに、初めての旅は始まった――。

24話 ストレンジスタート（後書き）

えー、お久しぶりになってしまいました。更新再開です。

が、誠に申し訳ありませんが、今回は多少なりとも書き溜めてから推敲して投稿します。

とりあえず、三丁五日に一回くらいで、完成したら毎日行きます。できれば、ご了承ください。

とりあえず、今回は04プロローグということで。
お約束的に護衛クエスト入ります。

25話 お嬢様と異邦人

旅は、今のところ順調に進んでいる。

出発前の不穏な空気はどこ吹く風、問題らしい問題は未だに起きていない。

「あざみ、バルディッシュを頼む」

「はいどうぞー」

現れる野生動物もまた、野犬や狼程度である。

現在コテツは、魔物と対峙してはいるのだが、前回会ったブラン・サンジュとは比べ物にならないほど小さい。たまに会う魔物すら、その程度だ。

狼を一回り大きくしただけのそれは、吠え立てて、コテツへと迫っていく。

対するコテツは、あざみが何もない空間から取り出した、斧に似た大型の刃を持つ鉾、バルディッシュを掴んで構える。

このバルディッシュは、コテツが再度選び直した、真面目に選択した武器だ。それにもう一本、腰にある何の変哲もないロングソードが、コテツの装備。

前回の反省点を生かした組み合わせだ。

取り回しやすいメインウェポンにロングソードと、強度と打撃力を求めた、バルディッシュ。2.3メートルの全長に、柄の半ばから90センチの刃渡りを持つ、武器屋に死蔵されていた品。

剣だけでは、大きな相手には向かないと判断した結果だ。

武装の重みや大きさと言った点は、ディステルガイストを呼び出すときのよう、あざみが転送してくれるので、不便でもない。

「便利なものだ」

呟きながら、コテツがバルディッシュの柄を跳ね上げ、その柄尻は、あつさりと魔物の顎を捉える。

魔物である狼が悲鳴を上げ、首を仰け反らせ、そして、怯んだ魔物の頭に、真つ向からコテツはバルディッシュを振り下ろした。

切った、というよりはかち割った、というのが正しいだろうか。

巨大な刃は魔物の頭蓋を踏み砕き、脳髓を縦に割って、地面と熱い口付けを交わす。

飛び散る紅がその唇を朱に染め上げ、刃は地を離れた。

「向こうも、適当に対処しているようだな。手伝いは必要なさそう
だ」

魔物の死を確認して、コテツは刃に化粧された紅を布で拭き取った。

進行方向の奥の馬車付近では、まだ戦闘が続いている。

が、支援が必要になることもないだろう、とコテツは判断し、街道に邪魔な死体を脇へと転がした。

周囲には、狼がちらほらと倒れている。全て、コテツのロングソードで切り倒したものだ。魔物だけ、ロングソードでは不利を感じたのでバルディッシュに切り替えたのだが。

ちなみに、あざみもリーゼロッテも手を出さなかったのは、ロングソードとバルディッシュの試運転のためだ。

結果は、この通り、上々だ。

「どうです？」

そして、そんな中後ろからあざみの声が掛かって、コテツは振り

向いた。

そのまま、バルディッシュをあざみの手に預ける。

「上々だ。これなら、先日のブランサンジュ相手でも手傷は負わせられるだろう」

「それはよかった。まあ、でもあんまり無理しないでくださいね？」

あざみは、手品でもするように、何もない空間へとバルディッシュを仕舞い込んだ。

「ああ」

心配の言葉に対し頷き、コテツは馬車の中へと戻る。

「あつ、おかえりなさい、お疲れ様ですっ」

すると、今度はリーゼロッテがパタパタと走り寄って来て、白いハンカチを取り出して見せる。

そして、すぐさま彼女はコテツにそのハンカチを近づけた。

「怪我とか……、ないですか？」

「ああ、大丈夫……、なんだが」

どうやら、コテツの頬に血が付いていたようである。彼女のハンカチが優しくコテツの頬を拭っていた。

「些か……、恥ずかしいと思う」

「あ、動いちゃダメですっ」

一歩後ろに下がるコテツと、背伸びまでして彼の頬を拭うリーゼ

ロツテ。

それだけならよかったのだが、コテツにとって不幸は重なり、突如、足場が揺れた。

「ひゃわっ!？」

「むっ」

果たしてなにに引っ掛かったか。動き出した馬車が大きく飛び跳ねた。

そんな突発的アクシデントにコテツは、一歩後ろに下がって体勢を立て直した、のだが。

「わふっ」

背伸びまでしていたリーゼロツテは、立ったままではいられなかった。

彼女は前のめりに倒れこみ、その顔をコテツの胸に埋める。

「ご、ごめんなさいっ」

「いや、事故だ、構わない」

慌ててリーゼロツテは顔を離す。

そして――、唐突にその顔を赤く染めた。

「こ、こてつ……、さん」

「なんだ？」

はたして一体どうしたのだろうか、とリーゼロツテの表情を覗き込むコテツへ、彼女は言った。

「その……、手が、えと……」

すごい勢いで、耳がぴくぴくと恥ずかしげに動いている。

コテツは、言われるがまま、自分の手の状態を確認した。

右手は、彼女の背に。左手は、彼女が倒れこむ衝撃を和らげるため、クッション代わりに巧く動かしたのだが。

問題は、その左手である。

左手にある、柔らかい感触。それは一体どこを触っているのか。

「すまん……っ」

思い切り、コテツの左手は、彼女の胸を、鷲掴みにしていた――。

コテツは慌てて手を離す。リーゼロッテは、恥ずかしげにくるりと後ろを向いた。

「えっと、その、いいんです、め、メイドですからっ……！」

メイドだから一体なんだというのか分からないが、どちらにせよもう、納得するしかない。

追求しても、やぶ蛇にかなりはしないのだから。

そうして、あわや気まずい空気になりかける。

の、だが。

その空気を打ち破るというべきか、空気が読めないと言うべきか。

「あー！ ちょ、ちょ、ちょ、ちょっと待ってくださいよ！ 私にもしてくださいよそういうの！」

あざみだ。

コテツ達の方を指差して、あざみは悲鳴のような声を上げた。

「何を言っているんだ君は」

「なんでリーさんとイベント起こしてるんですかー！ やだー！」
「……」

コテツ、思わず黙る。

あざみ、構わず喋る。

「私とも起こしましょうよイベント、ねっ。間違いつかも起こしましょうっ、揉んだり吸ったりしていいですから！」

「揉まないし吸わない、遠慮しておこう」

「おおっと足が滑りました！」

そして、暴走は止まらず、跳躍してコテツへとダイビングを敢行するあざみを、彼はひょいと避け、地面や壁に当たらないように、服の襟を掴んでその動きを止めた。

そうして、コテツの手からぶら下がる形となったあざみが不満そうに声を上げる。

「……ご主人様はいけずです」

その呟きをコテツは黙殺した。

と、そんな折、馬車の揺れが止まる。

そして、停止してから、動く気配を見せない。

「止まったのか？ 一体何故」

その言葉に答えたのは、リーゼロッテだ。

「多分、ここで野営の準備をするんだと思います」

「む？ まだ昼だと思っが」

この世界の人間はあまり時間にこだわらない。

一応、時間は定義されているし、SHに乗れば正確な時間も分かるのだが。

しかしながら、時間が定義されても、時計が普及しなければ意味がない。

街を探せば中心部に大きな時計があり、アマルベルガも懐中時計のようなものを見せてくれたこともある。小型のものは高いのだとか。

それ故、限定された場所か、はてまた金があれば時間が確認できるのだが、いかんせん個人の一人一人まで、同じ時間を共有することはできないのだ。だから、この世界の人間は時間に対しあまりこだわりを見せない。

しかしながら、いくら時間に大雑把な部分があるとは言えども、まだ夕暮れまで二―三時間あるというのにこれでは疑問が残る。

その疑問に言葉を返したのは、いまだぶら下がりっぱなしの相棒だった。

「あと少し進んだら、森に差し掛かりますからねー。あれですよ、森の中を完全に手入れするわけには行きませんし、魔物も結構いるわけです。だから森で野宿はしたくないんですよ」

「ふむ、そうか」

あざみが言うにはどうやら、これから向かう森とやらはそれなりに長いらしい。少なくとも、今から日が暮れるまででは抜けられない程度には。それならば、ここで一度止まるというのも頷ける話だ。そして、そうならば、少し馬車を動かしたのは魔物の死骸から遠ざかるためであろう。

血の臭いに誘われて獣が集まるなど、如何にもありそうな話である。

「と、すれば野営の準備か。俺達はどうすべきか」

「んー、基本アレですよ？　することあったら向こうから言ってくるもんですし、私達は私達が寝るための準備をすべきでしょう」

「えと、食事は個人でなんでしょうか。食材と器具もあるんで、作れるんですけど」

「そうだな、少し依頼主に聞いてくるか」

コテツは、言いながら、馬車の後ろの幕を開けて外に出た。

「今日はここで野営か？」

「ええ、そうなるでしょう」

そして、御者に問えば、予想通りの回答。

「わかった」

「どちらへ？」

「依頼主に会ってくる」

「了解です。ではお気を付けて」

御者に了解を得て、コテツは、中間の馬車まで歩いていく。

丁度良く、そこには、馬車から降りようとするリヒャルトの姿があった。

「おや、どうしましたかな？」

「今日はここで野営か？　それと、旅に出る前に確認しておくべきだったのだが、食事は」

「ええ、そうですね。食事は各自でお願いします」

「そうか」

頷いて、コテツは一つ反省した。旅の予定くらい事前に聞いておくべきことだ、と。

簡単に、当然なことだが、しかし、上手く思いつかなかった。考えて見れば、戦える戦えないはともかくとして、三人とも、この世界の旅については素人と言ってもいいのだ。

（学ぶべきことは多いか。でなければいつか痛い目を見そうだ）

まあ、それはともかくとして。一応の所、必要なことは知れた。野営と夕食の準備をしなければならぬ、と二人に伝えに行くべきだろう、とコテツは踵を返す。

そんな折、コテツへと、リヒャルトが問いを投げかけた。

「そういえば、私の娘を見ていませんか？」

「娘？ いや、心当たりはないが」

問われて、コテツは首を傾げてみるが、ここまで歩いて来るに当たって、女性の影すら見ることはなく。

「そうですか。いえ、うちのお転婆娘の姿が見えないもので。すぐどこかへふらふらと行ってしまふ娘なのですよ」

「そうか」

「まあ、遠くには行ってないでしょうが」

「見つけたら報告しよう」

「お願いします」

そもそも、その娘とやらがどんな外見かも分かりはしないのだが。しかし、見れば分かるだろう、とコテツは判断した。

冒険者の中に貴族の娘とあらば、どう頑張ったとしても異彩を放つだろう。そういう考えだ。

「ふむ、ともかく、一度馬車に戻るか」

まあ、見つけたら報告するとは言ったが、探すとも言っていない。そう考えてコテツは、今一度馬車へと戻ろうとする。そんな中、ふと。

「……む？」

ふと、振り向いた森の奥。人影が――、動いた気がした。

「……行つて見るか」

即断即決は戦場の常。そして、こういった細やかな可能性を潰しておくこともまた、生き残る方法の一つだ。

別に気のせいで、実は近場をリヒャルトの娘は歩いているかもしれない。

だが、そうなったときはそうなったときだ。一風変わった散歩を楽しんだと思えばいい。

これが、万が一の可能性に引っかけってしまった場合は、取り返しつかないことになってしまうのだ。

だから、コテツは勘に任せて森の中へと入っていった。

「これで森に入るのは二度目だが……、大丈夫か」

伐採され、整地された街道を外れ、木々の間に身を入れると、途端に光は薄くなる。

鬱蒼とした森の中、警戒を深めながら、コテツはその足を踏み出していった。

「周囲に生き物の姿はない……、か」

森や山といった場所は、魔物や野生動物が多い。

森という性質上、危険な動物の駆除がし難いのだ。

それならば、すべて伐採して更地にしてしまえ、という言葉もあるのだが、自然保護のためそうも行かない。

自然環境の保護は、歴代エトランジェ全てが同じことを唱えたと言っ。

（確かに、豊かな自然は財産だろう）

コテツの世界で宇宙に上がれば、途端に地球の緑が恋しくなる。

宇宙に存在するのは、人工の自然などという、一皮剥けば鉄色が見える何かは、酷く不自然で嘘くさいものだ。

それに、コテツの関わった戦闘だって、地球の資源を食い潰しかけていたから、というのが発端のひとつでもあった。

大なり小なり、エトランジェの世界と言っのはそういうものだったのではないかと、コテツは推測している。

（大型機動兵器のある世界……、先代はどうだか分らんが、それほど時代となれば、自然と共存している方が妙だ）

だから、エトランジェは皆口を揃えて言っのだろう。

『自然は大切だ』と。

（しかし、実際にその渦中に身を置くと、バランスの重要性を感じるな）

だが、いかに自然は大事だといっても、自然は人を殺す。

魔物然り、災害然り、だ。

（結局、欲しいのは人類に都合の良い自然で、その答えのひとつが、俺の世界の人工の自然、ということか）

考えつつ、コテツはしばらく歩く。

が、気配のようなものは感じられない。

気配。人であればどうしても放つ、獣とは違う異質な足音、衣擦れ、息遣い、そして、勘。

そのどれもが、コテツの感覚に引つかからない。

（あまり進みすぎるのも問題か？）

ミイラ取りがミイラに、というのはあまり洒落にならない。

いかにコテツの身体能力が高くて、知らない生物、それも魔物と言う更に多様性を持つ生物とあつては、涼しい顔で対応できるに限らない。

戻るべきか、とコテツが考え始めた頃。

「……む」

自然の中に似つかわしくない甲高い音が響く。

その音は、ここに来て聞きなれた音——、剣を振るった音だ。

「これは……！？」

戦闘の気配を感じ、コテツは歩く速度を速めた。

そして、早歩きから駆け足に。

近づけば近づくほど、獣の唸りが聞こえてくる。

剣を打ち付ける音もだ。

コテツは確信した。

間違いなく、何者かが戦闘を行っている。

「……しかし、娘とやら、ではないのか？」

コテツ的には、貴族の娘と戦闘というものが結びつかない。今まで政府や軍の高官の娘に会ったことがあるが、その内のほとんどが淑やかで気品のある者たちだった。

それこそ、肉刺^{まめ}とは無縁の手をした女性達だった。

の、だが、コテツの疑問はそこでいったん打ち切られることとなる。

「いやあああああああ！！」

絹を裂くような、高い悲鳴がコテツの耳に届いたからだ。

「急ぐべきか！」

駆け足は全力疾走にシフト。勢いのままにコテツは森を踏破していく。

そして。

「……そこか！」

見つけたのは、少女と、魔物。

少女は謎の木の枝に絡め取られて身動きが取れず——、少女の眼前で、狼が口を大きく開いている。

それを見たコテツは、迷い一つなく、大きく踏み込んだその右足で、更に前へと踏み切った。

果たして冒険者に必要なモノとは、一体なんだろうか。

リヒャルト・イクール伯爵の娘、エリナ・イクールは『力である』と答える。

ソレが正解であるかどうかはともかくとして。

エリナは、ソレが自分にあると、勘違いしていた。

「甘い、です」

淡い桃色の長髪。その側頭部には二つのリボンが結ばれており、リボンに括られた部分の髪が、本来の髪に迎合しながらも違った動きで揺れる。

彼女は、なるほど、およそコテツの知るとおりの政府の高官の娘にありがちな、可憐な少女であつた。

小柄な体躯に、愛らしい大きな瞳と、白い肌。

袖のないブラウスに、紺のホルセットと、ふわりとしたスカート。太ももまでを覆うニーソックスに、濃い茶のブーツ。

違和感があるとすれば。

手に持つ湾曲した細身のサーベルだろう。

刃を煌かせた、鋭い一撃が、狼の首を深く傷つける。

彼女は、六の狼に囲まれていたが、一切の焦りはなかった。

「甘い、と言ったのです」

飛び掛る狼へ、再び刃が煌いた。

仕留め切れはしなかったが、胴に切れ込みを入れられた狼は、痛みに喚いて地に落ちた。

それを見て取った狼達は、相手の強さを悟ったのか、一斉に飛び掛る。

「く……」

苦悶に顔を歪めるようにしながらも、エリナは剣を振るった。

まるで舞うように、鋭く。

そして、歌うように言葉を紡ぐ。

「略式詠唱。紅く染まれ、です」

瞬間、狼の一匹が発火した。

大きく吼え、暴れまわりながら、やがてその狼は地に伏すことになる。

これが魔術。その中でも、自分の中にある内在魔力だけで執り行う、内成魔術だ。

これの特徴は、とにかく早いこと。

剣を振りながら、魔術も使う、言わば魔法剣士とも言える彼女にぴったりの魔術である。

「手順をトレース、リブート！」

今一度、今度は別の狼が燃え上がった。

その狼は、大きく吼えて飛び掛ってくるが、破れかぶれの攻撃な
どものの数ではない。

鋭く光る刃の一撃が、狼に致命傷を負わせ、叩き落とす。

エリナは、残る四匹の狼達に、一步、二歩と下がりながら対応し
ていった。

こういった戦いにおいて気をつけるべきは、背後である。上手く
後ろに下がり、背後からの攻撃さえなければ、たとえ相手が数で勝
つていてもエリナの速度であれば迎撃が可能となる。

そのようにして、エリナは優勢を保っていた。

「う……、く」

だがしかし、やがて、どうにか狼を群れのリーダーである魔物の
狼だけに減らしつつも、エリナは顔を歪めた。

狼の爪と、サーベルが噛み合い、二歩三步と、エリナは後ずさる。
確かに、エリナの剣は速い。野生動物ですら切っ先を見切れない
ほどの速さを持つ。エリナはその剣技に絶対の自信を持っていた。
が、しかし。

軽いのだ。決して彼女の剣技は、重いとは言えない。

軽くて速い剣。対人の稽古でなら、これほど適した剣技もない。
しかし、これは実戦。相手に致命傷を与えねば勝ちにならないの
だ。

「そこですっ！」

振るえども、振るえどもその刃は深手とならない。

そして、得意の発火魔術も、魔物の魔術抵抗^{レジスト}によって防がれてし
まう。

ならばと思つて幾らかの魔術を試すも、毛皮に少しダメージを与えるだけで、威力が足りない。
更に。

一方的に攻撃してる間はいい。だが、一度攻撃が打ち合えば、あっさりと力負けしてしまうのだ。

「くう……！」

少しずつ、エリナは後ろへと下がっていく。

こうなれば、後は持久戦だ。

お互いに削りあい、擦り切れるのを待つ。

じりじりと、にらみ合いながら、エリナはまっすぐにサーベルを構えた。

そして、ここで覚悟を決めた。

「来なさいっ、受けて立つのです……！」

だが。

「……え？」

しかし、その覚悟は無駄となった。

違和感は、背後から。

伏兵か、いや違う。

——罠だ。

四肢が、木の根に、枝に、絡め取られていく。

「捕縛樹！？」

捕縛樹。そう呼ばれるのは、植物の魔物の一種。見た目は、何の

変哲もないただの木だ。

特徴は、テリトリー内に入った生き物を根や枝で拘束し、養分を吸い取ること。

それ自体は、あまり脅威ではない。

養分を吸い取るスピードはあまりにも遅く、また、よほど育ったものでなければ複数の人間を絡め取ることもできない。

仲間がいれば、あっさりと救出されるし、一人でも魔術であつさと焼き尽くされる。更には、他に気を取られていたエリナのように無抵抗でしつかりと四肢を捕まえられさえしなければ、多少の膂力で引きちぎれる。

「う……、あ」

だが、この状況において、これほど有効な一手もない。狼が、近づいてくる。

「りゃ、略式詠唱！ 穿て！」

唱えるが、何も起きない。これは、外的要因などではない。まるつきり、発動していないのだ。

エリナが、冷静ではないから。

魔術とは、唱えればいいというものではない。呪文は脳の関連付けによる起動キーのようなものであり、実際に発動を行うのは脳内の演算だ。

たとえ如何に起動の命令を行っても、演算を行う部分にノイズが走っている、ともに発動できるわけもない。

本来の魔術師は、反復練習で脳に染み込ませ、慌てていようが条件反射のレベルで魔術が使えるようになるものだが、しかし、エリナはまだ若く、その領域に達していない。

そして、魔法剣士という戦闘スタイルの問題でもある。

「手順をトレース、リブート!!」

魔術も剣術も一生を掛けても中々極めきれないものだ。そのようなものを同時に追いかけるのは非効率。

故に、魔法剣士はどちらかをメイン、どちらかをサブに定めるしかない。

そしてエリナは、剣術へと傾倒していたのだ。

つまり、魔術師としてはほとんど初心者なのだ。

それを証明するかのように、何を唱えても、何も起こりはしない。

「っ……!!」

そして、魔狼が、エリナの前に立ち止まる。

（笑ってる……）

舌なめずりして、狼は牙を見せる。

それが、エリナには笑ってるように見えて仕方がなかった。

いや、気のせいではない。この魔狼は笑っている。

この狼には、知性があるのだ。馬鹿な人間を罠に引っ掛けるだけの。

（元々、ここに追い込もうと……）

まるで、してやったりとばかりに狼は笑っていた。

この状況は、狙った通りだと。

そして。

——大きく口を開く。

「い、いや」

声は、無意識に出ていた。

「いやあああああああ！！」

狼は、怖がらせるようにゆっくりと。

見せ付けるように。

少しずつ、その首に食らい付かんとする。

その狼の吐息が聞こえて、エリナは震えた。首元や鼻先に感じる、吐息の微風すら、恐怖の対象だった。

怖くて、仕方がなかった。

狼ごときが何するものぞ、と思っていたのだ。

簡単に生きて帰れると思っていた。

調子に乗っていたのだ。

そして、もう絶望するしかない。

男ならば、引きちぎれたかも知れない枝も、エリナではびくともしない。

だから、エリナはその狼を、震えながら恐怖のままに見つめることしかできなかった。

そして。

唐突に、狼は伏せた。

「ひうつー！」

一体何をされるのか、とエリナは恐怖にさらに驚愕を加えたが、違った。

違った。

男が、ずどん、と大きな音を立てて、宙から降ってきたのだ。

「……無事か」

響いたのは、酷く冷たく、冷静な声だった――。

「ふえ……？」

そう、男だ。男が見える。

軍服を着た、黒髪短髪の男だ。

その男が、跳躍の着地と共に、狼の頭を踏みつけたのだ。

そして、そのまま、男は狼の頭にロングソードを突き立てた。

何が起きたかも分かっているだろう、狼は、そのまま命を失った。

「その木の枝のようなものは切っても構わないな？」

心中、驚き、慌てふためくエリナとは対照的に、冷静に男は問う。

エリナは、想定してなかった質問に、上ずった声を返した。

「は、はい、お願いするです！」

「了解」

男が答えると同時、ロングソードが振るわれ、枝と根が切り裂かれる。

四肢が自由になり、やっと動けるようになったのだが、エリナは思わず尻餅を突いてしまった。

男は、そんなエリナに手を差し伸べる。

「怪我はないようだが、大丈夫か」

エリナは、惚けたように、コテツを見ていた。

別に、依頼に軍人と言うものは珍しくはない。

休暇中に小遣いを稼ぐ兵士は結構いるし、状況に応じて兵士が依頼に貸し出されるというのはよくある話だ。兵士全体が、ギルドに登録してはあるのだから。

しかし、なぜだか。

エリナには、目の前の男が物語の騎士のように見えて、仕方がなかった。

「……？ 大丈夫か？」

「ふえ？ は、はい、大丈夫なのです」

25話 お嬢様と異邦人（後書き）

完成には至ってませんが、場繋ぎで一話更新。

これだけ行を使っておいて話の展開が遅いのは反省点。

ついでに、今回の旅路で若々しさを補給です。つまりロリ。

というか、主人公三十路、あざみ年齢不詳、リーゼロッテは別に決めてませんが多分十七とか十八とかそんなもんとすると、平均年齢が高すぎる気がしてきました。

そして、誰か代わりにサブタイトル考えてください……、っていうレベルの思いつかなさ。

26話 宵闇不透明

依頼人の娘を救った森の中。

「えっと、私の名前はエリナ・イクール、といいます、です。依頼人の、娘です」

「コテツ・モチヅキ。しがない冒険者だ」

国のことを思うなら、己がエトランジエであることを吹聴して回るべきなのだが、コテツは結局簡潔に自己紹介を終えた。

コテツ曰く、面倒だった、と。

本当のところを言ってしまうと、この国が滅ぶのは困るのだが、他はさほど興味もない。国への利益など、知ったことではないのだ。拳句に、人付き合いと言うのはコテツの苦手分野。

自己紹介で余計な一文を付けるといわれても、困る。

「コテツ・モチヅキ……、どこかで聞いたような名前、ですが」

そんな、多くを語らぬコテツに、エリナは首を傾げているが、やはりコテツは補足を加えなかった。

エリナもまた、一介の冒険者を詮索することは礼儀に反すると思っただのか、追及はしてこない。

だから、詳しくは語られない。

「助かりました、ありがとうございます」

多くを聞かなかったエリナが、につこりと微笑んだ。

「いや、いい。これも依頼料金の中だ」

「森に一人踏み込んでまで、ですか？」

「そういうことを言うなら自重してくれ。肝が冷える」

「あう、ごめんなさい……。本当に助かりましたです」

「ああ。怪我がないなら問題ない。戻るぞ」

そう言つて、コテツは来た道を引き返す。

その後ろにエリナが付くのだが、コテツは唐突に立ち止まり、エリナが前に出るのを待った。

「どうしたですか？」

「いや、後ろの方が守りやすいだけだ」

呟いて、コテツはエリナの後ろにつく。

今一度、二人は歩き出した。

「しかし、君は、あれだな」

コテツの言葉に、先を歩くエリナが振り返る。

「なんです？」

「強いんだな」

「えと、それは嫌味です？」

「……そんなつもりはないのだが」

コテツは、エリナの言葉に対し、今一度考え直してから、選び直した言葉を口にした。

「いや、俺のイメージとはまた違うと思ったのだが。貴族の娘とは、こういうものなのか」

別に嫌味などではなく、コテツはそこかしこにある狼の死体を見ているのだ。それを見れば、エリナがただのお嬢様で済まないことは分かる。

少なくとも、狼を複数殺せる少女を、コテツは弱いとは言わない。そんな少女は、少しだけ胸を張っていた。

「ああ、確かに、魔術はともかく、剣術を嗜むのは多くないかもしれないですが。私はこの通りです……、と言ってもまさに今未熟を実感させられました」

「いや、十分に強くはあるだろう。些か若いだけだと思うが」
「足りないですよ」

コテツの慰めに、しかしエリナは顔を伏せる。

「このくらいに対応できないと、困るですし……」
「む？」

コテツは、その言葉に疑問を覚えた。

果たして、魔物に囲まれる以上の危機に彼女は日常的に巻き込まれるというのだろうか。

どうにも出発からきな臭いこの旅。お嬢様と依頼主、どちらにいいのか、という質問。

リヒャルトと、エリナを中心に、何かがある。

そこまでコテツは考えつつも、結局現状では蚊帳の外だと断じた。

（無事に依頼が果たせるなら、だが）

首を突っ込むのも、知らぬ間に巻き込まれるのも面倒である。

できることなら事情を知った上で傍観したいものだが。

近すぎず、遠すぎずを保って行くのがベスト。さもなくば、渦中に踏み込んでうまく立ち回るかだ。

（しかし、躊躇っていても、俺ではどうしようもないか）

その考えの下、コテツは覚悟を決めることにした。

常識知らずでは、それとなく情報を集めて、それらを総合して物事を考えるなどできようも無い。

ならば、聞いてしまえ、と。

まずは、少し遠回りしながら。

「所で、女性にこういうことを聞くのはマナー違反だが、君は幾つだ？」

「十三、ですが？」

それとなく、違和感のないようにコテツは探りを入れる。

なぜこんなことを聞くのかと、エリナは不思議そうにしていた。

「いや、たいしたことじゃない」

誤魔化しつつ、コテツは思考する。

（ふむ……？ 十三、か。果たして父と対立するような年齢か？）

順当に考えていけば、彼女自身ではなく、彼女を旗本にした彼女の周囲が対立してるのだろうが、しかし、この世界にコテツの常識は通用しない。

十三ともなれば、権謀術数も当然、という可能性も否定できない。下手を打てば、暗殺の類に巻き込まれかねないだろう。

だが、最悪の場合は、ディステルガイストに乗って、文字通り飛んで逃げればいい。

コテツは、もう一度口を開いた。

「君と父は、対立しているのか？」

すると。

エリナは困ったような顔をした。

まるで、肯定でも、否定でもないなにか。

「対立、ですか……？」

「ああ。少し、気になることを聞いてな」

「対立は、してないと、思う、です」

言葉を選ぶようにしながら、エリナは言った。

コテツは、首を傾げる。新入りの冒険者風情には事情に立ち入らせないということだろうか。

だが、どうも違うらしかった。

「お父様との仲は、悪くありませんです」
「では何故」

何故、あの冒険者の女は父に付くか、娘に付くか聞いたのか。それを問う前に、エリナは答えをくれた。

「えと、私、家を継ぎたくないのです」
「む？」

女が家督を継ぐこと。それ自体はこの世界、少なくともこの国では珍しいことではない。

他に兄弟がいれば別だが、娘しかいなければ、必然、家督を継ぐのは娘である。

「籠の鳥はいやだから、自由になりたい、です。一部の知り合いはそれを応援してくれるですし、一部の知り合いは、私を諭すです」
「だから、二派に分かれるということか」

「はいです。ただの派閥ですから、コテツが心配するようなことはありませんです」

「そうか」

いまだ、少しの違和感を覚えるが、コテツは納得した。

つまり、だ。エリナは家督を継ぎたくない。そんなエリナを応援するのがエリナ派。そんなエリナを諭し、家督を継がせようとするのがリヒャルト派なのだろう。

どうやら、さほど巻き込まれる心配はなさそうだ。二派に分かれているのは継続的なもので、今日明日暗殺が起こるわけではないのだから。

無事、領内まで送り届けばあとはおさらば、それで終わる。

その事実にも、少しの安堵を覚えるコテツだったが。

「エリナ！ 無事だったのね！！」

それは新たな闖入者によって、それは中断された。

長く青みがかった黒髪を一つに束ねた、旅衣装の女。出発時にコテツに意味深な質問を行った女だ。

その女が、道行く二人の前に現れる

「その男は？　なんかされたの？」

駆け込んできた女は、エリナの姿を見るなり表情を明るくしたのだが、その背後のコテツを見て、声を幾分か低くした。

エリナは、誤魔化すように答える。

「あ、いえ、この人は、助けてくれた人ですつ。問題ないです」
「そ、ならよかった」

声の調子が元に戻り、女は警戒を解いてコテツを見た。

「あなたが守ってくれたのね。礼を言うわ、ええと」
「コテツだ」

「ありがとう、コテツ。しかし、コテツ、ってどこかで聞いた名前だと思うんだけど」

「あれ？　ルー、あなたもです？」

どうやら、女はルーと言うらしい。随分エリナと親しげだ。

「随分、仲がいいようだな」

「そうね、幼馴染だし」

気負った様子もなく答えるルーに、コテツは、

（どうやらルーとやはらエリナ側と見ていいな）

そう判断する。

自由を愛する冒険者だからこそ、継ぎたくないというエリナを応

援しているのか。

「それで、エリナ、危なかったの？」

「少し、です。でも、この人が助けてくれましたから」

「あら、やっぱり強いね。見た目じゃわからないけど」

「はい、とつても強かったです。毛皮を貫いて一発で仕留めましたしっ」

へえ、とエリナの言葉に感心したように、ルーはコテツを見た。

「そういえば、あなた、今までどこに隠れてたのかしらねえ？」

「どういう意味だ？」

首を傾げて、顎に手を当てるルーに聞き返すと、彼女は人差し指を立てて、言葉を紡いだ。

「んー、さっき馬車のところで戦ってたのは見たんだけど、手早く片をつけてみたいだし、あんなでっかいバルディッシュ持つてるなら噂になりそうなもんだな、ってね」

「残念ながら、ただの新人だ」

「本当に？」

「ああ」

「ふーん、じゃあ、余程の田舎暮らしだったのね」

「そうかもしれん」

異世界を田舎と呼ぶべきかどうかはわからないが、この世界から見ればずいぶんな僻地だろう。

「コテツの故郷は、どこです？」

エリナに問われ、言うべきか迷ったが、結局コテツは正直に話す。

「日本だ」

「ニホン、です？ ルー、知ってるですか？」

「私にもさっぱり」

肩を竦めて首を振るルー。

「遠くだからな」

やがて、馬車が見えてきた。

もうここでもいいだろう、とコテツは自分の担当の馬車へと向かうことにした。

「もう十分だろう。俺は担当馬車へ戻る」

「あ、はい、ありがとうでした」

二人と別れ、コテツは自分の馬車へ。

「あ、お帰りなさい、随分遅かったですね」

馬車の前で待っていたあざみが、ぱたぱたと駆け寄ってくる。

「少しな。食事はこっちで勝手にということだったが、リーゼロッツテは？」

「今荷物を整理してます。呼んできましようか？」

そう言って後ろを向きかけるあざみだったが、コテツはそれを制止した。

「いや、いい。それよりも君に少し聞きたいことがあるんだが」

「なんでしょ。私のスリーサイズとかですか？ 上から……」

「いや、いい」

「そんなこと言わずに」

「いや、いい」

「……バスト」

「いや、いい」

「……何が聞きたいんですか」

「この一団の中で、何か変わったことはないか？」

コテツが問うと、あざみは怪訝そうな顔をした。

コテツとしては、あまり先入観を持たせたくなかったので、詳しくは話したくない。

あざみは、それを汲み取ってくれたのか、少し考える仕草をした後に声を発した。

「変わったことですか。特には思い当たりませんが、そこはかとなく、この一団緊張感が強いんじゃないですかね」

「そうなのか」

「いえ、そこはかとなくなんですけど。なんせこんな旅に付いてったことありませんし。でも、帰るだけの簡単なお仕事にしては、ちょーっとなんか、ぴりぴりしてるっていうか」

「なるほど、わかった、ありがとう」

「いえいえ、お役に立てませんで」

そう言って笑うあざみだが、十分に役に立つ情報だ。

何せ何もわかっていないのだ。どんな情報も、少しでもほしい。

（しかし、家督を継ぎたくない、か。何故だろうな……）

思いつつも、コテツは一つ前の馬車を眺める。
そこには、リヒャルトとエリナの姿があった。
二人、笑っていて、仲は悪くないように見える。
そんな風に、遠巻きからそれを眺めるコテツに、話しかける声があった。

「貴方が、コテツですか？」

前方からやってきたのは、鎧を着込んだ、騎士風の男だ。

「そうだが、そちらは？」

「イクール伯爵軍、クラウド・ピートと申します」

茶の髪の、優男。

「何か、俺に用が？」

一体なんの用かと身構えるコテツに、クラウドと名乗った男は、笑って首を横に振った。

「いえ、聞けば、エリナお嬢様を助けてくださったそうで。本来は我々の仕事なのですが、一言お礼をと思ひまして」

どうやら、森の一件についてらしい。

コテツは、お決まりの文句を口にした。

「これも仕事だ」

「そう言ってくださると助かります」

そう言って、彼は溜息を吐いた。

「しかし、お嬢様にも困ったものです。あのようなお転婆な真似はやめていただきたいといつも言ってるのですが」

「ふむ……、エリナ伯爵令嬢とは、仲がいいのか？」

「ええ。あの方のことは、生まれたときから知っておりますので」

誇らしげに、クラウドは言う。

「やはり、長い付き合いとしては、心配か？」

「ええ。そうですね。あの方には是非、家督を継いで頂いて、一生を幸せに過ごしていただければ、と。使用人一同もそう思っているようですし」

（使用人、一同、か……）

どうやら、この男はリヒャルト派と言ったところか。

コテツには、この一件がおぼろげながら、見えてきた気がした。

（ルーにでも話を聞けば概ねはつきりするのだろうか。累が及ばないなら放っておくか……？）

そうして、日は暮れて。

「コテツさん、ご飯です」

焚き火を囲んで、各々が食事を取っている。

コテツ達とは言えば、今正に、リーゼロッテが料理の載った皿を渡しているところだ。

「ああ、ありがとう」

メニューは、パスタとスープ。

コテツの知るものと変わらない黄色っぽい麺の中には、燻製肉と山菜が入っている。

塩や胡椒で味付けされているらしく、スパイスのいい香りが香ってくる。

湯気を上げるスープは、琥珀色。見た目上はコンソメスープのように見えるが、味を見なければなんともいえない。

具は、チーズのような小さな白い塊と、白菜。白菜の名前はまた違ったもののだが、これはコテツも食べたことがあり、白菜とまったく差異が無いために、コテツの中では白菜だ。

だが、しかし、見ているだけで腹は膨れはしない。

コテツは、フォークを取る。

（しかし、箸でも作るべきか）

そして、なんとなく故郷の食器が懐かしく思えた辺りで。

「あのう、ご一緒しても、よろしいですか？」

エリナ・イクールがその場へと現れた。

「……む、君は」

「えと、エリナです」

「いや、覚えているが」

一同が見つめる中、エリナは腰元から小さな袋を取り出した。

「えと、ここに木の実とかがあるので、これと引き換えに、夕食を少し分けて頂けると嬉しいです」

「俺は別に構わないが」

エリナの申し出に、コテツは他の二人を見る。あざみはどうでもよさそうで、慌てたのはリーゼロッテだ。

「え、あ、あ、その、貴族のお嬢様に出せるような食事ではないんですけれども……」

「かまわないです。むしろ、とってもいい香りがするです」

「なら、構わないな？ リーゼロッテ」

「あ、ええと、はい。では、これを」

余った夕食を皿に載せて、リーゼロッテはエリナへと渡す。

「ありがとうございます」

エリナと言えば、夕食を受け取り、コテツの隣へと座り込んだ。

それを見届け、コテツは両手を合わせる。

「頂きます」

「いただきまーす」

「はい、どうぞ」

あざみがコテツに続き、リーゼロッテが笑う。

それを、エリナがぼんやりと見つめていた。

何か聞いたそうな顔をしていたが、しかし、食前の挨拶は宗教的、もしくは土地柄的なものだろう、と勝手に納得してくれたようで、なにか言ってくることは無かった。

コテツは、味が気になったので先にスープを啜る。

やはり、コンソメだ。ただ、コンソメは作るのが面倒であり、旅の途中に作るようなものではない。とすれば、コンソメのようなものの、という表現するのが一番正しいのだろう。

「あ、おいしいです」

エリナが呟く。

「それは良かったです」

にこにこと、リーゼロッテが応じた。

「しかし、気に掛けると言われましたが、向こうのほうから来てくれませんでしたねえ」

そんな二人を尻目に、あざみがコテツに話しかける。

「そうだな。まあ、困ることもあるまい」

「そうですね。じゃあエリナちゃんエリナちゃん、ちっさいですね、後で抱きしめてもいいですか？」

「ええっ！？ こ、困るです、えーっと」

「あざみです」

「あ、私はエリナです。そちらのお姉さんは？」

「リーゼロッテと申します」

「んー、で、駄目なんですか？ 抱きしめちゃ。こんなに小さくて可愛いのに」

「だ、駄目なんですっ」

「そうですね、あざみさん、流石にいきなりはびっくりすると思います」

「あーうー、リーゼロッテも言いますか。っていうか、もっとフラंकでいいですよ。あざみさんじゃなくて、あざあざとか、みんなとか」

「えと、それでもフラंकなつもりなんですけど……」

少女同士の会話に流石にコテツは付いていけない。いや、一名少女と呼んでいいか怪しい女がいるが。

それに、元々雄弁ではない上に、食事中に喋る性質でもないコテツは、黙って食事続けた。

パスタの塩味は実に丁度良く、コンソメスープもときもあっさりとしていて、食は進む。

「抱きしめてもいいですか？ 答えは聞いていない」

「ええっ！ 困るです！」

果たして、あざみはあざみにりに気を使っているのかどうか。

「選りなさい。私に抱きしめられるか、私を抱きしめるか」

「な、何を言ってるんですかー！」

……わからない。

（まあ、微笑ましいことだ）

そうして、食事を終えて。

「そういえば、水場ありますよね？ わざわざ野宿するなら水場必須ですし」

「そうだな。森で水音は聞いたが」

その問いに正確に答えることができたのは、エリナ。

「はい。向こうに川があります。上流は森に繋がってるです」

「そうですか」

「それが、どうかしたのか？」

「私、これでも綺麗好きでして、と家庭的な女をアピールしてみますが、つまり、水浴びしたいんです」

「危険じゃないか？」

「大丈夫ですよ。私の身体能力ならある程度は。最悪魔術でジュツと行きますし」

「……そうか」

「じゃ、行ってきますね」

あざみは、そういうと馬車に引っ込んでしまった。

水浴びのためにタオルでも出すのだろう。

しかし、そうすると。

リーゼロッテも食器を片付けと、寝る準備のため馬車の中であり、焚き火を囲むのは、エリナとコテツだけになってしまった。

無言が、場を支配する。

そして、そんな中、ふとコテツの中に疑問が浮かび、彼はそれを口にしようとした。

「……あの」

のだが、先を越された。

「なんだ」

コテツは、まあ、大した質問ではない、と口にすることを諦めた。その内、聞く機会もやってくるだろう、とエリナの言葉に耳を傾ける。

「しばらく、貴方達と一緒に行動をしても、構いませんですか」

「それは、どういうことだ？」

「寝食を共にし、同じように働きたいのです」

つまるところ、仲間として扱え、と言ったところだろうか。

「しかし、君は依頼人の娘なのだが」

いろいろ問題があるだろう、とコテツは言うが、エリナは首を横に振った。

「父にはもう許可を得たです。一人で無茶をするより、せめてお目付け役がいた方がいいと判断したと思うです。そちらには、女性も多いです」

「ルーのところへ行けばいいだろう。彼女は幼馴染だろう」

そう言うと、何故かエリナは困ったように苦笑した。

「彼女は、私に世話を焼きすぎてしまっただけです。私は、冒険者の生活と言っものを体験したいのに、貴族のお嬢様になってしまっただけです」

「冒険者の生活、か」

コテツが呟くと、わが意を得たり、とばかりにエリナは笑う。

「はいです。いろいろな経験をしてみたいです。この旅は、一週間ほどで終わって、私はまた、屋敷の中ですから」

「そうか。まあ、許可が下りているなら否やは無い」

依頼人の許可が出た以上は、依頼人の娘の頼みを断る理由はどこにも無い。

「はいです、ありがとうございますっ」

につこりと笑うエリナに、面倒が増えた、とコテツは内心苦笑するのだった。

と、そこで、馬車からあざみが降りてくる。

「では、行ってきますねー、エリナさんも一緒にどーですか」

「私は遠慮します」

着替えとタオルを持ったあざみの誘いをエリナは断る。
それを尻目に、コテツは立ち上がった。

「俺も行こう」

短く言つと、あざみは目を丸くした。

「え、ええ！？ え！？ 堂々覗き宣言！？ これはあれですか！
？ 確変ですか？ 遂に私の時代きました！？」
「流石に無用心が過ぎるだろう。番をさせてもらう」

色めき立つあざみに、コテツは冷たく言い放つ。
燃え上がっていたあざみは、一瞬にして沈下した。

「喜んでいいのか、悲しむべきなのか……」
「どうした？」

「いえ、心配されていることを喜ぶべきか、身体に興味を持たれて
いないと嘆くべきか……。下心隠してるって信じてても、いいですよ
ね、ご主人様……」

「困る」
「……」

無言になって、二人、歩き出す。

すぐ近くの川沿いを歩いて、森の少し中まで。

コテツは、大きな木の前で立ち止まった。

「何かあつたら呼んでくれ」

「覗きに来てもいいですからねー」

「遠慮しよう」

「覗きに来て下さいねー」

「すまないが断る」

「……。入ってきます」

「ああ」

そうして、あざみは背後の木の向こうへと消えていった。

衣擦れの音が聞こえた後、水の中に分け入っていく音が聞こえる。

コテツは、その場に座り込んだ。

そして。

自然の水音の中、たまに聞こえる不自然な水の音。

水浴びをする音が断続的に聞こえてくる。

コテツは、黙って待続けた。

そして、何分経ったろうか。

唐突に。

「きゃああああ！」

悲鳴。

「どうしたっ！」

コテツは飛び跳ねるようにすぐさま立ち上がった。

背後を振り向き、川へ。

そこには、あざみが立っている。

白い肌に細い腰。スレンダーな姿と、艶やかな黒髪が月明かりに

照らされ、妖しく輝いて見える。

「なにが——」

他に——、なにもない。

「……なにが」

声のトーンを落として、もう一度。
あざみは、ポツリと呟いた。

「えっと……、蛙が」

そう言っ、て、彼女は顔を真っ赤にして、俯いてしまった。

「……そうか、すまん」

コテツは、即座に踵を返す。

そして、逃げようとするのだが。

軍服の裾をつままれていることに気がついて、今一度コテツは後ろを振り向いた。

「どうした」

すると、あざみは顔を伏せたまま、耳まで真っ赤なまま、おずおずと、口にする――。

「その……、一緒に入っちゃったりとか……、します……？」

いつもは抱きついてきたり、覗けだのなんだのと、好き放題やつてくるくせに。

こういう時だけ、恥らうのは。

些か反則ではあるまいか、とコテツは思う。

「……いや、確かに今の君の姿は大変魅力的なのだろうが」

「えー!? へ? あ……?」

「流石に問題だろう、それは」

そうして、逃げ去るように「テツはその場を後にした。
再び、木を背に座り込むと、彼は溜息を一つ。

「……先が思いやられる」

そうして、夜は更けていく。

26話 宵闇不透明（後書き）

今回の話はエリナ中心で展開される予定です。

27話 喜楽フィッシング

翌日からの旅の道程は、とても無邪気なものとなった。

果たしてエリナが参入したことによるものなのかはわからないが、とにかく明るい旅だった。

イクルの領地は、国境に程近く、それなりの距離はあるのだが、それまでに凶暴な魔物が発見される事例はほとんど無いと言いつし、途中で更なる護衛がSH付きで合流するらしい。

そう考えれば、気楽なものなのである。

「コテツさん、釣りはどうでしょう」

そんな、二日目の野営地点で、リーゼロッテはそう提案した。

一息に森を抜けた辺りで、馬が音を上げたため、今日も早めの野営だ。

「釣り？ 道具が見当たらないが」

「針と糸さえあれば、どうにかかりますよ」

「そういえば、君は森暮らしをしていたのだったか」

「はい、なので、簡易的な釣竿でしたら」

「魚も悪くないな。釣れるかどうかはまったくわからんが」

呟いて、コテツは立ち上がる。腐りやすい魚を野宿などで食べるには、やはり釣るしかない。

コテツも魚は嫌いではないし、それに、野営は暇なのだ。

野営は基本的に食事を済ませ、寝るだけだ。それ以外はまるつきりやることが無い。

寝具の用意に何時間も掛かるわけではないし食事だって準備から

片づけまで二時間あれば十分すぎる。

手の込んだ料理を作るわけではないのだから、そんなものだ。ならば暇つぶしに本でも持ち込めばという話だが、それは荷物と相談した上で良しと判断できた場合だ。

荷物は軽いに越したことが無いし、それに、旅の半ばで読み終えてしまえばそれこそデッドウェイトだ。

「エリナ、君は向こうに行かなくていいのか？」

ただし、貴族ともなればまた違う。

それなりのテントが用意されるし、食事も野宿とはいえ悪くないだろう。

荷物が重くなろうが、貴族ともなれば我侭も通る。

のだが、エリナは首を横に振った。

「私は釣ったお魚が食べたいですっ」

「そうか？」

お嬢様というのはそういうったものを好まないのではないかというコテツのイメージは、誤りのようで。

「お屋敷に戻ったら、こういうこと、もうできませんし。いろいろ経験してみたいですっ」

笑顔で言うエリナに、コテツが掛ける言葉は無くなった。

「リーゼロッテ、頼む。あざみもやるだろう？」

「はいはいやりますよー。流石に一人仲間はずれとかないですって」「とすると、竿四本になるが、作れるか？」

最悪、作れるだけ作って一人二人は手伝いでもいいかと思ったがそれは杞憂で、リーゼロッテは笑顔で答えてくれた。

「大丈夫ですよ。じゃあ、その辺の木から、枝採ってくるので、ちよつと待っててください」

軽やかに、背後の森へ走り出すリーゼロッテ。コテツはそれを見送る。

そして、数分が経ち。

リーゼロッテが、軽やかに駆けて、森から馬車へと戻ってきていた。

「作ってきましたっ」

「早いな、というか、手伝うべきだったな、すまない」

「いえいえ」

笑顔で四本の竿、木の枝で作られた簡易的な釣竿をリーゼロッテは渡してくる。

そんな中、リーゼロッテを見ていたエリナが不意に声を上げた。

「ひゃあ！」

「どうした」

一体どうしたのかとコテツが聞くと、エリナがリーゼロッテの頭を指差している。

そこには、小さな紐状の虫がくっ付いていた。小さな芋虫だ。

「む、虫が……」

「ああ、虫が付いてるな」

髪の毛に虫を付けたままというのは愉快なことではないだろう。
ひょいとコテツは虫を手で掴むと馬車の外へと放った。

「あ。付いてましたか？　ありがとうございます」

「む、虫を素手で……」

動じずのリーゼロッテと、戦慄するエリナ。

さすがにそれはお嬢様か、と逆にコテツは納得してしまった。

「とりあえず、エサの虫も採ってきたので、すぐいきますよ」

まあ、それはともかく、リーゼロッテは完璧に準備を終わらせて
来てくれたようである。

内心感心しつつも、コテツは心中で呟く。

（流石元野生児、と言うべきか……、そしてこちらは流石お嬢様、
といった所か）

そして、思いつつもう一人、彼はあざみの方を見た。

「あざみ、君は虫などは苦手か？」

純粹に気になったというのが半分と、旅をするにあたって知って
おいたほうがいいだろう、というのが半分。

旅ともなれば、虫はもちろん、不衛生とも直面していく。

僻地に配属され、不衛生や、虫の羽音による不眠などによってス
トレスがたまり、体調を崩す軍人も、コテツは見てきた。

しかし、とうのあざみはけろりとしている。

「別に苦手じゃないですよ？」

「蛙であんなに叫ぶのに、か？」

聞くと、あざみは顔を赤くした。周囲は、コテツの言葉の意味がわからないようで、首をかしげている。

「そ、それは、まあ。その。背中にいきなり飛び乗られたらびっくりするじゃないですか……」

「そんなものか」

「そんなものです、ささ、釣りしましょう。夕飯が楽しみですね」

そう言って、一同は川へと歩いていったのだった。

「……しかし、長い川だな」

「んー、しばらく先の山まで続いてますよ。大陸でもそこそこでかい川ですよ、多分」

あざみの情報を信じるなら、大陸でもそれなりの大きさを誇る川は、野営地からさほど遠くも無いところにあった。

街道そのものが川に沿う様にあるようなので、当然だが。

「えっと、これ、エサです」

そう言って、リーゼロッテが葉を縫って作ったものであろう即席の袋を開く。

そこには、虫がびっしりと詰まっていた。

「……え、あ、あ、い、生きてるです、これ」

血の気の引いた顔でそれを見るエリナに、リーゼロッテは笑顔を向ける。

「はい。釣りエサは鮮度が肝心なんですよ？ エビなんかは、死んでしまったものだと急に食いつきが悪くなるくらいですから」

「えあ……、はい」

「はいはい、リーゼロッテ先生、エサはどうやって付けたいのですかー？」

ショックから立ち直れていないエリナと、ノリノリで手を上げるあざみ。

コテツは黙って傍観していた。

「とりあえず、虫の頭のほうから、身体に通すように差ししてください。それで、途中でお尻の部分を垂らしてですね、長かったら切っちゃっていいです。人によってとか、魚の具合によって長さは変えたりするんですけど」

「ふむふむ、なるほど」

言いながら、あざみはエサである細長い虫を取り、針に刺している。

コテツも、それに習い虫を針に刺しつつ、リーゼロッテへと声を

かけた。

「詳しいんだな」

「え、はいっ。これでも昔はお魚とって食べてたんです。コテツさんは、釣りの経験は？」

「昔、友人に付き合わされたことはある。何度かな。その時は、ルアー釣りだった上、当然然程釣れてもいないから、素人と呼んでもいいだろう」

「えと、るあー？」

「魚の餌に似たもの、と言うべきか。金属や樹脂で出来ていて、使い捨てではない……、といっても詳しく知らないのでこのくらいの説明しか出来んが」

「エサなしでつれるんですかっ？ あっ、でも、聞いたことあるかもしれない、どこかで木で作ったエサで魚を釣ろうとしてる人がいるとか」

「それが進化したら、ルアーになるのだろう」

コテツの世界でも、すでに中世と呼べる時代には、そういった試みがあつたらしいから不思議ではない。

まだ、ルアーと呼べる物ではないにせよ、前身と呼ぶには十分だ。

「凄いですねえ……、エサが要らないなんて」

「とはいえ、生き物のように見せかけてエサを動かしたり、部品の組み合わせに気を使ったりと、到底俺に出来るようなものではなかったが」

「難しいんですか？」

「俺にはな」

呟いたところには、エサを付け終わっている。

そして、すこしエリナの様子を見てみると、彼女は未だに、エサ

の前で戸惑っていた。

流石にお嬢様には辛いかと、コテツは彼女へと声をかける。

「無理なようなら、俺が付けるが」

「い、いえ、大丈夫、大丈夫です！ 何事も経験、こういうことにも慣れておかなければならないですっ」

コテツなりに気を遣ってみたのだが、エリナは固辞して意を決したように虫を掴んだ。

「あう……」

そして、手を震わせながら、針に虫を刺していく。

「あうう……」

その感触に、肩まで震わせつつも、彼女は遂にエサを針に付ける事が出来た。

それを確認して、リーゼロッテが川の方を向く。

「では、後は川に垂らすだけですな」

「他にコツとかがあれば、先に言っておいてもらえると助かるが」

「えっと、特にないですかね。後は、勘です」

そう言っ、彼女ははにかむように微笑んだ。

（野生の勘か……）

そんなものは無い、と若干困りつつも、コテツは川へと糸を垂らす。

丁度いい岩があつたので、そこに座りながら。
ちらり、と横を見てみると、各々、好きなように糸を垂らしているようだ。

あざみは、楽しむように肩の力を抜きながら。

エリナは、真剣に、川を睨み付けながら。

リーゼロッテは、自然体でありながらも、動きがどこか玄人臭い。
本気で夕食を釣り上げるつもりらしい。

コテツは、ぼんやりと糸を垂らした。

そうして、一番最初に動きがあつたのは、やはりと言うべきか、
リーゼロッテだった。

「あ、一匹釣れました」

一同が、リーゼロッテを見る。

「早っ、早いですよリーゼ先生！ くっ、これが釣り経験者との差ですか。これでは、大量に釣り上げて、ご主人様に抱きしめてもらいながらなでなでしてもらおう作戦が……」

「そんな景品は用意してないが」

大げさに悔しがるあざみだが、エリナもまた、それを見て息巻いていた。

「私とて、イクール家の娘ですっ、負けられないですっ」

「……元気だな」

コテツは呟く。

エリナも、意外とあっさりと溶け込んで、安心して釣りが出来そうだ、とコテツは水面を眺めたのだった。

「まあ、素人がそう簡単に釣れるものではないのだろうが……」

それから、中々ハプニングにまみれた釣りとなった。

「あつ、あ、引いてるです！ 来たです！！」

エリナが大物を引き当て、懸命に竿を引くのだが、中々釣れず。

（しかし、木の枝で作った即席の割りに、随分と丈夫だな。そういう木でもあるのか）

と、よくしなる竿を見ながらコテツが思索していると。

エリナの体は少しずつ前傾姿勢へとシフトして行き――。

「んん……！！ あ、きゃああああつ！」

エリナ、川に落下。

「む、大丈夫か？」

「あつ、大丈夫です」

浅めのところに尻餅をついて、ずぶぬれになったエリナは立ち上がるなり、いつの間にかエサが外され浮いていた竿を手に取り再び地面へと上がってきた。

「負けないです……！」

なんとも涙ぐましい努力。

「着替えるなり、服を乾かすなりしたらどうだ」
「問題ないです、魔術で暖めるです」

言って、すぐに彼女は釣り糸を垂らし始めた。
果たして温風を生み出す魔術でもあるのだろうか、と、眺めてみるが、コテツの目では特に何もわからない。
そんな中、運がいいのか悪いのか、再びエリナの針に、魚が引っかかる。

「きゃっ、また引いてるですっ、来ました！」

この辺りの魚はどれほど飢えているのかと思わなくも無いが、しかし、また結構な大物が引っかったのは事実。

「ふっ、うっ、こ、今度こそ……！」

ただ、エリナは全力で引き上げようとしているが、やはり先ほどの焼き増しであるかのように、力負けしていた。
このままでは、結果も先ほどと同じになってしまうだろう。
が、しかし。

流石に二度目ともなれば、コテツが対応できた。
竿を岩場に置き、すぐさまエリナの元へ。

そして、背後から抱きかかえるようにして、彼女を支え、片手で、彼女の手を重ねるように竿を握る。

「竿が折れそうだな……！」

果たして、枝で作られた即席の竿が折れるのが先か、それとも魚が根負けするのが先かと言わんばかりに、竿がしなっていた。

「うっ……！ あと、もうちょっと……！！！」

「あ、ちょ、後ろから抱きしめられて一緒に釣りとか、大物引っかけたらそんな特典付いて来るんですか」

あざみが何か言ってるが、気に留めている余裕は無く。

「そろそろ一気に行くぞ」

魚の疲労が見え隠れしたタイミングで、コテツは言った。これ以上鎬を削りあっても、竿が折れるだけだとの判断。

「……は、はい、お願いしますです！」

「では、行くぞ」

「はいっ」

二人、背後へ倒れこむように、思い切り力をかける。

瞬間。

飛び上がる魚。陸地へと落ち、最後の抵抗に、地を跳ねる。すぐさま、エリナはその顔に喜色を浮かべた。

「や、やった、釣れた……！！！」

「楽しそうだな」

「あ、ごめんなさいですっ！」

コテツと一緒に背後に倒れこむようになったため、エリナは座り込んだコテツの膝元に収まっている。

彼女は慌てて立ち上がろうとするが、慌てたがために、中々上手くいかず、手が地面を探し、あわあわと彷徨った。

「いや、構わないから落ち着いてくれ」

仕方ないので、コテツはそのままエリナを抱きしめて立ち上がった。

ぶら下がる格好のエリナを、コテツは地面に下ろす。それが恥ずかしかったのか、エリナは顔を赤くする。

「は、はい……、ありがとうございます」

そして、赤いままの顔で彼女は礼を言うと、自らが釣った魚の元へ、ぱたぱたと駆けていった。

魚を掴もうとしては苦戦していたが、その顔はどこか楽しそうだ。

（濡れてしまったが、まあ、いいか）

その光景は、濡れてしまった服くらいの価値はあるだろう、とコテツは歩いて再び岩場に座り込む。

「あ、ご主人様っ！ 掛かりました、掛かりましたよおっきいの！ だから後ろから優しく抱きしめてくださいっ、それでうっかり胸とか揉んじやったりしてそういうイベントをですねっ」

「……その様なサービスは行ってないので自慢の身体能力でどうにかしてくれ」

あざみの言葉を黙殺すると、しばらくして誰かが水に落ちたかのような音が聞こえてきたが、やはりコテツはぼんやりと釣り糸を垂らすのだった。

そうして、夜。

その日もまた、エリナと共に食事を行う。

無論、今日釣った魚がメインだ。結局、コテツの釣果は零だが、リーゼロッテは安定してほどの大きさの魚を大量に釣っているし、エリナは大物一匹を釣り上げている。

あざみは、小さな魚を二匹ほど。

「うーあー、まだ湿ってます」

あざみが嘆くように言うと、エリナもまた、それにうんうんと頷いた。

「はいです……」

そうして四人、焚き火を囲んで、魚が焼けるのを待つ。

「そろそろ、食べれますね」

リーゼロッテが呟き、火の中から串に刺さった魚を取り出した。それと同時に、昨日と同じスープを渡し、それが今日の夕食となる。

「コテツ、コテツ」

「なんだ、エリナ」

「両手を合わせて、イタダキマスと言えいいですか？」

「ん？ ああ。俺の国ではな」

「では、イタダキマスです」

そう言つて、エリナが両手を合わせて笑つ。

「国柄だから別にすることはないが」

「こうして、皆と一緒にのことは、楽しいですから。だから、イタダキマスです」

「そうか。では、いただきます」

「じゃあ私も、いただきますーす」

そういうのならば問題ない、と両手を合わせるコテツにあざみが追従する。

続いて、リーゼロッテが両手を合わせた。

「いただきます」

そうして始まる食事に、最も最初に顔を綻ばせたのはエリナだ。

「おいしいです……。自分が釣った魚だと思うと、うれしいですね

っ
」

にっこりと笑うエリナへと、コテツは冗談を返す。

「それは嫌味か」

一匹も釣れなかったコテツが言う。

なんとなく、先日森で言われた言葉に掛けた意趣返しなのだが、エリナには、普通に誤られた。

「ご、ごめんなさいです」

「いや、冗談なのだが」

「真顔で冗談はどうかと思うです……」

「そーですよー、ご主人様。もつとにこやかに笑ってー」

「にこやかなコテツさんって、想像できないんですけど……」

リーゼロッテの苦笑に、あざみはうんうんと頷いた。

「さわやかにこやかなご主人様とか薄気味悪くて死ねます」

「君は俺に思うところでもあるのか」

「ありますよ。大好きです」

「……そうか」

そして、食事を終え、夜も更けてきた頃。

「眠れないのか？」

「え？ あ、いや、別に、です」

寝ずの番をするコテツは、不意に、エリナへと語りかけた。

そして語りかけるなり彼は立ち上がると、まるで野生動物のように丸くなって眠るリーゼロッテに毛布を掛け直し、そもそも毛布を使わずに横になっていたあざみに、毛布を掛けてやった。

それが終わると、コテツは元の位置、毛布に包まり膝を抱えるエリナの隣へと座り込んだ。

「ただ、こういうの、たのしいな、って思ってた……」

「そうか」

「寝るの、なんかもつたいないです」

はにかむ様に微笑んで、彼女は言った。

コテツは、エリナの方へと目を向ける。

「君は……」

そして、彼は彼女を見つめながら、一日共に過ごして気になったことを問うた。

「冒険者になりたいのか？」

共に過ごしていて、そのように思える。ただ、純粋な興味で聞い

てみると、こくり、とエリナは頷いた。

「……はいです」

やはり、と思うと同時に、何故、ともコテツは思う。

「そんなに、冒険者は魅力的なのか、それとも貴族の生活が面倒なのか」

「冒険者は、自由でいいです。……自分で何かするのは、大変ですが、楽しいです」

「……そうか」

貴族というものは、その中でも子と言うものは、不自由なく暮らせて、幸せだというイメージが一般にも浸透している。

だが、だというのに、背を丸めた彼女の姿は。

「私は、黙ってれば気が付けば伯爵になってしまいます。家も使用人も兵士も、先の戦で武功を立てたお父様のものなのに」

とても、寂しげだった。

「そういうものだ。遺産とは」

「そういうものです。だけど、私は……」

複雑な思いを吐き出すように、エリナは溜息を吐く。
そして、今一度、口を開いた。

「……私、何も持ってないです」

寂しげな声。

コテツには、何も答えることができなかった。

「屋敷に着くまで、お願いするです」

「……ああ」

せめて、平穩無事に旅が終わればいい、とコテツは思う。
それは、最終日のその日まで、その通りにことは運んだ。

そう、旅の道程は無邪気で、順調なものだったのだ。
たとえ、いかに狼が群れで仕掛けてこようとも。

「エリナは攪乱、あざみは援護、リーゼロッテは状況報告と万が一の際に備えて待機。では頼んだ」
「はいですっ」

エリナが駆け、狼の群れへと突っ込んでいく。

「はいはい援護しますよー」

その背後から、あざみが指を差す方へ光の帯が飛んで行った。

「威力低め、ただの牽制ですが」

それが飛び掛る狼へと当たり、怯んだ隙に、エリナが剣を振るう。そうして、叩き落された狼の元に、コテツがバルディッシュを振り下ろしていった。

胸を両断され、息絶える狼を払いのけ、コテツは更なる敵に止めを刺していく。

攪乱、援護、攻撃力、勘が良く、鼻の効く管制。このパーティは、上手く働いていた。

「狼の数残り七、エリナさん、右にいますっ」

リーゼロッテの言葉に応えて、エリナが剣を切り払う。

「はいですっ。コテツ！ お願いします!!」
「了解」

飛ばされた狼へと、バルディッシュが振り下ろされる。

「数六ですっ」

「一気に沈めるぞっ」

コテツの声に、エリナが応えた。

「はいっ！」

そうして、狼の群れは次々と数を減らして行き、そしてその数はあっさりと零となる。

最後の一匹は、無常にもバルディッシュに叩き斬られ、断末魔も上げずに、事切れた。

「戦闘終了、お疲れ様でした」

そうして、リーゼロッテが戦闘終了を口にし、コテツはバルディッシュから血をふき取ると、あざみへと渡した。

「はいはい、お疲れ様です。格納しますね」

渡されたあざみは、まるで手品のようにバルディッシュを消して見せる。

それを確認してから、コテツはエリナの様子を見に、彼女の元へと歩き出した。

「戦闘終了だ。大丈夫か？」

「は、はいです。だいじょうぶ、いけるです」

エリナは、言葉の通り怪我もなさそうに元気に立っていた。

実戦経験が豊富ではないだろうし、連携などそれこそ初めてだろうから気に掛かっていたが、本人の言うとおり問題なさそうではある。

と、そこで、コテツは彼女の肘に赤い線が走っていることに気がついた。

切り傷の類だ。うつすらと血が滲んでいる。まったく深くはないようなので、気にすることはないかもしれないが。

「そうか。しかし、肘の所に傷があるぞ。リーゼロッテに手当てしてもらうといい」

すると、どうやらエリナも今気がついたらしく、肘を見て、少し驚いた顔をする。

「あ……、もう。私、無様です」

しゅんと肩を落とすエリナに、コテツは慰めるでもなく、いつもの調子で口を開いた。

「生きてる内の傷は勲章だ。致命傷は間抜けだが」

コテツは地球においてはもともと傭兵から功績を挙げての正式任官だ。

だから、そんな傭兵の流儀を知っている。

生きてる間の傷は、歴戦の証。死に至る傷は、食らった間抜け。果たしてこの世の冒険者はどうなのか、コテツはまだ知らないが、似たようなものだろうと。

エリナへと、口にする。

「そうなのですか？」

「ああ。君が。君が自ら戦い、自ら得た、傷だろう。そういうものだ」

エリナは、そんな言葉に、にへらと笑う。

「えへへ、そうですか……！」

「ああ、そうだ」

コテツは頷いて、振り返ると馬車へと歩き出した。

「勲章……、ですか」

にやにやと、エリナはその腕を見ていた。

狼の爪が掠めたであろう、薄い傷。傷跡にはならないだろうが、直るまでは数日あることだろう。

彼女は今、充実感に溢れていた。

旅は、楽しい。

食材を探しに行ったり、皆で魔物と戦ったり、外で寝たり。

今まで、決してさせてはくれなかったことだ。なんせ、剣の稽古ですらやつのことで勝ち取ったほどのだから、まともに戦わせてくれるなんてあるわけがない。

彼女の人生を一言でまとめるなら、『まるで、お人形さん』である。

大切に育て上げられ、なんにもさせてはくれない。別に周囲に悪気があるわけではない、むしろ慈愛を持って周囲は彼女になにもさせない。

だが、だからこそ、エリナはその手で何も手に入れることができなかった。

ただ、他人に担がれるがまま生きて、朽ちていく。それが、予測される彼女の人生だ。

黙っていれば、気が付けばイクールの当主となり、領地経営を行い、そして死ぬ。

父親の残すレールを辿るだけの生だ。

言われるがまま、されるがままに生きてこざるを得なかったこの十三年間が、それを物語っていた。

だが、この数日は。

エリナのこれまでの、人形のような人生の中で、この数日は眩しいばかりの輝きを放っている。

コテツ、リーゼロッテ、あざみ。彼らは、エリナを特別扱いしない。

「ふふっ」

リーゼロッテは優しいし、あざみは人を煙に巻くような態度をとることが多いが、面倒見がいい。

コテツは、冷たく、人間味が無い印象を受けるが、何だかんだ言っ、少し遠くから見守ってくれる。

（とても不器用で……、どこか可愛らしいひとですけど）

そんな風ににこにここと笑うエリナはふと、近づいてくる足音を耳

に捉えた。

誰か来た、と彼女は少しだけ、しまりない口元を引き締める。

「エリナ、調子はどう？」

「ルーですか。すぐく、たのしいですよ」

「そう、よかったわね」

エリナの姉貴分は、そう言って笑った。

彼女とは、古い付き合いだ。父親が友人同士で、気が付いたころにはずっと一緒に遊んでいた。

五つほど年上の彼女は、いつもエリナを気にしてくれる。

「あら……。エリナ、怪我してるじゃない」

だが、そんな彼女は、エリナの肘の辺りを見て眉を潜めた。
その顔は、さっきと打って変わって不満そうに見受けられる。

「……ダメね、あいつら。私だったら、エリナに傷ひとつ付けさせないのに」

言われて、エリナは心にわだかまる物を感じていた。

姉貴分が、その傷を理解してくれないことに。

まるで、エリナを割れ物のように扱うことに。

「……どうしたの？」

いつもならば、それに対し、苦笑で返すところだったのだが、しかし、今日は何故だか。

聞かれて、エリナはそのわだかまりを、言葉にして吐き出すことができた。

「……勲章です」

「はい？」

「コテツは……、これを勲章と言ってくれたのです……」

悲しいのだ。この姉貴分が、理解してくれないのが。
それを、不器用に言葉にした。

「……そう、ごめん」

彼女は、とても優秀で優しく、エリナにとっても自慢の姉貴分なのだが、エリナに対し、酷く過保護なのだ。

エリナのルーへの、たった一つの不満である。

ただ、謝ってくれた以上はもう引きずらない。エリナは、寂しげだった表情を変え、真顔でルーに聞く。

「いえ、いいです。それより、私になにか用事ですか」

「ああ、うん。SHの受け取りが完了したわ。仲間も合流したし」

まるで報告するように、ルーは言う。

エリナは――。

少しだけ、眉を顰めて。

聞いた。

「怪しまれては、いませんか？」

「いいえ。大丈夫よ。こないだの王都付近の魔物出現があったから一応警戒しておくことで、自然な流れに見えるわ」

「そうですか。なら、いいです」

「ええ、それじゃ、私は戻るから」

そう言つて、颯爽とルーは去っていく。

そう、何もかも順調だ。

旅も、何もかも。

去っていく背中を見送つて、エリナは寂しそうな顔で呟いた。

「楽しいです……。こんな日々が、ずっと続けばいいのに――」

旅が、長引けばいい。

だが、そうはならないだろう。

旅は順調なのだ。

問題などどこにも無く、日が伸びることも無く。

ただ、つつがなく。

旅は終わりを迎えてしまう。

27話 喜楽フィッシング(後書き)

次の次辺りでやっとな戦闘突入の予定です。

ユニークPV十万突破しました。本当にありがとうございます。
このまま四章終わりまで気張っていきます。

28話 Standby Ready?

そう、旅は順調だった。

最終日の、目的地に着く正にその時まで。
剣戟鳴り響く、その瞬間まで。

「いやあ、疲れましたねー。今回のお仕事は」

街の前に到着したのは、すでに夜。煌々とした満月が照らす夜だった。

その夜の闇の中、コテツ達は、街に入っていくエリナ達を見送っていた。

もう彼らと会う機会はないのだろうか、既にエリナやリヒャルトと別れは済ませてある。

屋敷までついていくことにならなかったのは、これから宿を探したり、ギルドに寄ったりとやることがあるのだろうか、と判断したりヒャルトの厚意だ。

コテツは、それを受けることにして、去っていく馬車を見送っている。

「でも、楽しかったですね、エリナさんも、素敵なお嬢様でしたし」

リーゼロッテも同じように馬車を見送りながら、そんな感想を溢した。

そのエリナは、一番前の馬車にいることだろう。

左右に数機のSHを付けて街へと入ろうという馬車は、見るものを圧倒するものがある。

ちなみに、そのSH達はルー達冒険者の持ち物である。旅の途中で、念のためにと合流した五機だが、活躍の機会はほとんどなく、目立った損傷はない。

「そうですねえ……。妹みたいで可愛かったと思いますよ、私も」

あざみがリーゼロッテに伝えて呟くも、コテツは黙って、その光景を眺めていた。

「ん、どうかしたんですかご主人様」

「いや……」

そして、コテツがそう呟いた瞬間、馬車の動きが止まる。

「あれ？ どうしたんでしょうか」

リーゼロッテの呟きの通り、馬車の周囲は違和感のある光景となっていた。

突如、慌しくなり、男の悲鳴が聞こえた、と思ったらエリナが馬車の外へと出る。

そして、SHの一機が手を伸ばしたと思えば、エリナはそれに拾われるようにしながら、コクピットの中へ入っていった。

「一体何が……」

そして、突如方向転換をし、走り出した機体へとあざみが呟いた正に、その瞬間。

——爆音と同時に、走り出した機体の足元が、一発の砲弾に穿たれた。

『それ以上の前進は許さない！ 機体を停止し、操縦席を降りるんだ！』

颯爽と現れたのは、S Hの部隊だ。五機のS Hが、冒険者のS Hの前に立ちはだかつている。

そして、その一機から響き渡るクラウスの声。

『いやよ。もう始めちゃったもの』

そして、返されるのはルーの声だ。

「ご主人様っ、一体何がっ!？」

置いてけぼりにされたコテツ達を他所に、冒険者達のS Hが動き出す。

クラウス達、兵士のS Hもまた、それを通さぬとばかりに立ちはだかり。

両者は睨み合う形となった。

そんな戦場と化した門付近を、コテツは黙って見つめていた。その異常に、あざみが気づく。

「もしかして、ご主人様……。あなたは、知っていたんですか？」

コテツは、一文字に引き結んでいた口を、少しだけ開いてあざみへと、伝えた。

「ああ、つい先日、エリナ本人から、な――」

時は一日巻き戻る。

旅、六日目。旅は、順調だった。

……表面上は。

コテツは、この旅が始まるとき、ある種のきな臭さを覚えていた。何らかの違和感と言うべきか。

それは、エリナやリヒャルト、また、エリナの幼馴染であるルーヤ、イクール家に仕えるクラウスに会って話を聞いた今、尚。

ついで消えたことはない。

（エリナは言った。父との関係は良好だ、と）

ただ、エリナの家を継ぎたくないという願望に賛成するものと反対するものがあるだけのこと。

だから安心して構わない、とエリナは言った。

だが、しかし。
ならば。

（ならばルーは俺にどちらに付くのかを聞いたりするのか――？）

そこだ。そこに、違和感が残る。

何故コテツを、敵か味方のどちらかだと、ルーは考えたのか。

ただのお嬢様の夢を応援する者と、反対する者が居るだけならば、外から来た冒険者は敵でも味方でもなかったところで、おかしくはないだろう。

だが、ルーは、彼女はコテツを関係者だと踏んだのだ。

（つまり、彼女には俺が敵か味方が断定する必要があった。その上、敵の可能性があると知って尚聞かねばならない理由が）

沈み行く思考の果て。

答えに、指先が掠めている。

あと数センチ腕が伸びれば、答えに手が届きそうな。

「……もしや」

明日は、目的地に辿り着く予定の日。

そんな今日に至るまでに、いくらかのヒントとなる出来事も、あ

った。

それは、四日目の昼のことだ。

その日、コテツは馬車の中で荷物を整備していた所、

「……っ!」

突如馬車の中に飛び込んできた人影へと、コテツは剣を抜くこととなった。

甲高い音が響く。座り込んだ体勢のまま、若干仰け反りつつもコテツは振り下ろされた剣を防いでいた。

そして、その一撃を防いだコテツは、まるで溜息でも吐くように呟く。

「……一体何の冗談だ」

襲撃者はいええ。

彼女は、悪びれもせずに、笑っていた。

「意外とやるじゃない」

「ルー、君は」

冒険者、ルー。彼女はエリナの友人でもある。

「試してみただけよ？ あなたの力を。曲がりなりにも、エリナを

預けてるわけだし？」

そう言つて、彼女は武器を仕舞った。

腰の鞘に収納されたショートソードがかちりと音を立てる。

「……それで君は馬車に飛び込むなり大上段から剣を振り下ろすのか」

「防いだんだから問題ないでしょ？」

コテツは、その物言いに少しだけ目を細める。

それを知つてか知らずか、彼女はにやりと笑つて聞いた。

「でもあなた、本職はSH乗りでしょ？」

「わかるのか」

確かに、コテツも人型機動兵器に乗る人間の雰囲気は判る。彼らは、総じて動きが小さい。コクピットの中でほとんど動かないし、最小の動作で最大の効果を得ようとしたですが、SH乗りの考え方だ。

しかし、胡坐をかいた状態から剣を受け止めるまでのモーションに、そのような空気が見て取れただろうか。

そんな疑問に、あっけらかんとルーは答えてくれた。

「剣が素人臭いもの。反射神経と動体視力、それと勘で戦つてる感じ。ついでに体がついてつてない空気。SH乗り特有じゃない？」
「なるほど。確かにこういう剣は素人だな」

ルーの言葉にコテツは納得を覚えた。

確かに、機動兵器に乗れば、後は音速の世界だ。しかも、音速の世界で自分の身体を動かすわけではないから、反射神経、動体視力

が鍛えられていく。

しかし、実際動かすのは機械の体であるため、意識と動作が噛み合わないように見受けられるのだろう。

「かくいう君も、SH乗りのようだが」

「あら、わかるのね」

「身軽な動きと、動作のコンパクトさでな」

「そうね。いつもわざわざワイヤー垂らして搭乗なんてできないものね」

「戦闘ともあれば、すぐさま機体に取り込まなければならないからな」

パイロットは、余裕がない時は装甲を駆け上がり、すぐにコクピットに入り込まなければならない。

SH乗りは、それ故に、山猫のようにしなやかな立ち居振る舞いをする人が多いのだ。

たとえ2メートルを超える巨漢であろうが、動きは俊敏でしなやかであったりする。

ルーは、そんな機動兵器乗りなら当然の問いを放った。

「それで？ あなたのSHは持ってきてないの？」

「ああ。この場にはないな」

あつさりと、コテツは真実を告げるのを止めた。

ディステルガイストは隠しておきたい。状況が不透明だからだ。

「ふーん？ エネルギー効率が悪いのかしら、あなたのSH」

「そんなところだ」

「なら仕方ないわね」

しかし、SH乗りがSHに乗らずに旅をすることは別に珍しくもないらしい。ルーから深い追求はない。

楽でいい、と心中呟きながら、コテツは用はそれだけか、と黙ってルーの言葉を待つ。

ルーは、先ほどから一転して、心配するような顔でコテツに聞いた。

「それで、あの子はどう？ 元気にやってる？」

「ああ。こちらの二人とも溶け込んでいる」

「ふーん？ でも、よく考えると、亜人のメイドに、女の子と、男一人のパーティって珍しい組み合わせよね」

「そうなのか？」

疑問符を付けて言葉を返したコテツに、ルーは呆れた顔をした。

「まずメイドって時点で何がなんだか。メイド連れてる冒険者なんて余程の物好きか金持ちだわ」

「そうか」

「まあ、そんなパーティだからあの子を任せられるんだけど」

そう言っただけで彼女は肩を竦める。

コテツは、それから少し間を置いて、口を開いた。

これほどフレンドリーなら、やはりエリナの件に関してかなり深いところにいるだろう、と。

「君は、エリナが冒険者になりたいことを知っているのか……、いや、知ってるんだな？」

「ええ。あなた、話してもらったの？」

「ああ」

「随分懐かれたのね」

「君は、エリナの希望についてどう思っているんだ？」

探りを入れるように、コテツはルーへと問う。
座っているコテツに、ルーは立ったまま、返答を返した。

「素敵だと思ってる。あなたは、そうは思わない？」

そして逆に聞き返されるが、コテツは返答を返さなかった。
ただ、無言で、口を一文字に引き締める。
答えを返さずも、ルーは先を語った。

「私は生まれた時から色んなことが決まってるなんておかしいと思う。人は、自由であるべきだわ」

「そうかもしれん」

「だから、私はエリナを応援してるの。というか、うちのパーティ皆でね。皆、あの子のこと妹か娘みたいに可愛がってるから」

「彼女のためなら、命くらい張れる、か？」

「ええ、そうよ。冒険者なんて皆そんなもん」

彼女は、茶化すでもなく、真顔でそう答えた。

答えを、手繰り寄せる感覚。違和感が、確信に変わる予感。

(……もしかすると)

「じゃあ、私行くわ。途中で合流した仲間とも打ち合わせしなきゃいけないし」

去っていく彼女を見送って、結局コテツも馬車の外に出た。
考えをまとめてしまおう、とコテツは外の空気を吸おうとする。
のだが。

そこで、またの来客。

「コテツ殿、お嬢様の調子はいかがでしょうか」

鎧を着込んだ茶の髪の男、クラウス・ピート。彼が、コテツの元へと歩いてきていた。

そして、着くなりエリナの調子を聞くのだから随分と、エリナは様子を気にされているようである。

「悪くは無いようだ。今はうちの面子と散策に行っている」

「ついていかなくてよろしいので？」

「必要ない程度には、彼女らは強い」

エリナの剣技自体は中々の冴え渡りであるし、リーゼロッテの身体能力は高い。

更に、あざみがそれなりの威力を出すつもりで魔術を使えば、今まで倒してきたような相手では話にならない。

それ故のコテツの言葉だが、クラウスの顔には、不安が浮かんでいた。

「……そうですか」

「しかし、随分と気にされているんだな、エリナ・イクールは。先ほどもルーが来ていた」

「ルーがですか？」

「ああ。そちらとも知り合いなのか？」

「子供の頃からの付き合いですが」
「なるほど」

どうやら彼ら三人は、昔からの馴染みであるようだ。

一人は貴族、一人は兵士、一人は冒険者という、妙な組み合わせだが。

「しかし、君はエリナに一生を屋敷で幸せに過ごして欲しいと思っているんだな？」

と、そこで、エリナを森で助けたときに、クラウドから聞いた話を思い出す。

クラウドは、コテツの言葉に一瞬不可解そうな顔をしていたが、すぐに得心が行ったと表情を戻し喋りだした。

「一体なにを……、ああ、なるほど、お嬢様に聞いたのですか。お嬢様の夢を」

「ああ、君は反対しているんだろう？」

クラウドは、前回出会った時に、エリナに家を継いで欲しいと言っていた。

その通りに、クラウドは肯く。

「はい。冒険者が悪いと言うわけではないのですが。しかし、冒険者というのは何かと大変でしょう？ 少なくとも、女性の身で、こいつって難ですが、お嬢様は育ちのいい身。あの中で暮らしているのかと問われれば私は首を横に振りましょう」

「だらうな」

コテツも、それ自体には同意する。彼女の細腕で、荒くれの中に入っていけるかどうかは疑問だ。

「お嬢様には、父上の後を継いでいただくことが一番の幸せ。そして、その幸せの道へと導くのが、大人の仕事でしょう」

そう言って、クラウドは笑みを浮かべた。女性に好かれそうな、

爽やかな笑みだった。

「さて、では私はこれで。あなたには、勝手な願いかもしれませんが、お嬢様を楽しませてやっていただきたい。お嬢様が満足できるように」

「善処しよう」

再び去っていった来客を、コテツは胸にわだかまる何かと共に見送った。

そして彼は再び思考へと沈んでいく。

（状況を整理しよう。まず、この件はエリナを中心に行っている。リヒャルトとエリナではなく、エリナを、だ）

そりナを中心に、彼女が冒険者になることへの肯定派と反対派が存在する。それがまず最初の前提。

肯定派は、今回の旅に参加した冒険者、八名。

反対派は屋敷に属する人間であり、中でもこの旅に参加している兵士は五名。

と、それだけならいい。
だが。

それだけなら、初日にルーが敵か味方かなど聞いてくるわけがない。

なにせ、無関係である可能性が高いのだから。

しかし、彼女は聞いた。

推測だが、聞かなければいけないほどに切羽詰まっていたからだ。では、何故そこまで切羽詰まっているのか。

情報を総合して、一つだけ、コテツの胸に浮かび上がるものが、確かにあった。

目的地は、国境に程近い。そして、集まりだしたSH。

答えが、見えてきていた。

そしてコテツは、六日目の夜その時に、答え合わせをすることに決めたのだ――。

夕食も終え、ふらりとコテツが散歩へと歩き出した時、エリナもついてくると言い出し、おあつらえ向きに彼らは二人きりとなった。そう、コテツは答えをエリナ本人に聞こうと決めていたのだから。

「今日の夕飯も美味しかったです。リーゼロッテの料理の腕は流石ですね」

「そうだな。俺もそう思う」

にこにこ笑いながら、エリナはコテツの隣を歩いている。コテツはそんなエリナの様子を伺いながらも、問いを放った。まずは、当たり障りなく。自然な質問を。

「君の故郷は、どんな感じなんだ？」

「父の領地、ですか？」

「ああ」

「そうですね……、私が言うのもちょっとですけど、いい街だと思うです」

言いながら、彼女は笑顔でコテツへと向けた。

「国境が近いから、貿易が盛んですし、旅人とか、色んな人が入ってくるです。だから、活気があって」

だからこそ、冒険者に憧れるのだろうか、とコテツは心のどこかで考える。

「そうか……。——では、街に着いたら君に街を案内してもらっても、いいだろうか」

そして、何食わぬ顔でコテツは尋ねた。

エリナ、彼女の気性は優しい。そして、この旅で少なからず恩義を抱いてくれている。

普通なら、断らない。

「……っ。……ごめんなさい、長旅で疲れてるのです……」

普通なら。

やはり、とコテツは確信を得た。

普通なら断らないであろう提案。それを断るということは、その日に常ならぬ何かがあるということ。

そして、情報を総合して予想を立てるのなら。

「理由は、建前か」

「な、なにを言ってるですか？」

「これから先の言葉は、単なる妄想として聞き流して貰っても構わない。どういう反応を返すのかも自由だ」

コテツのたどり着いた答えは一つ。

コテツは、自分の考えを口にする。

「――君は明日、ルー達冒険者と共に国境を越えるつもりだな？」

びっくり、とエリナの肩が震えた。

確定か、とコテツは心中で漏らす。

「しかも、それを兵士達に気取られているのだろうか？」

あざみがぴりぴりしていると評したのは、何も冒険者達だけではない。

イクール直属の兵士達も、なのだ。

そう、エリナと冒険者達はこの旅のまま国境を越える計画を立て、そして、兵士達は確証があるかどうかは知らないが、それを気取り、不穏な動きがあればすぐに取り押さえようとしていた。

そう考えれば、ルーがわざわざコテツに敵味方を聞いてきた理由に説明が付く。

片一方は作戦開始を今か今かと待ち、片一方はいつことが起こるかと警戒を続けていた、そんな中に現れた冒険者がコテツなのだ。たとえ無関係であっても、なにか関係があるように見えただろう。それ故にルーは多少のリスクを負っても、反応を見て敵か味方かはつきりさせたいと思った。

仲間が呼んだ助っ人か、兵士側が呼んだ助っ人か。コテツの反応を見て見極めようと思ったのだろう。

「……気づいて、しまったのですか」

そして、意外にもあっさりと、エリナはそれを認めた。

「簡単に、認めるのだな」

「もう、兵士にも気取られかけてるですから」

「俺が言いふらしても関係はないか」

「……はいです」

こくり、とエリナは頷いた。

どうやら、計画は本物のようだ。確かに、そう、エリナが冒険者になるならば、国外に出るしかないだろう。

少なくとも、ギルドに登録した時点で国内ではすぐに場所を知られてしまう。

「この旅は、茶番です。兵士の皆さんも、私達が良からぬことを考えているのはわかってるです。だけど、護衛という名目に自然な流れであれば、どんなことも許可せざるを得ないです。だから、茶番です。その茶番で、私たちは戦力を集める事ができました」

「だから、この旅を決行の日に決めたということか」

「はいです。現に、こうしてルー達のSHが終結していますが、兵士さん達がそれを止めることが出来ません。王都付近で大型魔獣が出たのは、嬉しい誤算でしたです」

普段なら止められる戦力集結も、護衛のための一点張りです。通つてしまふ。そういうことなのだろう。

そうして、エリナは言葉を一旦切り、大きく息を吸い込んだ。

「そう。私達は明日、国境を突破して、この国を、去るです。兵士さんたちが立ちはだかるでしょうけど、その時のための戦力なので

す。武力を持って、——切り抜けるです」

コテツの常識では、エリナはまだ焦るような年齢ではないと思う、しかし、この世界では十五を超えれば大人と呼んでもいい空気だ。だから、このタイミングなのだろう。

このタイミングでなければ、ならなかったのだろう。

「……愛されているな、随分と」

この状況に、コテツはそんな感想を漏らした。

片一方は共に国外へ逃亡する覚悟、もう片方は全力でそれを止める。

そしてその二つの勢力は、エリナのために存在しているのだ。

「そうかも、知れないです……」

「しかし、出発を明日に控えていて、君は表情が優れないようだ」

エリナの顔は、お世辞にもいい顔をしているとは言えないような表情だった。

不安や悲しみが入り混じったようなそんな表情。

「それは……、私が迷っているから、だと思う、です」

エリナは、表情が優れぬままにそう言った。

「未だに、か」

コテツは、既に明日に出発を控えている状況であるにも関わらず、迷っているというエリナに、そんな言葉を返す。

そして、もっと早くに覚悟を決めておかねば元も子もないだろう、

と言い掛けて、この年齢では無理からぬことが、と口を噤んだ。

エリナは、言葉を漏らす。

それはまるで泣いているように見えて、まるで嗚咽のようで。

「だって……、まだ、わからないですつ。家を捨てて自由になると、家を継いで自由はなくとも不自由せずに生きる事……、どちらが幸せな道ですか？……？」

その二択は。十三歳の少女には、酷すぎる――。

究極の選択とも言える二択を迫られた少女のそれは、まるで慟哭だった。

どちらかを手に入れば、どちらかが手に入らない。それは、十三歳でぶち当たる現実には、あまりに酷すぎる。

コテツには、答えを返すことが出来なかった。

「わからない。俺には、貴族として安定して暮らすべきだという言葉も、望まぬ未来は蹴って、冒険者として生きるべきだという言葉も理解できる」

一長一短とでも言えればいいのか。多面的に見ればいいところも悪いところもある。

そして、どちらが良いかなど、コテツには判らない。この世界の常識や基準がわからないからでもあるし、そもそも幸せそのものがどのようなものか、その答えすらも持ち合わせていない。

なにせ、コテツすら、それを探している最中なのだから。

「……コテツは、冷静な人ですよ。冷静にものを見てくれる所は、好きです」

そう言う割には、彼女は悲しげで、苛立たしげだった。

コテツは、黙って言葉を待つ。

「コテツは。コテツは優柔不断ですね。……そういう所」

今になって、コテツは考え直す。果たして何を言うべきだったのだろうか。

ベターな答えとは何だったのだろうか。

「——キライです」

嘘でも。

嘘でもどちらかが幸せだと言ってやるべきだったのだろうか。

そうして、エリナの国境突破は始まった。

そして、剣戟響く今。

先日、エリナと話してから、コテツはエリナと会話をまともにしていない。

精々、先ほど別れる前に、意味深に「さようなら、では行きます」と告げられたただだ。

「……ご主人様。それで、私達は見ていただけなんですか？」

始まった戦闘。剣戟と銃声が響く戦場の傍で、あざみは攻めるでもなく、問うた。

「……さてな」

ただ、コテツは冷めた瞳で戦場を見つめている。

いつの間にか、そのままの突破は不可と考えたのか、エリナはルイのSHから下るされ、コテツ達と同じように戦況を見守っていた。コテツは、未だにエリナへ渡せる答えを持ち合わせていない。

問いへの答えは、未だに指先にも掠っていないのだ。

ただ、腹の底に黒い何かが溜まっているだけ。

まるで、タールのような何かが、腹の底に溜まっている。

（ベターな選択肢とは、存外難しいものだ……。む……？）

そんな中、コテツはふと、同じように戦場を見つめるリヒャルトを見つけた。

なんととはなしに、コテツはリヒャルトへと近づいていく。

「おや、何かようすかな」

コテツが近づくと、紳士は困ったように微笑んだ。

「貴方は、アレに混ざらないのか？」

リヒャルトの前に立つなりそう言ってコテツは戦場を指差した。
リヒャルトはたった一人でそこに立っていた。誰に属するでもなく、一人でだ。

だから聞いた。だが、彼は困ったように笑うだけだった。

「私は……、やめておきましょう」

少し遠くでは、マズルフラッシュが煌いて、スピーカーを通した声も聞こえてくる。

『君たちは愚かだ！ お嬢様を連れて逃げようなどと！！ 冒険者が苦労するのは君たちが一番わかっているだろうに！！』

『冒険者を舐めないで！ それに何よ、人を屋敷に押し込めて、デスクワークを押し付ける！ それがあの子の幸せなもんですか！！』

戦っているSHの後方には、SHに乗っていない構成員も控えている故のスピーカーだろう。

だが、リヒャルトは、その二つの勢力を、まるでコテツのように冷めた目で見つめていた。

「結局、リヒャルト・イクール、貴方は自分の娘にどうなって欲しいんだ？」

わからなくて、コテツは聞く。この男は、慌てることもなく、応援することもなく、ただ、戦場を見つめているのだ。

その男は、しばらくの間を置いて、口を開いた。

「……幸せになって欲しいですよ、私は」

「ならば。ならばこれを認めるのか？ 国外逃亡を」
「それが娘の幸せならば」

一陣の風が草を揺らし、リヒャルトははつきりと言いつつ放った。

「貴方の傍で成長し、立派に伯爵になるのが一番の幸せだとは思わないのか？」

コテツが聞くと、紳士は笑う。

「それは、私の幸せでしょう？」

「……そうなのか？」

「ええ、そうでしょう。娘が傍で成長し、立派になる。親としてはこの上ない幸せですが。しかし、それを娘に押し付けたくはない」

そして、リヒャルトは笑いながらにして、こんな言葉をコテツの胸に残した。

「それに。娘が本当の幸せを掴む事こそが、私にとっての最高の幸せですよ。例え、これが今生の別れだったとしても――」

果たして、二択のうちどちらが幸せか、コテツには未だ答えが出そうにない。

むしろ、これは自分には答えが出せないのかも知れない、とコテツは思う。

「ああ、そうか」

だがしかし、腹の底に残る黒い何かが、澄んだような気がした。リヒャルトの言葉はコテツにとって、別の答えをもたらしてくれ

た。

だからコテツは、戦場へと歩き出す。

「ご主人様ー？ 何してるんですか？」

コテツを見守っていたあざみが、彼を追って小走りになる。
そんな彼女を振り向くと、コテツは簡潔に答えた。

「行くぞ」

あざみは、そんな言葉に一瞬目を丸くし、すぐににやりと笑う。

「はいはい来ました行きましよう。どこへなりともあなたとなら」

そして、何もない虚空から、空間を割る様に紫電を纏って相棒が現れた。

「リーゼロッテ、君はそこで待っていてくれ」

「はい、お氣をつけて！」

コテツは、リーゼロッテに声を掛けながら、機体を上り、コクピットへ滑り込む。

続いて、あざみもコクピットへとやってきた。

二人、シートに座り、ハッチが閉まる。

「……しかし、意外ですね、ご主人様」

「何がだ」

「ご主人様のことですから。俺には関係のないことだ、キリッとか言うものかと」

機体を起動させつつ言うあざみに、コテツは至極真面目に返した。

「無関係ではない」

「そーですか？」

「ああ」

何故なら。

生きる理由を探すなら、幸せとは避けられない命題だから。

「ここで逃げるようでは永遠に辿りつけそうにもない——」

伝えに行かねばならない。コテツがこの世界で生きようと真剣に思うなら。

先ほどのリヒャルトの言葉から得たものを言わぬままここを立ち去って、いいはずがないのだ。

伝えられる言葉を伝えないでいる人間が、ともに幸せなど掴めようもないはずなのだから。

「ディステルガイスト、起動。いけますよ」

機体が動き出す。

機体の調子確かめるように、コテツは操縦桿を動かした。

半身になり台地を踏みしめ、機体が構える。

そして、モニタに文字が躍る。

それと同じ文字の羅列が、今回はあざみの光魔術ではなく、腕の文字が書き換わるようにして表示された。

> i 3 5 4 2 8 — 3 1 2 5 <

『Standby... Ready?』

答えは一つしかあるわけない。

「イエスだ。行くぞ——」

まずは、そう。

エリナに本当に冒険者になりたいのか聞きに行こう——。

28話 S t a n d b y R e a d y ? (後書き)

テンポが悪い気がしてならないのは気のせいじゃないと思います。
読み返したりもして、色々と未熟を感じながら現在も推敲中。

書き溜めでも推敲が間に合わない状態だったりしますが、なんとなく楽しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6931w/>

異世界エース

2011年11月21日00時38分発行